女子文壇

第二巻第壹號

明治三十九年一月一日發行（毎月二回）
明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可



晴小袖



女子文壇

第二卷第一號目次

額繪 大附錄(古洞氏筆)晴小袖(石版數遍大判密刷)


恭賀新年
本年も相変らす御愛顧の
程を奉希上候
御題新年の河に因みて
新案諸作 年玉用
帛紗半衿其他袷縫
陳列致居候
白木屋呉服洋服店
東京日本橋
大福喜禮
一月二日三日
賣出し申候

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ



喜谷家傳の實母散は從來製劑紙包のみにして服用上不便不尠と存じ壹貼毎に布袋入とし又上包裝置に於ても賣藥稅法改正に隨ひ包紙形狀に嶄新なる意匠を凝し（右包紙形狀は登錄商標なり）

實用新案登錄第四八貳號

認可相成候に付專用仕候間無御疑念御購求めらんことを謹て廣告す

東京市京橋區中橋大鋸町

本家 喜谷市郎右衛門

電話本局特五十五五十六

女學界

評釋 新派和歌新体詩俳句の評釋等凡て嶄新なり活趣あり意氣あり

創作 凡て青年文士の手に成る隱れたる閨秀作家を紹介す小說美文詩

時事 女子に關する問題は勿論博く文藝上の評論に及ぶ光焔萬々丈

雜錄、社會、懸賞詩文 潔白なり溫厚なり

新年號執筆者中村春雨河井醉茗窪田うつぼ横瀨夜雨西村醉夢他十數名

毎月一回發兌定價十二錢郵稅一錢 講義錄と雜誌を兼るは特色也

發行所 四谷區箪笥町十四番地 **金曜社**

大賣捌 京橋區尾張町二丁目 **警醒社**

大取次 東京堂、北隆館、東海堂、其他雜誌店

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

大日本女學會

●本會が十年來女學の通信教授に盡せる事畏くも　皇后宮の　聽聞に達し特に御歌下賜の恩命を蒙りたり●本會は伏見若宮妃殿下を名譽總裁に奉戴し鍋島侯爵夫人會長として會務を監督す●今度新學期を開き會員を募集す會則希望者は葉書又は電話にて請求あれ

●高等科（學期二個年）　月謝四拾錢東修四拾錢
○倫理（下田次郎）○禮法（佐方鎭子）○敎育（安井哲子）○國文（坂正臣）○文法（岡田正美）○作文（今泉定介）○作歌（大口鯛二）○美辭學（島村抱月）○漢文（菊池晩香）○日本歷史（大森金五郎）○萬國歷史（喜田貞吉）○名媛傳（下田歌子）○日本地理（喜田貞吉）○萬國地理（同上）○地文（脇水鐵五郎）○數學（藤野了祐）○植物（松村博士）○動物（石川博士）○鑛物（脇水鐵五郎）○理化（同上）○生理衞生（三宅博士）○家事衞生（同上）○小兒衞生（三島博士）○家事經濟（三輪田眞佐子）○割烹（石井泰次郎）○裁縫（渡邊辰五郎）○習字（坂正臣）○圖書（武村千佐子）○美學（島村抱月）○音樂（東儀季治）○挿花（戸川正得）○點茶（松浦伯爵）○園藝（池田竹親）○法制經濟（岡戸論介）○附錄機關雜誌なでしこ

●簡易科（學期一個年）　月謝貳拾錢東修貳拾錢
○修身（後閑菊野子）○禮法（佐方鎭子）○國文（同上）○作文（今泉定介）○漢文（菊池晩香）○歷史（大森金五郎）○地理（喜田貞吉）○數學（藤野了祐）○博物（脇水鐵五郎）○理化（同上）○生理衞生（三宅博士）○家事綱要（後閑菊野子）○家庭敎育（三輪田眞佐子）○割烹（石井泰次郎）○裁縫（渡邊辰五郎）○習字（坂正臣）○圖書（武村千佐子）○史傳（下田歌子）○お伽譚○詞藻○質問應答○雜錄○雜報

目下貳卷迄發行　入會の好時機

東京市麹町區下二番町三七　大日本女學會　電話番町一三三〇


美術
造花材料
謹賀新年
各女學校御用
附屬品並ニ造花器械類一式
營業目錄御入用ナレバ往復端書ニテ御申越被下度候
東京市日本橋區横山町壹丁目拾六番地
天野卯兵衛
電話(特)浪花一六四三番

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添をこふ

日本の家庭

▲一月一日發行第二卷五號要目

紙數增加◉子供欄新設◉

◉平和の春（口繪）
◉おめでたう
◉家庭の新年
◉西洋の子供
◉愛想よき子供
◉臺所改良
◉わが家の子供
◉書きそめ
◉大馬小馬（お伽噺）
◉お馬どう〳〵

古涯筆
記者
山脇房子
芳賀矢一
文學博士 大村仁太郎
塚本はま子
樋口蘭林
麻生たつ子
福田琴月
せんせい

◉「童謠」お馬ピン〳〵
◉子供を褒むること
◉衣服の裏について
◉家庭の干渉
◉新年中行事
◉主婦の學問
◉わかれ
◉家は狹くとも
◉育兒片々
◉子供の癖
◉松の內
◉正月のお遊び
◉日本料理正月重献立

太郎
笠峰想夫
星常子
せゝらぎ
紫溟堂主人
伊藤ふく子
蟠幽泉
記者
實驗生
沼田藤次
河井咀華
あかさか
ゆふづき

▲一冊拾壹錢六冊六拾錢十二冊一圓拾錢

學習院教授大村仁太郎先生著

家庭教師としての母

和裝美本全一册◉定價金七十五錢（進物用帙入金十錢增）◉郵稅拾錢

進物用帙入

◉第一章　婦人の本分は那邊に在る乎
◉第二章　母は如何にして其天職を盡すべき乎
◉第三章　母は如何にして從順の美德を養成すべき乎
◉第四章　母は如何にして誠實の美德を養成すべき乎
◉第五章　母は如何にして廉直の美德を養成すべき乎
◉第六章　母は如何にして自信力と自覺心とを養成すべき乎
◉第七章　母は如何にして勉勵と秩序の精神を養成すべき乎
◉第八章　母は如何にして勤儉の精神を養成すべき乎
◉第九章　母は如何にして禮讓の觀念を養成すべき乎

以下六章あり

附錄　母親氣質　廿四種

專門大家十二名選評幷に執筆

家庭講話 母と子供

和裝美本全一册◉定價金六十五錢（進物用帙入金十錢增）◉郵稅八錢

進物用帙入

この書は◉婦人の修養◉家庭敎育◉家庭衛生◉家政◉家庭の改善◉小說◉お伽噺◉和歌◉遊戲◉料理法等について十二名の大家が、各專門得意の意見を述べられ、加ふるに地方の俊秀なる紳士淑女が、實地經驗上よりしてこれ等の諸項目に關する有益なる意見を寄せられたもの〻中で特に卓絕せる且つ最も趣味に富むもの〻みを選拔して擧げたものであります（總振り假名つき）

◉發兌　東京神田表神保町　同文館◉大賣捌　東京早稻田　同文館支店　大阪備後　吉岡寶文館

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ



東海道の富士



三宅克己先生筆

小島工藝石印

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

第一號第二號 増刷出來 定價改正 大飛躍

文藝畫報

紙面大豊富

第三號出來

壹月三日發行

類書中無比之

最低廉價雜誌

第四號二月一日發行

改正定價

一冊金拾五錢〇三冊前金四拾五錢〇六冊前金八拾六錢〇十二冊前金壹圓六拾八錢◉直接注文申込者に限り郵稅不要郵劵代用必一割增

第三號口繪目次

口繪

〇表紙貴婦人……山中古洞

〇挿畫繪葉書今様(石版拾色刷)鏑木清方

〇嬉しさふ(アート二色刷)櫻川ひて子

〇富士びたへ(全上)……大阪 富田帘千代菊 東京 伊勢家榮子

〇かるた會(山中古洞)〇滑稽吞遊び(大越麗外)〇郷の小唄〇直して頂戴(芳野尙方)〇朝湯(佐藤素洲)〇白梅 紅梅〇日なたの花(市川秀方)〇春駒(古山晴方)〇豐頰〇ひき初め(吉本雅美)〇梅(水野年方)〇春の川風〇生粹〇鳥合會〇滑稽〇四つの緒琴〇春の郊外〇艶姿〇トランプ〇其他美人澤山挿入

毎號畫家

(風俗畫)水野年方▲宮川春汀▲山中古洞▲鏑木清方▲市川秀方(諷刺ポンチ畫)齋藤松洲(洋畫)中村不折▲其他有名畫伯

▲投書歡迎!!

新題(俳句、川柳、狂歌、都々逸、端唄、地方俗謠、一口噺、諸國名物、端書文、見立三幅對、滑稽畫等

〇電話 見た事聞た事總て何でも浮世の穴さがしなりどし〳〵投稿あれ

〇〇編輯餘錄—何れも材料は豊富也

美術寫眞版(繪畫、風景、美人新風俗)(澤山挿入)

特約大賣捌

(東京市)東京堂〇東海堂〇北隆館〇上田屋〇良明堂〇勉强堂(大阪)盛文館〇(北海道旭川)齋藤弘文堂(越後長岡)酒井〇目黒其他全國書店 最寄になくば直接文光堂へ注文あれば郵送料申受けず候

發兌元 東京市神田區旅籠町一丁目 文光堂

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

◉廿世紀大發明 寫聲機平圓盤發賣

曲譜大形價壹圓七拾五錢以上五圓迄
器械價參拾七圓以上八拾圓迄

軍隊用（觀兵式奏樂、王師遠征、征露軍歌、愛國行進、軍艦マーチ、國歌行進、旅順港進軍、黄海大捷外數十種）

慰問用（月下陣、七生魂、北白川宮殿下臺灣行、義光武勇錦御旗、扇ノ的、楠正成最後、大高源吾、外數十種）

學校用（教育勅語、君ヶ代及天長節、楠公櫻井驛、廣瀬中佐、函根八里、國ノ御柱、黄金ノ花、九連城外數十種）

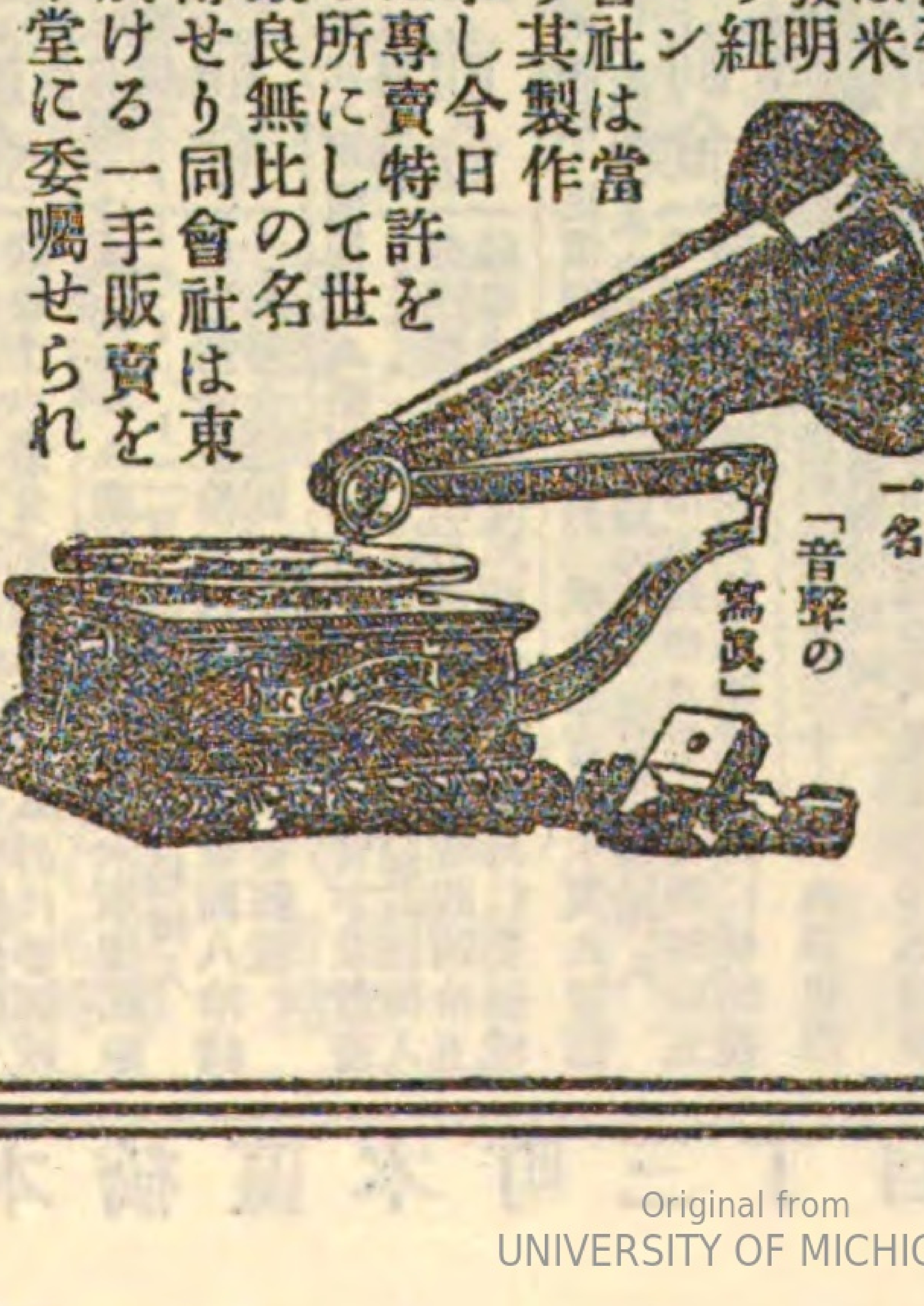
家庭用（子寶、木村長門守勘忍袋、八千代獅子、大盃、慈善、仙臺萩、金太郎ト大江山、桃太郎、兎ト龜外數十種）

祝宴用（高砂、石橋、猩々、羽衣、鶴ノ巣籠、夕顔、娘道成寺、夕霧、靭猿、鶴龜、老松、雛鶴三番叟、外數十種）

練習用（謠曲、唱歌、長唄、常磐津、義太夫、清元、草笛外數十種）

◉平圓盤曲奏者

陸軍軍樂隊
寶生九郎
觀世清廉
杵屋六左衛門
芳村伊十郎
常磐津林中
吉水經和
橘知定
納所辨次郎
荒木竹翁
合田春悦
松林伯知
竹本相生太夫
清元彌生太夫
長原梅園社中
其他諸大家數十名



寫聲機平圓盤は米國の發明に係り紐育コロンビヤ會社は當初より其製作に從事し今日にては專賣特許を有する所にして世界中最良無比の名聲を博せり同會社は東洋に於ける一手販賣を特に本堂に委囑せられたり

本堂は黽勉勵精以て大方諸君の尊意に滿つべきを期し敢て愧らざるを信ずるなり

東京市京橋區尾張町二丁目
電話新橋特三三三、三一五三
東洋一手大販賣元 **天賞堂**

寫聲機平圓盤曲名一覽御希望の向は郵劵貳錢封入御申越あれ

◉今回新製日本譜平圓盤及新式器械共更に多數着荷發賣仕候


社主野口氏

創業滿一周年の女子文壇社

女子商業學校長和田垣謙三君　　第一高等女學校長伊藤貞勝君



日本女學校長西澤之助君

東京裁縫女學校長渡邊辰五郎君　　立教女學校長小林彦五郎君

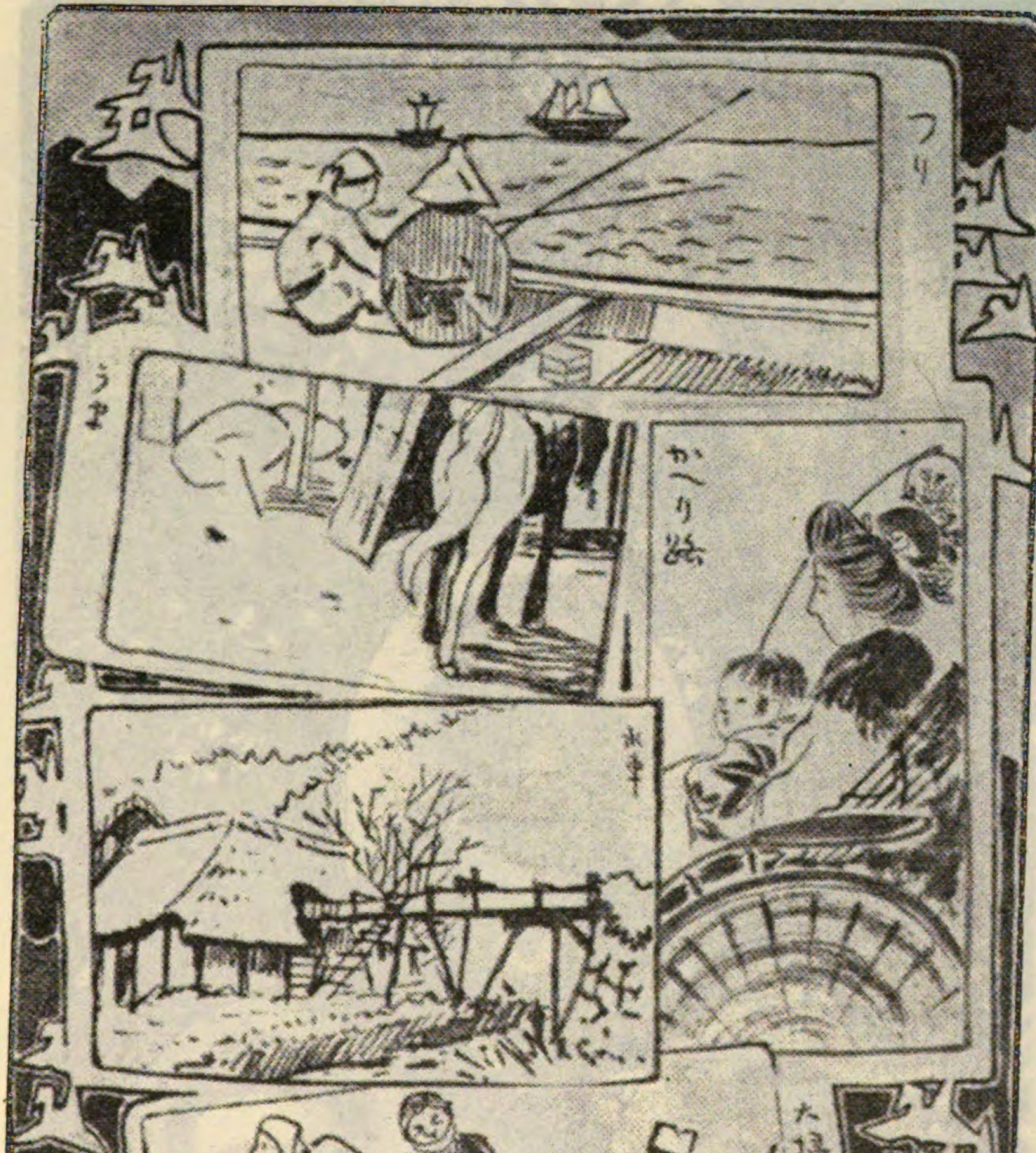
女子美術學校長佐藤靜子君　跡見女學校長跡見花蹊君



三輪田高等女學校長三輪田眞佐子君

女子英學塾長津田梅子君　青山女學院副校長スペンサー君

古洞先生選　懸賞圖畫（其一）



つり（特別第二賞）群馬縣新田郡綿打村大字金井　田所きよし作○うま（特別第三賞）
神田區千代田町廿一秦専治方　小磯君江作

○水車（天賞）福岡縣山門郡柳河町　富安眞砂作○かへり路（地賞）下谷區中根岸八十
一　黒澤みふ子作○大掃除（人賞）神戸市兵庫永澤町二丁目一六○　水越たつ子作

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

數年難治の慢性胃病を根治し消化機能を強壯健全にする靈藥

慢性 胃病根治

從來世に胃病藥頗ぶる多しと雖ども皆一時の苦痛を凌ぐ制酸劑(即ち重曹、マグネシヤ、苦味劑の如き一時おさゑムネスカシ的舊式賣藥)のみにして未だ嘗て根治的に其病の基因を斷つ良藥あるを見ず、本劑は獨乙國高名大醫メーデル氏處方に基き本邦胃病患者に適切なる最新有効藥を配合し百方實驗其奏効顯著なるを確認發賣せし最も進步せる完全なる新藥にして數年難治の頑固なる**慢性胃病**にても根本より**誓つて根治**し胃腸を健全にし消化機能を強壯ならしめ食慾を催進し便通を快くし氣力を壯にし精神を爽快活潑にする空前の完全最新藥なれば從來種々雜多の胃病藥を用ひて効なく多年病苦に呻吟せる患者は一日も早く本劑を服し病根を斷絶し無病強健の大幸を得られよ輕症は壹劑重症は貳劑慢性症は參劑にて根治確證す(藥價)壹劑四拾貳錢貳劑八拾錢參劑壹圓拾錢郵劵代用貳割增し

肉體 雪白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黑き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色**に**變化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓貳拾錢特別製分壹圓七拾錢

貳藥以上**專賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

月やくおろし

本劑は胃腸を害せめず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ずや忽ち**快通流下**する特効あり本劑參劑分を川れば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止及び**血塊**にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及**惡血毒血**を一掃すること確證す但し本劑は其奏効極めて**峻烈顯著**なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓貳拾錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢(注意)本劑の**大盛**を羨みて近時續々**類似爲藥**顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんとを乞ふ



わきが (腋臭症)

根治確證 新發見藥

醫療賣藥百ケ手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發又は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脫せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢着金即刻送藥す郵劵代用必ず二割增の事

貳藥以上**專賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房** (電話下谷五四六番)

文學博士 小杉榲邨先生校訂
日本女子大學講師 跡見女學校舍監 跡見桃子先生題字
高等女學校 齊藤梅子女史著

記事消息 女子文のはやし

全國高等女學校及同程度女學校參考書

五十一號

製本優美高尚
全一冊
金三十八錢
郵稅金六錢

女子記事文略目次
春之部
夏之部
秋之部
冬之部
雜之部

日用書翰文種類略目次
祝ひの文　慰問の文　招待の文　依賴の文
請求の文　報知の文　誘引の文　音物の文
謝禮の文　羇旅の文　哀悼の文　忠告の文
右の文數百二十餘題

女子の文範として良書に乏しきは女子教育の缺陷と謂はざるべからず本書は曾て高等女學校に從事せらるゝ多年の實驗に徴し文章の秀逸をもつて稱せられ即ち其述作は內國又は海外の諸學校にまで摸範として贈られ或は新聞雜誌に迄掲載せられたるが如き最も文藻に富み最も文才に長じたる齋藤梅子女史が手に成りて年の間篋底に秘せられし中につき其萃を拔き其秀を採りたるものにして加ふるに小杉文學博士が親しく筆を採りて詳細なる校訂に日子を費されたれば益々光を添へぬ女史は之を公にするを望まざりしを女子教育に裨益する所あらしてんとて書肆に説ふて出版することゝなりぬ實に本書は其事項の適切なるのみならず敘述の流麗なる一度之を繙かば興味津々卷を掩ふことを忘るゝに至らん殊に現今普通に行はるゝ所の日用書翰往復通信の文を書くときは實用簡明に何人にも能くわかりやすし特に女子記事文の如きは目下高等女學校にて教授せる程度に當て巧妙佳絶美文を以て作り品位を高め世の才媛女學の徒が一日も座右を缺くべからざるの珍書たるを疑かはず

發行所 東京市京橋區桶町二十一番地 內外圖書出版發賣 廣文堂書店

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

文士奇譚

文學士久保天隨君編（再版）

口繪（鹿澤雪夜屋に上りて赤穗義士の討入を疑ふ
蜀山提灯に描きて下男の貧を救ふ（不折畫伯筆石版五色摺）

文士印譜：（二遍刷）▲附錄：（名著序文集）

▲全一册大判百三十頁 正價拾錢 郵稅一錢

立志訓

文學士 大町桂月先生序
長谷川天溪君校閱
立野天風君編

（諸新聞雜誌の好評）第三版

▲正價金二拾錢 郵稅二錢

全一册 袖珍

文學博士建部遯吾君述
原田道寛編

歐洲 學生の生活

全一册袖珍 正價二拾錢 郵稅四錢

學生必讀 旅行の友

全一册美裝 實價拾六錢 郵稅二錢

秀才文壇

六卷第壹號 ―《一月一日發行》―

新年附錄 大元帥陛下御愛馬（初來號）額面寫眞

▲低廉無比▼

毎月二回發兌（一日十五日）

石版極彩色畫 美術繪葉書添

價 一册拾錢 六册五十七錢 十二册一圓八錢 送無料

▲類書中王▼

投書歡迎 毎號大家親切選評 獎學賞與法あり

父母と子供

慶應義塾々長鎌田榮吉君題辭
慶應義塾教授菅 綠蔭君譯

（再版）

全一册中判 洋裝美本 正價參拾錢 郵稅四錢

目次○總論●新誕生兒に就て●第一期の教育●幼兒の言葉に就て●餘計なる心配は無用なり●子供は愛す可きものなり●子供は奴隸にあらず又暴君にあらず●理論は餘り早く敎ふ可からず●虛言及び模範の效力に就て●體育に就て●衣服に就て●睡眠に就て●五官の修養●觸官に就て●視官に就て●嘗學に就て●聽官に就て●音聲に就て●味官に就て●勉強の時代●好奇心に就て●實物敎育に就て●學問と趣味●實驗物理學●實學に就て●「ロビンソン、クルソー」●結果―十四五歲頃の子供

此軍艦帖は紀元節をトし東京市四谷第一、二、三尋常高等小學校を始め全國重なる各學校にてつまらぬ菓子抔を廢し數萬部御買上の命を忝ふせり殊に「紀念品としては上乘の者なり」との讃辭をさへ賜はりしは無上の光榮といふべし

◀美術寫眞銅版三色刷▶

軍艦寫眞帖

第七版

附錄大捷軍歌集

全壹册袖珍美裝價金七錢

（送料 二冊まで 三冊まで 二錢）

勅語……上等洋紙鮮麗金刷

出版元 東京神田旅籠町壹丁目廿三番地 文光堂 賣捌 東京堂外全國書店

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

心乃花

編輯主幹　佐々木信綱

第十卷第一號（一月一日發行）

○蝸牛庵雜筆　幸田露伴
○佛典の中の花　姉崎嘲風
○機械（小說）　小栗風葉
○竹取について　坪內逍遙
○村役塲（小說）　夏葉女史
○新詩三章　上田敏
○鵜飼島　小山內薰
○喜劇新式教授法　藤澤文學士
○踏歌節會の故事　小杉文學博士
○萬葉集中の花　鴻巢盛廣
○桂園一枝管見　井上通泰
○良ちやん　小山內八千代
○戯咏歌に就きて　吉岡文學士
○邦人の一能力　沼波文學士
○サンタクルーツ　長文學士
○狂夫吟（短歌）　川田順
○まぼろし　金子文學士
○凱旋（脚本）　新井雨泉
○嫁入車（小說）　大塚楠緒子
○ひかり（短歌）　佐々木信綱

△定價一冊郵稅共拾參錢△日本橋本石町一ノ一竹柏會出版部

恭賀新年

圖書出版　業務擴張

原價低廉　發送迅速

書籍雜誌御賣捌
東京市京橋區尾張町二丁目
東海堂
電話[illegible]

女子文壇特約販賣

製本出來次第新聞紙を以て再び廣告す

出版界空前之廉賣廣告

日本女子大學教授 鹽井文學士。巖谷小波 先生
女子高等師範教授 尾上文學士。廣津柳浪 先生
東京帝國大學講師 佐々木信綱。山中古洞 選評

編輯局校訂

女子文壇

懸賞文集

附録 大家文集

全一冊 中判洋裝美本 上等洋紙印刷 四百二十頁 口繪には選評家肖像及懸賞畫色刷數葉入

定價一冊金貳拾五錢 豫約申込 直接本社へ注文に限り 特別金貳拾錢 郵送無料

第一版賣出しは一月上旬なり 前金拂込の順序に送本す

創業滿一周年ヲ祝スル爲メ 豫約延期す (有効)一月三十一日迄

本書は女子文壇第一卷投稿の中より懸賞傑作のみを網羅したるものなれば女子が文章を練り詩歌を學ぶに摸範的作文書としては唯一の寶典たるべく殊に附録として諸大家の作文上の心得となるべき名文を載せ修養の便に供したる無比の良書なり

出版元 東京京橋大鋸町 電話本局六〇七 女子文壇社

特約賣捌 東京堂、東海堂、北隆館 上田屋、良明堂、各書店

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御附添を乞ふ

高等女學通信教授
大日本淑女學會

▲貳ヶ年卒業▲講義録月刊一册參百頁▲講義平易懇切▲講師は專門の名家▲會費低廉

目下入學の好機

詳細なる規則は申込次第進呈すべし

本會講義録の批評

▲女子文壇評　通信教授法により、高等女學校程度の教育を授けんとするもの也。講師は多く女學校に教鞭を執らるゝ專門の名家にして、講義の平易にして懇切なるは、慥に他の講義録に優れりと云ふ可し。都門女子遊學の危險なる今日、女子にとりては無二の寶典と云ふに憚らず。講義の外、雜録、小説等六十餘頁の附録ありて、興味多き雜誌の觀を添へ、口繪には新派畫家の傑作數葉あり、體裁に於いて、講義録空前の美冊也。

▲中央新聞評　講述何れも平易にして親切を極めたれば初學の講習に最も可也

▲毎日新聞評　米國の通信教授法を參酌せる者　文字平明說明懇篤を盡くせり

▲朝日新聞評　女生獨習の便を圖り平易懇切を旨とせる女學講義録を發行せり

▲二六新聞評　高等女學校の全課程を講了すべく各講述者の態度頗る着實なり

▲日々新聞評　講義はすべて平易と親切とを勉めて毫も難解の憂なきに似たり

▲都新聞評　講義平明用意親切なれば數多き女學雜誌中一領域を拓き得可し

▲貿易新聞評　從來の講義録中最も進歩したるものゝ一、三百頁の大册子なり

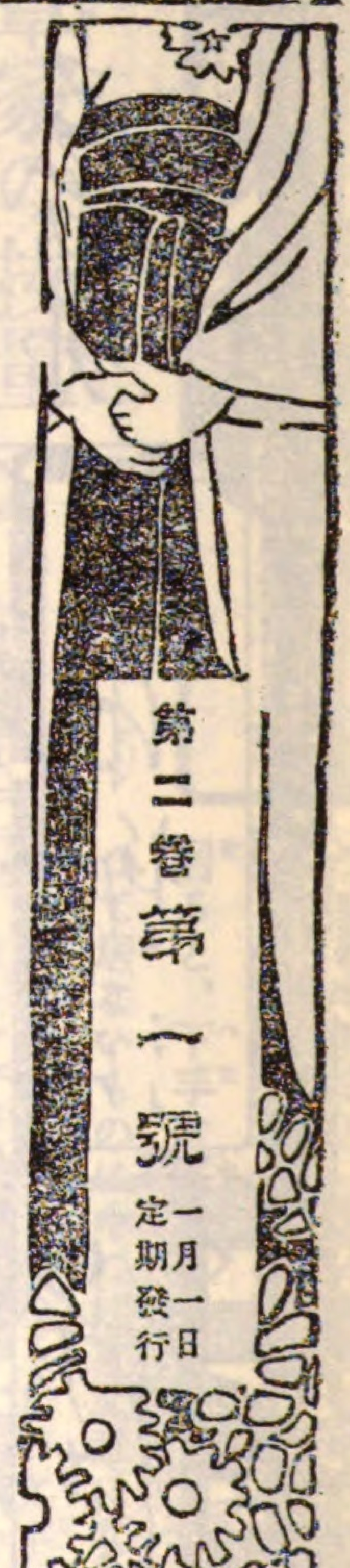
▲報知新聞評　講義録多しと雖も實益と趣味と併せ有すると斯くの如きは稀也

・大・好・評

東京神田南甲賀町十番地
（電話本局三千四番）
大日本淑女學會



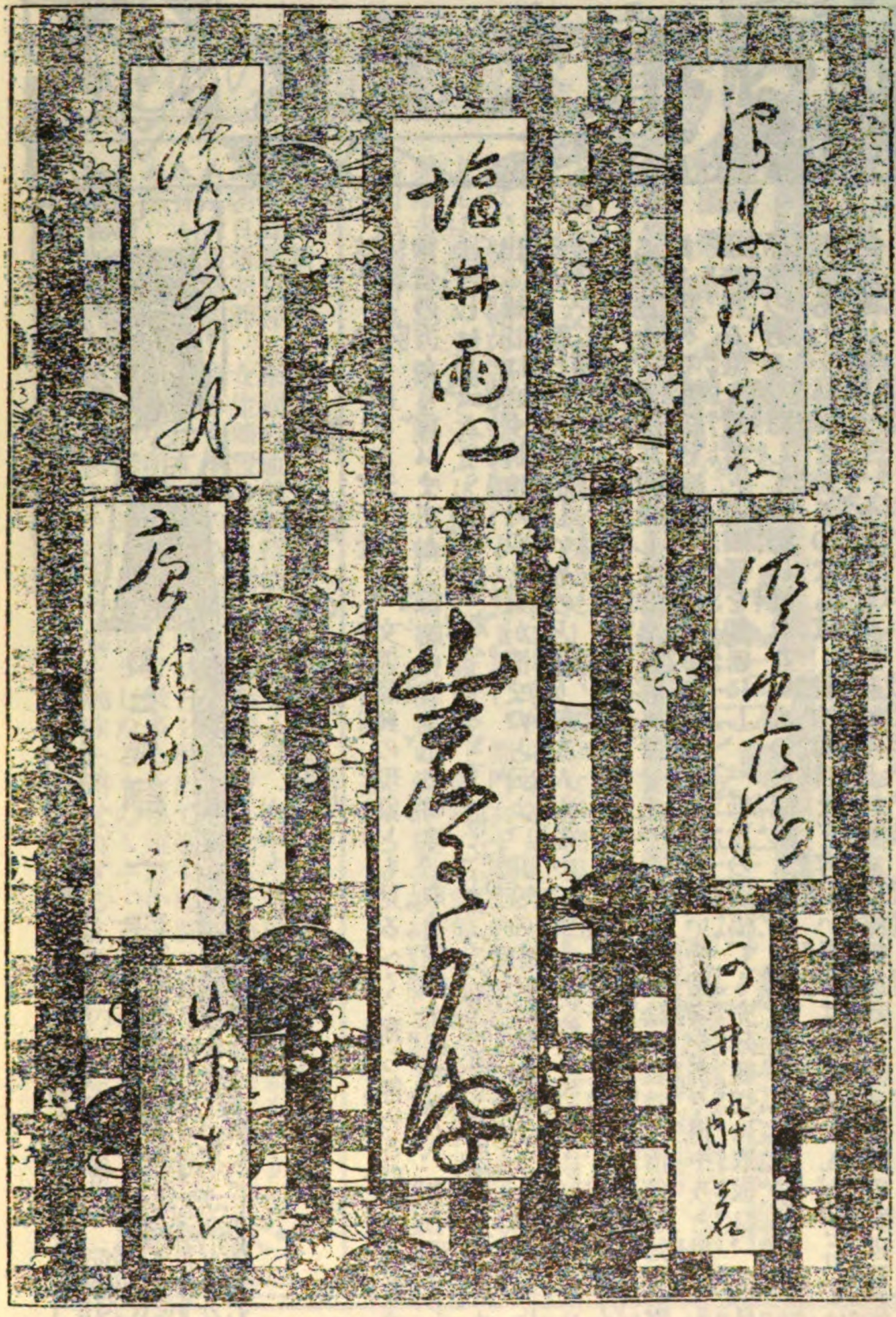
女子文壇



第二巻第一號
一月一日定期發行

雑誌の選擇

雑誌の多く出ると云ふ事は、文運隆興の現象とも見るべく、強ち咎める事でもありませんが、讀者の方から言ひますと、雑誌の多く出る時は、取捨選擇に迷ひ易く、玉石混交を辨別するに苦しむと云ふやうな事が、起つてきます、世には一つの雑誌道樂とも稱ふべき人もあつて、出る雑誌は必ず購讀せぬと氣が濟まぬと云ふ、其等の中には讀む爲よりも飾る爲に買ふ人も多い、新しいもの新しいものと移り氣な人も多い、要するに餘りに多くの雑誌を求める人は、必ずしも多く讀む人、深く讀む人と限らぬらしい。眞に雑誌を愛讀する人は自分の最も信ずる雑誌を、永遠に購讀して容易に移りません、それには無論其雑誌の價値を知る事も必要です。吾々の雑誌を編輯するには毎に此容易に移らない愛讀者を多く得やうと思ひますので、出來得る限り讀者との關係を親密にし、一紙片の原稿でも充分親切に取扱ひ、實質のある、品格のある、而して時勢に後れないものを編輯ふと云ふ考へてす。唯漫然と原稿を詰込んで、雑誌らしい躰裁を飾るのならば、雑誌編輯ほど容易い事業はありませんが、それては無責任、無意味になります。少しても文藝發展の上に資する處のあるやう、讀者の爲に思想の修養になるやうと心掛けて編輯らねば、文藝雑誌記者の本分を盡すとは言はれません。



女子文壇選評諸大家寫眞筆蹟

文章家の技量

文學士　岡田正美

文章は外形からいふと、文字の連續てあるから、字が書けさへすれば、文章は出來るわけ、――支那流にいふと、語を重ねて句をなし、句を重ねて節をなし、節を重ねて章をなし、章を重ねて篇をなすといふやうな、順序て、語を知り、文字を知つて居りさへすれば、文章はわけなく出來るわけ……てあるが、實はさうは行かぬ。是は文章の文章たるところの、その外形にあるのてはなくて、他にあるからてある。うつくしい文字て書いてあると、下手な文章でも上手に見え、うるはしい語句がつゞけてあると、どんな文章でも立派に見えるが、しかし、その文章を人に讀ませて、眼をつぶつて聞いて居ると、下手な文章はやつぱり下手に聞え、文章になつて居ないものはやつぱり文章になつて居ないことがわかる。――是て、うつくしい文字てきれいな紙に書いたり、佳句麗語集とかいふやうな書から、うるはしい語やむづかしい句などを探し出して、むやみに書き連ねたりすることは、ほんの初學者おどし、こけおどしに過ぎないことて、まことの文章といふものゝ方から見れば何の値もないのてあることがわかるてあらう。



おもしろい事がらを書きあらはした文章はよんておもしろく、つまらない事がらを書きあらはした文章はよんてつまらない。――是は無論のことてある。――てあらから、何かおもしろい事がらがあつた場合に、それを書きあらはして、讀者をしておもしろがらせたと

いつて、それて、その作者をば文章家であると定めるわけには行かぬ。かやうなことは少しく文字ある人ならば大抵の人に出來ることとて、大抵の人に出來ることである以上は、それを以て殊に文章家たる資格がある手腕がある技量があるとするわけには行かぬのである。

さらば、その、文章家たる資格、その手腕がある、技量があるといはれるところは、何處にあるかといふにまづおもしろい事がらを見付けること、次には材料の取捨幷にその組立方、次には文句の言ひまはし方、次には語句の撰擇方、まづ重に此邊にあるのてある。

(一)おもしろい事がらを見付けること

おもしろい事がらを見付けることはなんでもないことのやうてあるが、さうてない。勿論、萬人の認めておもしろいとする事がらを見付けることは實際になんてもない事て、所謂三才の小兒といへども見付け得るのであるが。この日常の紛々たる生活の中に於ておもしろい事がらを探せといふことになると、三才や五才の小兒にはとても出來ない、二十才三十才の大人にも隨分むづかしいからう。奧州の松島、安藝の宮島、乃至は明石、須磨、京都、興津、日光、鹽原など、又はその近邊て景色の佳い寫眞を撮れ、といへば、如何なる初心者ても大抵な寫眞をとることが出來ようが、もし上野以北、野邊地以南に於て日本鐵道の沿道に於ての佳い景色の寫眞を撮れといつた場合には、幾人が見られる樣なものを撮つて來るてあらう。餘程の經驗があり又餘程の技量がある者てなければ、とても見られるやうなものは撮つて來られまい。いくら樹の下からのぞいたとても、いくら小川をたてにして見たとても、本來平凡な景色はやつぱり平凡な景色に止まるので、此間に於て立派な處を見付けることは餘程の人てなければ、出來ないのてある。さやうな平凡な處、佳い景色などなささうな處から立派な寫眞を撮つて來る人がもしあつたならば、さやうな人は實に技量のある人、

手腕のある人といはなければならないのである。文章に於てもその通りで、こゝはといふ見處のなささうな事がらの内から、意外なおもしろい事がらを見付出して、讀者をして大に歎賞させるものがあるならば——新聞紙上で見る一口話や、狂歌、狂句などの中にも時々この例がある。——此等は確に文章家たる技量の一部分を具へてをるものといつていゝのである。(一口話狂歌、狂句等の例を擧げたから事によると前にいつたおもしろいといふ語が誤解されるかも知れぬ。右にいつたおもしろいといふ語は、おもしろい、をかしいなどと、一列にいふおもしろいといふ語と全く同一ではない。おもしろいこと、をかしいことは勿論、かなしいこと、くるしいこと、又大きいこと、小さいこと、おそろしいこと、すごいこと、等凡て所謂美感を與ふることを總稱しておもしろいといつたのである。誤解されないことを望む。)



おもしろい事がらを見付けるといふことが文章家の技量の一つであるとして、さて、その技量は如何にすれば得られるか、之を知り、かつ、行ふことが大切である。この技量を得るには、理論と實際との二つがある。理論といふのは、美學の書や美術の書などを讀んで、美とは如何なるものか、美の要素は如何なるものか、美といはれるには如何なる條件を具へてをらねばならぬか、といふやうな理屈の方のことを知ることである。實際といふのは、實地に就いて、その物に美のあるところを調べるのである。——自分で調べても又他人に教へてもらつてもいゝ。——即ち、寫眞ならば、寫眞について、何故にこの寫眞がいゝといはれるのであるか、そのいゝ所以はどこにあるか、といふことを調べるのである。物によつては、右の方を一部分隱して見て、殘の部分と全躰とどちらが優つて居るかといふことを考へて見る、又は、反對に左の方を一分部隱して見て

考へて見る、又は、下の方を一部分隱して見て、考へて見る、又は上の方を一部分隱して見て、考へて見る。又、繪畫の例でいへば、茲に枯枝に烏のとまつて居る畫があるとして、之につきては、烏のとまり場所をも少し幹の方へよせたらばどうであらう、又はも少し枝先の方へよせたらばどうであらう、など考へて見る、又、枝の形も枝先をも少し下へさげたらばどうであらう、も少し上へあげたらばどうであらう、又、枝の數も一本增したらばどうであらう、一本減したらばどうであらうなどと考へて見る。さて、かやうにして見て、もしその增減又は移動が原作を損ずる嫌のあることがわかつた場合には、更に一歩をすゝめて、何故に此の如き變更を加へてはならぬかといふことを研究せねばならぬ。文章に於いても同樣で、世に名文といはれて居る文章をとりて、右の寫眞又は繪畫に於て試みた如くに、或は冒頭を削つて見る、或は結尾を削つて見る或は中ほどの處を適宜に削つて見る、或は句又は節を上下顚倒して見る、或は語句を他の語句と取り換へて見る。かやうにして、此等の變更が凡てよくないことがわかつたならば、茲に一歩をすゝめて、何故に此等の變更を加へることがよくないかといふことを研究してみなければいけない。——若し、その反對に、變更を加へた方が原作よりも優つて居るといふことがわかつた場合には、何故に改作の方が原作よりも優つて居るといふことを、研究して見なければならない。——そして、又、寫眞でいへば、かやうに撮る方がいゝとおもつたならば、このやうに自分で撮つて見る、繪畫でいへばかうあるものはよくないとおもつたならば、いゝように自分で書き改めて見る、又、文章でいへば、わるいと思つた處はいゝと思ふやうに如何樣にも自分で改作して見る、而して、自分の考と實際と果して一致するかどうかといふことを調べて見なければならない。凡て理由のない批評は美術的製作品につきて容喙する權利がなく、根抵のない述作は美術的製作品として承認せらるべき資格がないものである。

（未完）

無題

文學士　尾上柴舟

濃き睫毛

濃き睫毛もてつゝまるゝ
眼の星はかげ消えて
あせぬ薔薇の紅に
露こそやどれ唇は
涙にしみし白布や
息なき君を見つむれば
悶え迷ひし夜の森の
鐘をまた聞くこゝちして

天の扉を

天の扉を朽ちしめて
樞に銹を與へなば
時の力も強からむ



よわきその子を墳墓に
力ある子を零落に
おとすは何の榮かある
高きに媚びて低きには
たかぶる俗吏それのごと
時何なれば地におごる

白楊に

白楊に城はかくれて
ゆく水に塔影長し
白衣の清きをまとひ
人は寐る若草のうへ
願くは人よさめませ
さめまして我に告げませ
われとそは城をうたひぬ
水をうたひ塔をうたひぬ
されど君君が來まして
結末の一句は飛びぬ

「何處にか」とのたまふか
そは君が君が御胸に
あゝ一句それありて
わが詩はならむ
城と水と君をたゝふる
全きわが詩は今ならむ

綠したゝる

綠滴る樹のもとに
鳥囀く朝の待たるゝや
鳥よりはやく東の
清き光の待たるゝや
光しさゝば森をおほふ
暗の裳裾は破れはてむ
やれしかげより鳥啼きて
樹によるわれに歌を敎へむ

彩霞

彩霞ひく朝の戸を
蝶にひかれていでたゝす

君は野の王花の王
見よ君が行く野路遠く
花てふ花はうなだれて
接唇しぬ君が玉靴を

くだけし瓶を

くだけし瓶を手に取りて
のこれる滓は吸はむとも
一たびゆきし幸を
ふたゝび逐はじわれ逐はじ
ゆくべきものはゆかしめて
胸平らかになりぬべし
缺片一つを拾ひても
よき思出とならぬごと

天の翠の

天の翠の野に眠り
小羊なせる朝雲に
鞭とる神のもしあらば
人はつれなきものならず

革命の響

文學士　沼波瓊音

長かつた學校生活も終を告げて、自分はいよ〳〵卒業とやらいふ事をして、學士とやら云ふ者になつたのださうな。目出度いといふ人もあつた、豪いといふ人もあつた、何の事だ、卒業が何が目出度い、學士が何が豪いか。仕上げをするのはこれからである、ラストタッチをするのはこれからである。否、自分の學識はまだ仕上げラストタッチの處までは未だ中々遠いのである。この抽斗にはかういふ物が入て居るといふ事を教へられたゞけで、まだ其抽斗を引出しても見ないでは無いか。だから、自分はなほ東京に居て勉强する、石に食ひ附いても大學圖書館を離れないと友達にも誓つて居たが、嗚呼到底人間はコンヂションの下に働かずには居られない、如何に悶えても田舍稼をしなければならぬ様になつてしまつた。山又山の奥の、擂鉢の底のやうな處へ這入て、音樂も美術も文學も無い處へ往つて、村童を相手に、何でも知たやうな面つきをして、乾燥な教授をする村夫子になるのである。情ないでは無いか。飲酒漁色に耽る者を人は墮落といふ。併し卒業して直に村夫子になるのは、それよりも意氣地の無い墮落である。嗚呼自分は墮落しなければならぬのだ、廢學しなければならぬのだ、



こんな事を考へると、旅立の用意をする氣も無くなつて仕舞ふ。もう明後日は赴任て、今夜は親切な友人が自分の爲に送別の會を催して呉れるさうだ。箇人々々の送別の宴は頃日中打續いて、體が變になつてる程であるが、今夜あゝ今夜の會は最後の最意味あるものである。今夜の會は自分の親しい人のみ、在京七年間に東京で出來た友人のみ、の會合で既往は勿論、將來にも、今夜のやうに親友を並べて見

ることは出來ないのだらう、と思ふと、樂しい樣な悲しい樣な妙な心持になつて來る。

書籍類の始末を宿の者に託して、鄉里へ向けて手紙を出したところへ、知己の本屋が來て、教科書のことを種々話してから、御赴任地はなか〳〵良い處です、御目出度いです、結構です、と頻りに「です」を浴びせかけられて居ると、電話口まてと下女の注進。行つて見ると、自分の赴任する校の校長からで、一寸旅館まて來て呉れぬかとの事。早速本屋に失禮して、車を飛ばして行つて種々相談する事有つて、頓て宿へ歸つた。封書や葉書が澤山來て居る、それを片端から讀んでる所へ、友人が三人フロックや、羽織袴で凜々しく這入て來た。もう出掛け給へ、と素山子が言ふので、時計を見ると五時過ぎて居る。急いで禮服に着更へて、會場の某樓へ俥三臺續きて、いゝ、いなせに走らせた。

途中て、會に赴く友人に逢つて、合せて五六臺の俥を連ねて、樓の門口へ威勢よく乘込んだ時には、何だか好い心持になつて、不平も不滿足も無くなつて、自分が非常に豪い者になつた樣な氣がして、莞爾々々しながら、席へ通つた。幹事の古刀子が、席について呉れ給へといふので、極まりの悪いのを忍んで床の前へ座つた。友人も悉く奇麗に着席した。自分に取ては皆友人であるが、友人相互には知らぬ人も多いから、皆改て濟まして居る。酌婦と小妓が酒肴を運び終つて一同一杯づゝは受けたと思ふ頃、古刀子が立て、急な事で行行屆であることを詫びた。次に自分が立て、友人諸君の厚情を謝し、東京を去るに至つた事情を述べわが任地は僻陬てはあるが、文藝上の遺跡の多いこと、殊に近邊に笠置月瀬等の勝地があること、故に是非諸君の光來を仰ぎたいことを述べ終て座した、忽ち盃が降つて、椀の上にも膳の上にも疊の上にも田毎の月のやうに並んだ。妓が「店菅掻に引寄せられて」といふ御座附を彈く。其終るのを待つて席の中央へ出たのは骨格逞しき播泉子である。

子は漢文科出の文學士て、兼ねて武道に達し、嘗て支那に遊び、張之洞と議論を戰はし、未だ外人の知ら

ざる深山まで跋渉して、一昨年の冬支那服を美々しく着飾つて歸朝した、氣骨稜々たる偉丈夫である。子は自分に向つて一禮し、他の諸君に向つて一禮して說き始めた。

汪生旛泉こゝに謹んで瓊音學兄の赴任を祝します、あゝ學兄に別るゝに當つて、私は萬感の交々起るを禁じ得ません。兄は篤學の士であつて僕は無賴漢風の男である。兄は溫厚の君子であつて僕は粗暴の野人である。兄は閑窓の下花に對して歌を詠むの人であつて僕は霜白き朝朔風に向つて寒稽古に赴くの人である。斯くまで正反對なる性質の二人が刎頸の交りを結ぶに至つたのは實に不思議である。其初めは僕も兄も高等學校の寄宿寮に在つた時の事で、偶然二人が同室に起居した頃、或事件が寮內に起つたその時、兄が僕に義憤を洩らした事がありました。實にこの義憤こそ、僕が兄の人となりを知つた初めであつて、この義憤によつて兄と僕とが親友となるべき未來の運を豫知したのでありました。それより此方別に宴を共にすることも無く旅を共にすることも無く、唯時々の散步に懷を述ぶるのみであつたが其交りや尋常のものではありませんでした。互の身の上の事大小と無く先づ相談すると云ふ有樣でした。此度兄の赴任に就いても僕は實に其話を兄が始めて聞いた其日に於て相談を受けたのでありましたが、僕は直に大賛成をし、兄も直に決意して都門を去ることになつたのです。一躰新學士が地方へ行く事を恰も流罪にでも處せらるゝ樣に思ふのは大なる誤である。元より巨萬の財があつて家の係累も無く讀書の人となつて居れる人ならば東京に留まるが無論善いのであるが、境遇の許さぬのも顧ず、虛名野心に驅られて强ひて踏み止まるのは果して賞讃すべき事であらうか。彼等は都の高價なる生活費を得るに汲々として、目前に圖書館ありながらも、其處へ行つ



て研究をする暇は少しも無いのである。斯くて徒にバチルス多き市塵の中を驅歩くのみで何の得る事があるてせう。昔政權の武門に歸したのは、朝廷の公卿殿上人が地方官たるを嫌つて都に執着して居たのが、大なる原因である。今の學士たるものが何故にこの公卿風を學ぶのであるが、殊に兄は文の人である。詩の人である。兄は今任地邊に勝地の多いことを說かれましたが、斯る地に兄の行かるゝのは、兄の爲に大に賀すべきことであります。

辯舌爽かに演じ去つて、予は傍の吸物椀を取り上げた。如才なき小妓が浪々と酌をした。それを目八分に差擧げて、謹んで瓊音君の健康を祝しますと、露も餘さず飲干して、椀を倒にして席に復した。滿場拍手大喝采で、ヒヤ〳〵といふ黄色い聲も聞えた。自分は此時感迫つて淚がハラ〳〵と零れた。頓て大妓絃を彈じ小妓銀扇を閃かして鏡獅子を舞うた。面白くなつて來た、我か前の皿每の月も平らげて仕舞つて巡回と出掛けた。向う樣では義太夫が始まる、此方樣では端唄が始まる、互に妨げられるので競つて聲を張上げる、三味線の皮が破れさうである。忽ちモーニングの上へ浴衣を引懸けて絞の手拭を冠つて「裏の段畑」を躍り出したのは柴軒子である。笑ひ聲は雷のやうに湧いた。

自分は憂愁の氣が散じてしまつて、赴任の事も何も忘れて仕舞つて、過去未來の念を打消して只現在このモメントの快を貪る氣になつて、謠といはず詩といはず長唄といはず流行唄といはず、記憶に存する限りぶちまけて、もう何か演るものが無いか知ら、と思ふうちに、五體が溶ける樣になつて、何が何だか譯がわからなくなつて仕舞つた。

翌朝の九時頃重ひ頭を擡げると、如何して歸つたのか宿に寢て居るのであつた。嗚呼夢の樣な昨夜の送別會、あの騷ぎは自分の歷史中一時代から他時代に移る其過渡の革命の響であつた。

新躰詩の初歩

河井醉茗

今年から本誌の新躰詩を、私が拜見する事になりましたに就いて、新躰詩に關する談片を折々述べるやうにとの事て、何か申上げたいと思ひますが、本誌に出される方は初心の方が多いのですから、系統の立つた議論や、批評的の詩論よりも、却つて初めて詩を作る方の、心得になるやうな事を話したいと思ひます。

本誌へ寄せられる詩稿が、數に於て非常に澤山なのに驚きました、驚きますと共に、又心強く賴母しく嬉しいやうにも思ひました。之だけ多くの方々が兎に角詩と云ふものに心を傾けて、長いにせよ、短いにせよ、作つてみやうと云ふ素志を起されたのは、誠に貴ぶべく、欣ぶべき事てあります。言ふ迄もなく文藝は獨立したものてす、又自由なものてす、是非詩を作れよと言つたからとて、其人に天分の才がなければ出來るものでもありませんし、作つては不可と言つても、感興が湧いて來れば、詩は自然に出來ます、勿論上手下手はありませうけれど、詩を作るやうになつた動機はおしなべて高潔なものに相違ありません。それが一つの雜誌に此の如く多數に參るのてすもの、祝さずには居れません。



最近の青年の間に、男女を通じて詩を作る方が多くなつたのは確かなる事實てす、且其作詩が着々として進歩した來たのも事實てす。併し女性の作は、男性の作に比べて見ますと甚だ劣つて居ます、未だ幼稚てすそれは修養の時間の短いと云ふ事も一つの原因てせう讀む處、聞く處の狹いと云ふ事も一つの原因てせう、女性詩人の立派な方が出るとすれば今日以後てせうが成るべく其發展の順序、方法を間違はないやうにして貰ひたいものです、私共が初め

て新躰詩に手を染めた時分は、實に茫漠たるもので、末は野となるやら、山となるやら殆んど見當はつきませんでしたが、幸にして思想界の潮流は、短日月の間に長足の旅行を爲しまして、今日では新躰詩と稱ふものが、世間に認められるやうになりました。專心之に從事せらるゝ詩人も少くはないやうですし、先輩として、模範として羨仰すべき詩集も、亦少くはありません、諸孃の中で若し新躰詩で一家を成さうと云ふ素志のある方があるなら、機來るべきは此秋です。

素より初めから一世を驚かすに足るやうな作品は出來るべき譯ではありませんが、諸孃の作を見ますに、着想の無意味、詩語の平々凡々たるものが多々あります詩想に於て何か清新な處が無くては、折角詩を作つても作つた甲斐がありません。全く陳腐な和歌を引延ばしたやうなものは、時代後れも甚しいもので、新躰詩を作るには從來の和歌や俳句を作るやうな頭腦を、全然入れ替へて貰はねばなりません。俯仰二千年來の歌人俳人が歌ひ盡くした事を、七五調で並べて見た處で一向に榮ません、それなら新躰詩の起る理由はないのです。諸孃は未だ〳〵大膽に思ふ處を歌つて宜しい、新しく歌ふべき餘地を發見なさい、古い花鳥風月的の思想を繰返すよりも、新しく諸孃の胸に湧出る感想をさぐり出す方が、何んなに自由で、何んなに廣くて、何んに樂しいか知れません。只其詩想を盛る器として古い歌は勿論、歷代の文學に眼を曝す事は最も必要であります。

或は言はん、然う一足飛に自分の思ふ事が直ぐ詩に出來るものではないと。其處が即ち修養です、詩にしやうと思ふならば、其浮んだ感情は能く胸で養はんけりやなりません、露骨に、淺薄に、考へもなく筆を取つた處で何うせ碌なものは作れません。人間の生れるのでさへ十個月はお腹の中に居ります、詩だつて一月や二月はお腹の中で暖めてやらねば、玉のやうな美くしい子は生れません、詩は性急に作つてはいけません、深く考へ、多く練つてこそ初めてものになるのです、殊に初步の中から洗煉する習慣をつけるのが最も大事

です、偶には即興風の好い詩も出來ます、けれども其を猶再三洗煉すれば一層好い詩になります。詩と文とは相違の點は多く其處にあるので、成丈け頭腦を練つてから調子をつけるやうにすると、好いものになります、昔は僅に十七文字の俳句を作るにすら、幾年か考へてから人にも示したと云ふ例もあります、勿論是は極端ですが、兎に角詩を作るものは、深く考へ、長く養ふと云ふ事を忘れてはなりませぬ。

俳諧と三味線

巖谷小波



▲音樂の女性的である如く、文學も亦ある點まで女性的である、殊に文學も軟文學の、詩歌俳諧の類に至ては。

▲余は毎度云ふ事であるが、音樂と文學とを較べて見るに、和歌は琴の如く、漢詩は明笛の如く、新体詩はピヤノの如く、俳句は三味線の如くである。

▲女子の音樂を玩ぶもの、その上品なるは、琴を彈し中流以下は三味線を習ふ。此故に、三味線は琴に比して、何と無く下司張つて見えるが、その實用の自在な事は、他の樂器の及ぶ段で無い。

▲俳諧もまた此の如くで。その詩形の簡な事、恰も三味線の構造の至つて無造作なるに似て居るが、その應用の自在な事も、丁度三味線の通りである。

▲が、我邦文學の歴史上、和歌の雲の上に創まつたに比して、俳諧は専ら民間に行はれた爲めに、何と無く下司張つた觀のある所まで、三味線によく似て居るが、今日四民平等に成つて、無意味な階級思想が打破された時代に、さう云ふ愚觀はもはや取るに足るまい。

▲抑も俳諧は、古人も俗談平語を云ひ、明治の人は平民文學と稱して、苟も天下の下、人世の事、一として

其材料たらぬは無い。それ彼の三味線の、雅曲にも合ひ、俗謠にも合ひ、琴にも連れピヤノたにも連れ、軍樂の眞似も彈ければ、また馬鹿囃子の眞似も出來るのと、丁度同樣の趣がある。

▲字數へれば只の十七字、それで居て宇宙の森羅萬象、人世の千狀萬態、雅趣、俗境の嫌ひ無く、見事に云つてのける自在は、蓋し、他の詩形の及ばぬ所であらう。

▲が、只何でも云へる、何を云うてもかまはないもののみ合點して、字形を十七字並べ立て、それで俳句だと思つては、又大きな了簡違てある。

▲例へば三味線でもさうては無いか。只鳴らしさへすればよいと云ふので、無暗にチヤカ〳〵ペン〳〵する斗りでは、元より三味線を彈くとは云へまい。

▲調子に本調子、二上り、三下りがあり、また所謂かん所とか、つぼとか云ふ所があつて、耳に調子を聞き分け、指にかん、つぼを押す能力だけは、如何しても備へて居らなければ、その音が眞實に出るものては無い。

▲俳句とてもその通りだ。彼の季節の辨へも無く、切字の法則も知らないで、勝手に字を列べられてたまるもので無い。

▲さて三味線の調子も解り、つぼもちやんと心得る樣に成つた所で、それからの音の冴へは、その腕の熟練にある。

▲俳句とてもまたそれに異らず、形としては句に成つて居ても、さて何等の面白味も無のである。此等は修養の程度によるので。現在同じ題に同じ案の句を讀みながら、一寸した句作の差て、一は高點に入り、他は選に落ちるのも、畢竟その所以に他ならぬ。

▲要するに俳諧を學ぶのは、三味線を習ふのとほゞ同じ事てある。而もその用の共に廣く、その奧の共に深きを知るならば只形が出來、音が出るの程度に甘んじて、それで俳句家と爲り、三味線彈と爲つた氣て、得意がられては仕末に困る。イヤ、それては當人は句を作つたつもり、三味線を彈いて居るつもりでも、誰も目を貸しはせぬ。誰も耳を傾けはせぬ。

水繪の友　(一)

かつみ

『オヤマー貴女は花野さんては無くつて』
と、さも驚きたる風にて、突然問ひ懸れたるは、問はれたる花野高子と、某高等女學校の同級生なる、黒神艶子と云へる者なり。

艶子は、今日久振の大祭日而も珍らしき好天氣なりければ、巣鴨大塚に住まへる伯母の家に訪れ、今小石川氷川田圃を過ぎて、本郷湯島なる吾家へ歸りつゝあるなり。然るにこの淋しき夕暮、斯る田圃道にて計らずも親しき友の高子に遇へるは、艶子に取りて如何計り案外なりしよ彼女が驚も實に理と云ふべし。



『アら黒神さん。貴女マー斯樣な所に何うなすつて、妾は誰方かと思つて本統に吃驚爲ましたよ』

『花野さん、妾は先刻遠方から斯樣な淋しい田圃道を御連も無くたつたお獨で、何所の方かと不思議に思つて見て居りました』

『さうして黒神さん貴女こそこの夕方淋しいのに何所へお出になつたのです。マーそれても本統に嬉ふ御座いますわねー。丁度妾も今歸る處ですから、御一所に行かうては御座いませむか』

『花野さん貴女こそ何方へ。そうして其所に持て被爲入る物は夫れは何に、アラ解つてよ繪を書くお道具でしやう、屹度寫生のお道具よ、貴女寫生なんか内證で爲さるの。妾ちつとも知らなかつてよ何故妾に御話にならないの。あれ程親密に爲て被爲入りながら夫れては餘り酷のねー。

『黒神さんそんな譯では無いのです。妾も何時かお話致さうと思つて居りましたが、夫れでも何んだか極

が悪くッて恥敷ものですから、悪氣でも何んでも無くッイお話致す機會が無かつたのですから、決して悪く思つて下さつてはいけませむよ。

實はね。妾この夏のお休から水彩畫のお稽古を始めたのですよ。然し同じクラスの出戸田さんね、彼方の樣に何もお書けにならない癖に、自慢ばかり爲る樣でも却て恥の上塗と思ひましたから、實は少しは腕が出來て夫れから皆さんにお話致さうと思ふて居ました。

其樣な譯ですから、何も隱したと云ふ譯でも御座いませんから、妾を怨むではイヤョ。然し水彩畫の御稽古は最初一寸面倒の樣ですが、少し書けだすと、貴女本統に愉快なものですのねー。

『花野さん貴女は愈々敬服ね。先生初め皆さんが何時も貴女の事のみ賞めて被爲入るのですよ花野さんの爲ることは全く違ふつて、そして貴女持の先生は誰方、學校の〇〇先生?。

『イーエ貴女、妾などには、彼の先生でも結構なのですが、未だ彼の先生の水彩畫は、一度も御書になつたものを拜見爲ませむし、夫れに同じ習ふなら、一層本式に致さうと思ひまして、兄さんにも相談為て兄さんのお友達から無理に御頼み申して、二宮先生の御宅に行く樣に爲つたのですよ。

處が、彼の先生は中々八釜敷方で、初めて妾が伺つた時、仰るのに、水彩畫と一口に世間では云ふが、夫れは容易ならぬもので、氣丈夫な男子でも、これを仕遂げるのは六ケ敷、況て婦人方は到底望は無いと、一も二も無く仰るのでしやう、況て婦人だなどゝ、餘り失禮なことを仰るとは思ひましたが、夫れでもこれから敎へて頂くのですから、何も御説御尤で、貴女遂に慰半分に、一通り敎へて頂くことになりました。』

『では花野さん初には何んなものを畫くの、女子文壇の口繪に能く出て居ます、水彩畫や繪葉書の樣なものを敎へて下さるの?』

『アラ黑神さんだから先生が彼の樣なこと仰るのよ。

初めは學校て爲て居るのと同樣に鉛筆て御手本を書くのよ。さうして夫れが間違無く出來る樣になつて初めて繪具を使ふのてすね。夫れても此頃ては無覺束景色書が寫せる樣になつたのてすよ。』

『アラ貴女今日も何か書て被爲入つて？一寸拜見な。』

『黑神さん貴女本統に酷いのね。色々なことを仰つて、終局に繪を見せろだなど、、妾何う爲たら可いてしやう』

『善いてはありませむか。他の人ては無し妾てすもの』

『だけれど今此所ては厭てすよ。ては最早宅も近ふ御座いますから、安部樣の御屋敷の人通りの無い所で、一寸御目に懸けましやう。』

『ては花野さん、椎の木の下の靜な所で一寸ね』

『けれども最早遲いから、光線が何うてしやう？』

『何も搆いませむはね、妾てすもの乾度てすよ歎してはいけませむよ』



と二人は、たわいも無く今丸山福山町の新坂を昇り、西片町なる安倍邸へと歩を進むるなり。夕の空は燃ゆるが如き朱を棚引き、コバルト色の遠景を霞むる樣など、高子ならねもその景色に心を奪はれざるもの無し。

『マー好い風景てはありませむか。花野さん妾も斯樣な景色を見ますと、貴女に負けずに、繪でも書きたいと思ひますわ。アレ彼所が小石川の傳通院の家根てすよ。何んと云ふ好い色てしやう。背の高い樅の樹が水平の直線を破つて、花野さん妾だつて風景の美を味ふことは人には決して負けや致しませんよ。』

『本統に好い色ね。一寸スケッチブックへ寫生爲ましやうか。』

『アラ、スケッチブックつて何に。さう／＼先日貴女が學校に一寸持て被爲入た、あれ？』

『黑神さん夫れは違つてゝよ。あれはアービングのだ

わ。妾の云ふのは寫生帖の事なのよ。』
『一寸花野さん、アレ彼の色を御覧なさい、又彼樣な紫色に爲つてよ。まさか彼の色は繪具では出ますまへ』
二人が斯く語り合ふうち、西の空は一面黑き雲に覆はれ、最早寫生爲すべき美しき色彩のあらずなれば、こゝに花野もスケッチブックを懐に納め、彼等が約束の椎木の方へと歩を進めぬ。



『さあ花野さんもう來てよ。では一寸拜見な』
と親しき友の遠慮も無く、書嚢より取出し片手に捧げてこれを打眺むるや黑神は、
『アー美しい景色ね。貴女が本統にお畫きなすつたの？。紅葉が茅葺屋根の後から出て居る處などは、宛然實景を見る樣ではありませむか。妾も斯樣に畫けたら何んなに嬉でしやう。花野さん妾も貴女と御一所にこれから稽古爲て、寫生に參る樣に爲りましやうか。ローンテニスなどに夢中になつて、ラッケットを振り廻すよりも何の位愉快だか知れたものではありませむね。』
『夫れはさうですわ。黑神さん何も自分の田へ水を引くのではありませむが、第一運動に爲りましやう、夫れから段々進むものだから、愉快で堪りませむわ。貴女いやですよ。ローンテニスなどゝ一所になるものですかね』
『夫れは貴女の仰る通りよ。だから詳しく御話を爲さつて頂戴な。マー、こんなに暗くなつて、貴女その横町を御曲りに爲るのね』
『マー、もう此所まで來てよ。黑神さん妾の宅へ一寸でも寄つて被爲入いな』
『難有とう。然し餘り遲くなつて、宅でも心配致すといけませむから、又上ると致しますわ』
『それもさうね……』
『では又明日學校で左樣なら氣を付けて被爲入いよ。』

論文

天

○怒

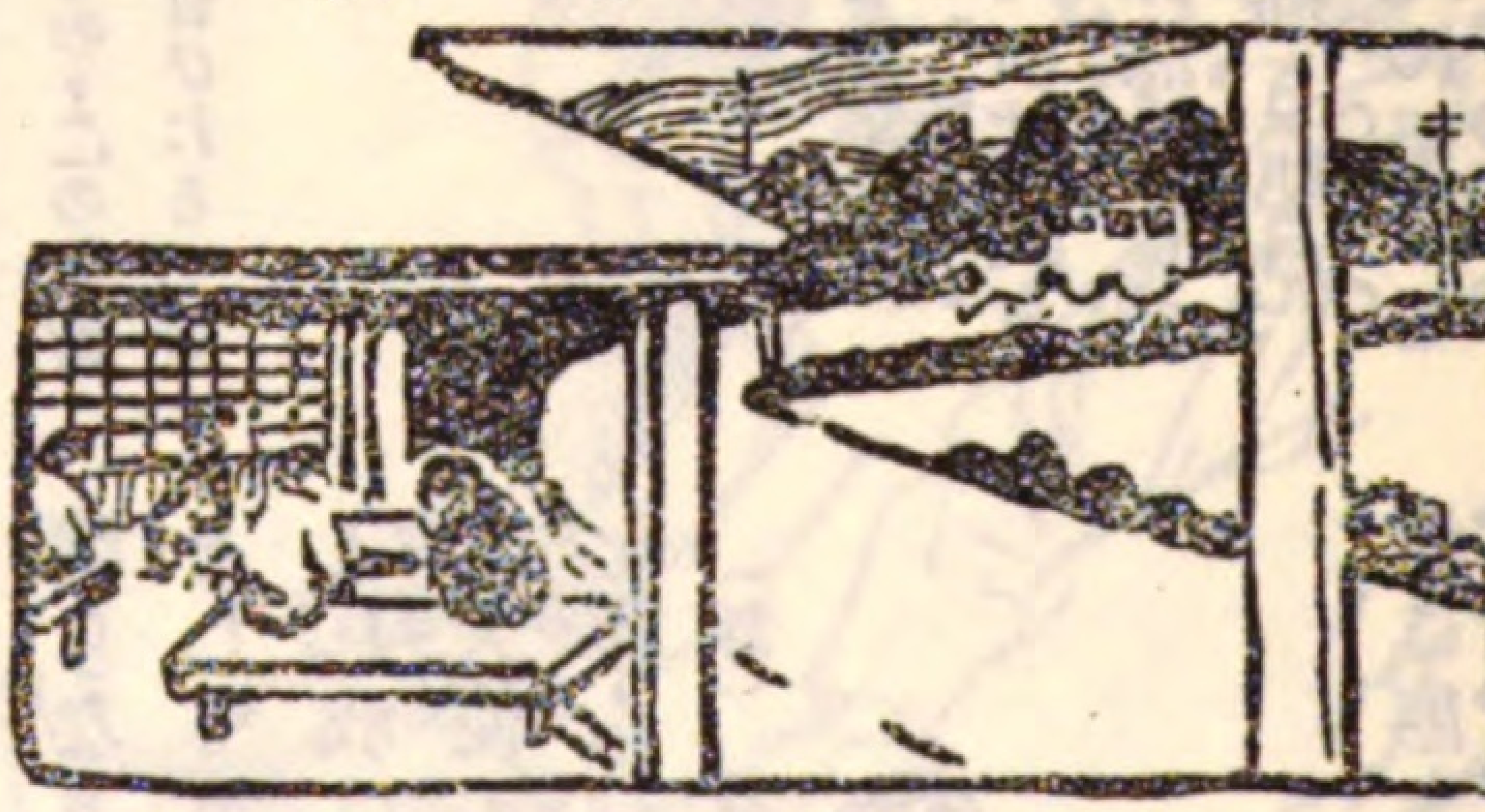
常陸國石岡町守木町今泉方　榊原ゆき子

怒りよ、汝は人の心をもて己が住家とはなすなり、しかも其の人の貴きと賤しきとを選ばず、又、賢なると愚なるとを問はざるなり、

斯く汝は人の心中に宿ると雖、常に在るものに非ず、忽ちにして來り、忽ちにして去る、汝は雲の如し、忽ち生じ忽ち消ゆ、汝は又電の如し、忽ち見え忽ち隱る、出沒變幻捕捉すべからず、

汝は奇しき力を有す、古來其の力をもて幾多の人を弄びしか、されば英雄も汝の力には制せられ、俊哲も又た抗するを得ざるなり、あはれ奇しきものよ、

島車（賞外）



宮崎縣下北方村（澤田きく子）

文王をして天下を平かにして百姓を安んぜしめ、張翼德をして長板橋に百萬の敵軍を卻け能く劉備を虎口に救ふを得しめ、又山陽をして外史を著さしめ、天文祥をして正氣の歌を作らしめしも汝の力なりしなり、そは誠に愛すべき、敬すべき祝ふべき怒なり、淺野長矩をして殿中白刃を閃めかし、ために身を亡ぼし家を失ふに至らしめし、近くは白晝帝都街上に國民の血を流さしめしも、皆汝の力なりしなり、そは誠に懼るべき、嫌ふべき、弔ふべき怒なり、

汝は斯く人を助け、人を導き、人を害し、人を誤り、われをして愛と懼との念を起さしむ、あはれげに奇しきものよ、かくも一種の魔力もて人を弄び、或は導き、或は棄て、或は利し、或は害するは汝に偏愛の性あるに因るか、抑も又他に見る處ありて、然るか、さはれ其の貴賤賢愚を問はずしてよく己が身を人に托するを思へば、汝は好惡愛憎の念なきものゝ如し、あはれます〳〵奇しきものよ、われは汝を愛し、汝を懼る、われは汝を宿らしめん事

を喜び、又汝の宿らざらん事を願ふ、
しかも汝は來りて、われに宿り、必ずわれを弄ばん、
されば汝は、われを導き助けんとするか、
そも又われを誤らしめんとするか、さても奇しきものゝ極みなる哉。

（評）恐を擬人したる、奇警なり。層をなせる「奇しきものよ」の句皆能く利きたり。初め和漢の事實を擧け。終に我身上を言ひたる、全篇を引締めて餘力あり。

（地）

◎幼兒

伊勢　武部みちよ子

鞘を拂へば明晃々たる三尺の秋水、其刄に向ひ其鋭き光を浴みては、如何なる惡魔と雖も、誰か悚然として戰慄せざるべき、さるを天眞爛漫匂へる花の如き嬰兒、彼は靜に掌を開いてそを握らむとす、あゝ此に至りてか彼は遂に生きたる神なり、天使なり、げに其尊き心には恐れなく疑ひなく、一向エデンの園に限りなきいつくしみを承けつゝあれば、浮世の珍器財寶も物の數かは、唯玉の如き手に母の乳房をさゝへ、あふるゝばかりの笑み傾けて、瑠璃の瞳に愛の精靈を宿しつゝ浮世の塵に汚されざる風情の神々しさ、かゝる汚れし人の世に、かくばかり奇しくたへなる慰安の光のほのめくかと、云ひしらぬ快さを覺えて、ふくよかなる薔薇色の頰に熱き接吻を止めがたかりき、

あはれ幼兒は彌生の櫻の如く美しく仲秋の明月の如く滿らなりやしかも花開いて風之を誘ひ、月明かならむとして雲之をおほふ、うらみ多きは浮世の習ひ、あゝよし我は今ゆ後花に醉はじ、月をも賞でじ、只神の如く天使の如き彼に誠の愛を捧げてとこしなへに深き惠を蒙らむかな、

（評）首尾殊に妙なり。

（人）

◎書籍に對する感

周防　楓子

世は塵を以て滿ち、金力に依つて左右せらる。汚れに汚れて冷やかなる世に、清らかなる涙を求め、溫かき慰藉の聲を求めんとして能はず、能はざるが中に求めむとして、悶え、苦しみ、泣き叫びたりし我はげに愚かなりしかな。

あゝわが親愛なる友よ、熱情ある友よ、不平胸に得堪

へぬ時君が柔かき情はわが激したる心を和げ、不滿訴ふるに所なき時君が温情はわが冷え渡りし血潮を温む、かくてわが心、君と親みしより日に塵界をはなれて、崇き淸き樂園に遊ばんとす。

露よりもろき功名と、影より淡き光榮にあこがれし昔はげに鈍ましかりしかな。昨日の友は今日の仇、心はかり難き人の世には歡喜を分つ友こそ多けれ、袖に降る涙しげき時初めてその心を知りては、あゝかゝる世に何かはせむとみ空はるけき新星の光を仰ぎしこと幾度なりしか、さはれそは汚れたる世をのみ見たるわれなりき、我や今、書籍てふ眞に溫かき美しき友を得て初めて眞の幸福を感じぬ。われ君を捨てざるの限り、君が友情は永へに我を慰めぬべく、若しそれ世の人、幼にして父母を失ひし、寄邊なきわれを不運なりと云ふ者あらむには、我は明かに答ふるを憚らず「讀書に於ける無限の趣味を解したる我は眞に最大幸福者なり」と

（評）熱あり光あり。



おつとめ　（賞外）

神戸市二宮町　德永みれ女

秀逸

○月

杵築大社　秋皐女史

同じく一痕の月なり、然れども時を異にし、處を異にし、將た人を異にせば月も亦異なるものなり、春の月は微明にして媚色あり、夏の月は俊爽にして生氣あり、秋の月は淸澄にして愁心あり、而して冬の月は陰森にして厲容あり、故に春の月は處女の嬌羞を帶ぶる如く、夏の月はうら若き良家の細君の俤あり、秋の月は夫れ三十路餘りの切髮か、而

して冬の月は古人の既に云へる、老女の化粧せるものなり、故に春の月は友仙の振袖なり、夏の月は中形の浴衣なり、鼠小紋の紋付を秋月に比せば、無紋の白無垢は冬月なり、故に梨花は春月に配すべく、梧葉は夏月に配すべし、秋月に桂花あり、冬月に梅枝あり、造化の配合、亦至れり、而して一年四時、相異る此の如し、職として水蒸氣の作用に出るも、亦四圍の風物の變化に因り、而して之を見る人心の自ら異るに因ること、更に多かるべし、同時同處の赤壁の月も、孔明、周瑜及び曹操三人の眼には各々同じからず、況んや曹操と東坡をや、同時同處の一の谷の月も、範頼、義經兩將の眼には、希望の光り輝くべく、而して無官の大夫が眼には深き悲哀の色を認めけむ、若し夫れ足柄山の月と越山の月とは、新羅三郎と不識庵とを照らして、兩者別様の光あり、一笛、壇の浦の月に吹き、從容として水に赴ける、琵琶、竹生島の月に奏でゝ、秘曲に身世の哀れを忘れたる、平家の人々の傾く運命、無比の風流を照らしたる月は、むくつけき關東武士の何とか觀たる、近く旅順を開け渡したるステッセル中將の見たる月は、青く、白く、あはれに照りしならん、之に反して我乃木大將の眼には無限の喜悦、滿足、希望の滿々て見えしなるべし、書窓、筆を抛てば、月、寂然として、轉た悠久の想ありき。

（評）想新しとにはあらねど、整ひたる文なり。

○愛と婦人

三河西鴨部石ヶ瀬　澤田つま子

情に脆く意に弱く、明晰な頭惱と緻密な思考とを缺いて、嫉妬、虚榮、多感等の淺はかな心と、優柔、孱弱偏狭などの惡しき缺點にのみ富む婦人の身に、唯一つ美しい光を放つものは、まことの愛其れなのである。彼の先天に有する同情の涙や、優しい慈仁の性質や、又は貞淑、婉順、温良などすべての德は皆、婦人が心の奥に輝ける愛の光が、さま〳〵の形として現はされた者に外ならぬので、婦人が平和の天使として、幸福の權化として、世の中に貴び敬はるゝのも、皆婦人に此の愛と言ふ德があればてある。

あゝ愛、かの花の如き愛は、火の如き男子の功名心とともに、いかに世の中に大なる權力をもつものであらうか見よ美しい愛の光が輝く所、親しき親子はあらはれ、相和する夫婦はあらはれ、骨肉の同胞はあらはれ而して、幸福を圓滿に享くる暖い家庭は成立するのである。見よ麗はしい愛の風が吹く所、慈善となり、博

愛となり、平和となり、花咲き鳥歌ひて長閑なる霞を罩むる社會は實現せらるゝのである。あゝいかに貴むべき愛の徳よ　ふべき愛の徳よ、しかも此の貴み敬ふべき愛は、婦人が永の生命である、まこと婦人は愛の爲に生き、愛の爲に死し、身を此の貴き愛のために犧牲として世に活動する者なので、愛なき婦人は魂の拔殼、社會にありと言ふも、平和幸福を作り出す使命を帶ぶる女性としては數ふるに足らぬ者である。われはかつて、猛き雨男子の爭が可弱き婦人の力によりて美しく圓滿の極を結べるを見た又錯亂せる一家庭が、大なる婦人の愛によりて樂しきスヰートホームと變ぜしを見た、あゝかくて平和と幸福とを求むべき使命ある婦人の身に、此の偉大なる權力ある愛は、永刧に其の生命たるべき者である！。

（評）男子の如き筆致なり。

日の出（賞外）



陸中一關大町　黒澤美津子

○奈翁

備後李　しとみ

一たび鞭を加ふれば、百萬の猛將勇士先を爭うて馬側に從ひ、歐洲千里の山河が震うて、蹄の跡は忽ち骸の山、血の河と變り、再び鞭を揚ぐる時は、草が靡くやうに鬨が治まつて、木の葉は凱歌を奏し、風は萬歲を唱へ、更に又鞭をあぐれば、嵐がなぎて、此處と招けば應と答へ、國々の帝王が爭うて馬前に跪いた。あゝ、その英傑は誰れぞ。

身はつまらない匹夫から起つて、遂にあの廣い歐羅巴を掌に納めた、世界無二の英雄ナポレオンボナパルトその人で有る。

果敢なき浮世、もろき人、……されど精神一たび到れば何事か成らざる、と叫んで起つた後の彼れは、昨日は東、けふは南と恰かも虎狼の勢ひで、鬪へば捷ち、攻むれば取り、その花々しい活動は、實に神の如く、成らないと云ふ事はなかつたよ、而して爲し得る限りを爲し盡し、囚はれて死んだ後は、其悉くを爲し得ざりし、と云ふ詞が殘つたのである。

あゝ、彼れの前に彼れなく、彼れの後に彼れなく、百

年の後、千岳萬波を越えて遠く、我が國の小學生徒が、英雄談をものすべく、豐太閤と共に、彼れの名を擧げるに至つたのである。あゝ、實に名譽の極みてはないか。以て彼れも泉下に瞑すべきてある。

（評）直截なる筆を愛す。

◎樂しき遊

日本橋區元大工町九番地高橋方　辰沼みよし

人の此世に生を受けて、誰とて樂しみとする、遊のなからめやは。鳥は歌ひ、蝶は舞ひ、花は笑ふ春の野に、ともどちと手をひきつれて、そゞろあるきの途すがら、歌詠まんも、萩の露ちる窓の下に、月をながめつ、琴奏でんも、人によりては、こよなの、樂しみならむ。妾とても又樂しみはあるなり。そは、ゑふでとることなり。快を叫ぶも、欝をやるも、たゞ丹青の道、あるのみ。

山郭水村悉く霞に沒して靉靆たる春の野に立ち、錦楓燦爛として雲を染めんばかりの秋の山に分け入りて、丹青に自然を味ふも、又快ならずや。

白雲靄々として霞と見まがふ春の花、綠滴らんばかりなる夏草の上に崩れかゝれる雲の峰、籬落蕭條として人家まばらなる秋の野邊、鴉飛び交ふ枯木まばらなる寒林、いづれか好個の畫題ならざる。

古戰塲を弔うては「夏草や、つはものどもが夢の跡。」と詠じつゝ思はず、畫具皿に、涙落せし、あはれあれば、砂白く松青き海濱の風光を、恣にせし、快ありき。其の目に見るもの、手に觸るゝもの、一として快感を與へざるものなし。

見よ、見よ、照る月も、漂ふ雲も、降る雨も、吹く風も、聳ゆる山も、流るゝ水も、峙つ岩も、咲く花も、棚引く煙も、鳴く鳥も、皆心ありて造化の、配合の妙を、語るにあらずや。其自然に對して、油然として、湧き來たる快樂は、まことに言はれぬ趣の、こもるものなり。妾は嘗て、長門の壇の浦のほとりに、住みし事ありしが、常に見る海濱の岩も、之に碎くる波も、遠く漂ふ千珠島も、近く浮べる滿珠島も、水天の間に線の如き九州の山々も、走る白帆も、回を重ぬるに從がひて、自から天然の趣味多きを解し、遂に、筆とるに至りしなり。かくて妾が畫に對する趣味は、次第に深くなり來れり。嗚呼、樂しきは繪畫なるかな。

（評）見よ見よ以下金色夜叉の鹽原の段を學ばれたるか。

新體詩

天

○北風によする

神奈川縣鶴見五四一　佐久間芳子

花そめ衣袖かへす、
見かへりがちの秋姫や、
とはに廻りて息まざる、
時の小車君のせて、
轅も高う遠去れば、
千島の海にかゞまりし、
北風今や羽をのして、
秋津島根にすさぶなる。
千とせ霊ある森林の、
梢々をどよもして、
梵鐘かゝる古寺の、
堂塔伽藍ゆるがして、
街にひえし石ゆかの、
をごゝろ猛き君なれば、
水邊に草をもえしむる、
砂をしまきて北の風。



冬（賞外）越後紫雲寺　山中都由子

やさし情はあらじとも、常春すがた花やぎて、
若き瞳に夢むなる、少女の袖を吹かであれ、
苦吟に悩むうたびとの、やせたる胸を吹かであれ。

詩想は創意でないにしても、此調、此格、遙に群を抜いて居ます（選者）

地

○雲

神戸　みどり子

赤きむらさき　うすぐもの
山の端ちかく　なびくとき
神やいますと　うなづきき
むらくも風に　ちぎられて
つきの進みの　はやきとき
雲のゆくへを　きづかひき
夕湖畔に　たゝずみて
ちひろのそこに　いろくづの
こけらの如き　雲を見き

雲の詩趣の如きは歌うて盡きない材料であらうと思ひます、諧調も

大いに鑑の詩をお作りなさい(選者)

入

○女鐘樓守

佐賀縣杵島郡錦江村　久原秋紅子

「里の子等よとく起きよ」　力をこめて打つかねも
乙女のうでのかよわさに　あゝなき父のしのばるゝ
あかつきひゞく鐘の音　子等は夢よりさめぬれど
あゝ逝きまし丶我父は　いつの世にかは覺めまさん

詩と云ふものも初めは斯ふ云ふ處から上手になるのです(選者)

秀逸

○春園

熊本　平岡信子

春の日ゆるう光りなげ、　こゞめ櫻の盛りなる
綠の芝の細路は、　薔薇の雪に埋れけり
黃や紅ゐやゆら〳〵と、　花に曇りの寂寥を
花より花に吹き渡る、　風に綾ある白晝かな

讀書の疲れ立ち出てて、　萌ゆる若草踏けつゝ
庭の飛石縫ひ給ふ、　麗し姫の逍遥や
戀の甘酒愛のかめ　雫は永久に絶えせねば
ほのかに醉はる人の子の　若かる胸は春にゆるかむ

春に醉へるやうな歌ひぶり、興は動いて居ます(選者)

○夢

三河　乘女

昨夜の夢路に古里の、　いさゝ小川のとある岸
綠風よぶ木下陰、　君と遊びぬ、たはふれぬ。
夢を儚とよびますな、　現、幻、空想や
希望や、地位や、名望や、　何れか夢にあらざらん。
夢の中なる夢をゆき、　夢に憧がれ、夢を戀ひ
夢に夢みて人は逝く、　吾が世を愛しと泣くな君
嬉れしきものも夢にして、　愁たきものも夢なれば
消えも易きと知らずやも。

夢十一、さまでうろさしとも思ひません(選者)

○冬姫

埼玉 なてしこ

清き姿の冬姫は
真白き被衣そと被り
淋し思に立ちにけり
三姫に厚き日の殿の
そもいかなれば我にのみ
冷たく薄き影やさす
そも誰がための粧ひと
鏡砕きて投げやれば
凍りて池をとざしけり

冬姫の鏡投げて池氷るとはおもしろし（選者）

○夕暮雲

名古屋 中村よし

あなうつくしの夕空や
空行く鳥の影落ちて
西の山の端黄に赤に
ちぎれ／＼に飛ぶ空の
ひかり彩る夕日影。
獨り自在のはねのして
行方定めず翔り行く
雲のあなたぞなつかしき
我世のちりにまみれざる
光はそこにてるらむに。
あゝ夕雲よ心あらば
われを翼に打ち乗せて
此のちり深き世の中を
逃れ出てゝよ空とほく
清き光りのあるところ。

考のある作ですが、併し雲を自然に歌つた方がなほ宜しかつたてせう（選者）



雪國（賞外）　麻布新堀　大手たけ子

○薄倖の小女を悼みて

下谷區 あきつ子

（小原雪枝嬢）

虹の輪の消ゆるがごと
はかなかりし十七年
たらちねの深き慈愛に
美しき花と咲くべく
こゝ幾度の春を迎へし。
ゆめなれや夢なれや
はかなかりし十七年
其花は開くをまたで
笑みそめし蕾乍らに
あはれつれなき風にくづれぬ
病てふまがつみの手に
ゆくりなく捕へられにし
幸うすき少女がいまは
命なりと只微笑みて
あゝ微笑みて潔く去りし。

冷やけき初秋の風　徒らに胸のみ刺して、
うから〻が涙はつきじ　悲しきは其かたみ歌
低く誦しては見ぬ友を悼む

小原雪枝嬢は本誌の誌友と聞きました、誌友が誌友の爲に見ぬ人を悼む、其詩には句外の哀音と情味が含けれて居ませう（選者）

○睡蓮　徳島　小川なみ子

靈氣薫ずるあさあけや、　高うみ空にきらめける
星の光りの沁み入りて、　蕾は花と開きけん
白き小いさき睡蓮。　世にあほがれし大詩人の
ひじりの魂とみそなはせ、　初秋の香しむる朝嵐
あゝ煩惱の姿して、　憧がれ來たる若人の
うたに痩せたる其の胸に、　開きし花の尊さは
靈しき響柔らかう、　しばらくゆるせ睡蓮。

睡蓮はまことに詩的の花（選者）

○燕よ　徳島　住友登喜子

沼をめぐれる古樫の、　森の樹蔭を逍遙ひつ、
はかなき戀にわぶる我を、　慰めむとかつばくらめ、
露おぶつばさ輕やかに、　朝のかぜに翔り舞ふ。
やよや燕情けあらば、　いましが巣ふ沼のあなた、
戀しき人のその家の、　白百合かをる窓に入りて、
やさしき君にそれをだに、　われ語れりと傳へてよ。

燕の使命、戀は其飛ぶが如くに鋭いてせう（選者）

○庭の桔梗　筑前　副島吟風

姉さまチョイと御覧なさい、　お庭の桔梗が咲きましたョ
やさしい秋の朝風が、　靜かに吹けばゆら〱と。
うすむらさきの花臺から、　あれ〱露が少し散る。
若しも春なら蝶が來て、　花のしづくを吸ふものを、
可哀相だよたゞひとり、　桔梗の花は淋しいわ。

言文一致の詩、いゝわるいは別問題として眞に言はふと思ふた通りが歌に出て居ます（選者）

○薄命怨　長野　安孫子美子

なんぞ醜き骨掩ふと　むくろに絡む繪模様や
衣輕らかのよそほひも　彩なきそれと誰か知る。
神たはぶれの鞭あげて　少女の胸をつと打てば
いたましい哉血は涸れて　噫「薄命」の痕とめし。
春若やぎのまなざしに　都に雲を趁ひし子の
運命の前にくづ折れて　傷手をなほもかき捞る。
よし、つらく共事秘めて　君あざむくに得堪へじを

地なる花よと慕ひます　御手を拂ひて世を泣かむ。
油つき行く有明燈に　面を背けてかなしめば
音なく斷れし元結の　頰に落ちかゝる亂髮。

原作の題には病ひの病が書いてありましたが、之は書かない方がよろしい、餘り實際的になると詩美の幾部を損じます（選者）

○もしふれもせば

麹町　重田春子

月の光に秋逝いて、
今ひろごりし冬の世に
小さき冷たき想草、
成らずと捨てしわが筆や
詩の翼の大いなる、
君がみ指の―もしふれもせば―。

あゝ人間の行くところ、　青山ありとうたひつゝ
都に八年さすらひて、　解かずと投げしわが史や
智慧の含蓄の豐かなる、　君が眼の―もしふれもせば―。
少女わが血は冷えたりと、人に示すに猶寂し

參詣（賞外）　備中　濱野しづ野



涙のむねの手のふるひ、　吹けずと折りしわが笛や
愛の息吹の溫かさ、　君がみ脣の―もしふれもせば―。

笛ありて若しふれもせば活きました（選者）

○わが身

出雲　紅花女

われ鶯の聲を得ば、　うきよの春に媚びなんと、
われ鶺鴒の尾を持たば、
富貴の門にかゞまんを、
われに孔雀の羽あらば、
金殿の寵受くべきを、
われに鸚鵡の嘴あらば、
博學の名に醉ふべきを、
われは梟の愚に生れ、
朽木に暗く潛むなる。

私は梟の愚を愛す（選者）

○日向の旅

巢鴨　鹿子百合

日向の旅の野に得たる、　古瓶ふれば聲ありて、
われは鈿女となりにけり、　安の河原に神集ひ、
天の詔笛わが吹けば、　微かに開きし磐戸より、
再び光りてる刹那、　夕日に淡き野の石の、

枕の夢は破られて、　またも歩まむ高千穗の峯。

神秘的の詩想、落筆も亦斯道のたしなみある人と思はれます（選者）

○曙富士　　長野　飯塚ぎを

「富士の曙歌はずや」　眞紅綾をるしのゝめの、
一陣さつと神風に、　ゆらぐさ霧のはれ間より、
黄金まばゆき雲幾條、　白よ紫あけみどり、
夜は今あけて花やかに、　あふぐたかねの白雪に、
日の神いつかてりそめて、　富士のあけぼの美しさ。

新年號だけに富士の歌のあるのも目出度し（選者）

○雪の富士　　大和　神田なつ子

萬古の雪を戴ける　夕日の前の富士の嶺よ
肩より纒ふ白絹は　何を誇りのたまものぞ
朝日の君のむかふとき　鼓かいへて舞姫が
舞殿に立ちまふ華ぶりに　似たり自然の曉の歌
茜さしさう西空や　夕日の影のうつる時
紅欄近く宮女が　翳す扇のそのすがた

昔の歌人俳人に富士を恐れて歌はなかつたものもあるが卑怯に近い（選者）

○春のかぜ　　甲斐　撫子

御座をすべる冷光に　まかれてめぐる白梅の
はかぜに生れし我なれば。　春姫の馥さに愛でられて
美し國やと天降ります
小草にそよぐ春のかぜ。

原作かつぎとありますがかづきです（選者）

○女十五　　能登　池野秋花女史

とすればものに恥らひて、　花のおもわは染りがち
細雨烟る朝にして、　春の香ゆらぐ丸窓や
優しき人の夢醒めて、　重たかりしよ其枕。
湯上りの身をつとよせて、　紅梅かほるまどのもと
母が秘藏の小鏡を、　そと偸すみてもうかゞひし
其頬の色は紅にして、　若き血潮に注ぐ可き
朽ちせぬ戀の色なれや、　夕櫻の花のかげ
人に秘めてもいぢらしよ、　はづかしとばかり頬染めし
夢よ行へは何處ぞや

嫣瑳の態、派手やかな詩風と認めます（選香）

○むらさめ

身をむらさめの今更に、
思はぬ風にさそはれて、
身は雫とぞちりはてゝ、
み空をかけろ袖くちて、

羽後　菅原花子

元の雲こそ戀しけれ、
くだけそめにし夕より。
おやみもわかぬ物思ひ、
草葉の露とそゝぐ也。

○冬の眺

白雪妙に野に山に、
枯れゆく枝に花つきて、
朝に平和の眺あり。
仰げば空に灰たちて、
罪の子寬の子かくれはてゝ、
午後に樂しき眺あり。
鎭守の森に日は落ちて、
峰の白雪夕ばへて、
夕に清き眺あり。
鐘の音遠く更たけて、
金殿玉樓築かれて、
夜に幽しきけはひあり。

金澤　多和田鈴子

世の憂き塵の消ゆところ、
そこに雀の飛ぶところ、
地には眞綿の積むところ、
そこに小犬の飛ぶところ、
紫紅の條のさすところ、
そこに鴉の飛ぶところ、
月中空に澄むところ、
幻に行く雪をんな、

○夕情

夕日黄金の森に落ちて、
早やみへそめし夕づゝの、
星の宮居を流れ出てゝ、
さゝやき響く暗に入る、

紀伊　森井熊枝

暦雲奇しき山の上を、
緑ゆかしきゑまひ哉。
垂穗を渡る風さむみ、
流れ何のうらみぞや。

巷の塵をよそにして、
胸の濁の清すみて、
うれしきあまり秋の詩を、
宵暗深き野をひがし、
今秋霧の野に立てば、
望み高し天の領。
聲高々と誦し居れば、
月こそ出づれあかくと。

○ふゆの筑波根

けふりの衣まとひつゝ、
あしたの空に色うすく、
野末に見たる錦の、
けふは新にぬぎかへて、
峰よりおろす朝風に、

茨城　藤田とき子

きりの細帯ひきしめて、
遠の筑波の秀峰や、
秋やいつこに越えましゝ、
きよきみ雪のふゆ衣、
吹雪は空にみだれける。

○花と星

若きこゝろの羞ひに
いとし星の男竊かに
笑みのまたたき洩したる
笑みと光を更しては
さすがに弱き花姫が
いつかあかさん眞心の
さればあけぼの雲白く
星の男空に消え行けば
夢にも似たる香のゆらぎ

三河　つま子

愛の瞳のかゞやきや
わが世の花に宵々を
春の夜深き戀はあり
胸に得たへぬ思あれど
言はで止めたる甲斐なさは
朧夜長き恨かな
優しき笑みのまたたきに
昨夜泣きたる戀衣
しぼるにあまる花の露

○柴刈

油氣しらぬほつれ髮、
飾りを競ふ人の世に、
虛榮の爲に生れねば、

信濃　中村かづ子

色はなけれど自然にて、
われは柴刈り干草かり、
光らせんとて鎌とがず。

○若き妻

久留米　彌吉和歌子

泣けとは誰れの言ひにしぞ
嬉しと笑みし玉つらに
ぱつと燃えては灯の
亂れし髪も手にあげず
花の香迷ふ春の夜を
若き二人の燃ゆ誰
小蝶のつがひそれならで
愛は二人を抱かしめ
父母は我子に死ねよとは
浮世はまぼろしか誰か云し
哀れ淋しく草の戸に
乞へど願へど効なくて
淋しからずや白雲の
孤影髪はむつぼれて
永久の和樂は奪はれぬ。

花の燈の十六夜
根は長し若き妻
消えなんとする闌干に
いとし若き妻見ずや
親と親との胸により
赤の契りは結ばれぬ
夫と呼べば妻と呼び
一夜の夢は夢かりき
妻に泣けとはをしへじな
二十を迄は育てしな
夜毎病み行く若き妻
胸は愁に亂るなり
西に流るゝ暮冷を
捧ぐる花の手弱女が

○歳の暮れ

名古屋　獅子海なか

今年も春秋あだに過ぎ、
早う師走の月は來て、
ゆきゝの人の氣忙しう、
いづこも同じ年の暮れ。

おくりむかへし月と日の、
一夜ばかりの心地して、
としの日數もわづかにて、
おしめどまたぬ年の暮。

父母にまみゆる冬やすみ、
妹姉かたらふ樂しさの、
あらたの年は嬉しきや、
あはれかなしき春なりや。

學びの業もたらなくて、
形はいたくのびにけり、
おこたりくゐてかひやある、
こむ春惱まむ年の暮れ。

○友を懐ふ

大阪　小西奈瓦枝

颯々として吹く風に、
桐の一葉も落ち初めて、
草間にわぶる虫の音も、
あはれ淋しく秋暮れぬ。

憶へば去年(こぞ)の今日此處に、
妙子の君と手をとりて、
秋の名殘りの花草に、
胡蝶と共に遊びしは。

去年(こぞ)の花草今此處に、
同じ色香に咲きぬるを、
夢かあらぬか今ははや、
君は斯の世にあらぬなり。

彼方に見ゆる館には、
君が調べの玉琴に、
芝生の虫も聲止めし、
昔しもうたゝ偲ばれぬ。

秋更け花は枯れ初めて、
世は寂寥になりゆけど、
君は枯れせぬ花園に、
御神と共に遊ぶらん。

○なやみ

下谷　伊藤糸字

あかしかれたるこの夜半を、
君のおもかげ忍びつゝ、
共に漁りしそのかみや、
思ひに堪へて文机の、
窓うちあけてつまだてゝ、
ほつれ毛重くかきあげて、
北ふるさとのなづかしき、
君ます方へ星を求めぬ、

○歸花

千葉　田村雛子

春の眠りの夢の香を
偲びかれてや歸花
我世戀しき思出を
小春の庭に咲きにけり
淡き匂は朝月の
影にも似たる姿して
つれなき風の時の間も
いとふに餘る思哉

○菊姫

松山　山脇幸子

細さく調秋さえし、
淺き流れに清ふ映じて
とはに崇(いたか)き神の殿の、
詩聖を領す菊姫が
天使の御風迎ふとき、
おりおりこぼす微笑(はゑみ)の露

朝とくこゝに草刈る童、
汲みしか奇しや露にして、
仰げばゆかし又露の、

しばし夜のたゆたいに、
姫は微笑の聲きよく
「汝ば孝子なり榮あらん、
倦みな挽みそやよ童」
今仙境に童は入りつ、
啓示の御影かすかなるかな。

○水仙

神戸 梶原靜子

夢より淡き有明の、
楡の梢に斜なる
朝の氣ゆるゝ森影を、
白き珊瑚の笛の音に
なつかしみ倚るさ男鹿の、
小枝の角をかいだきて
うす靄かなる水仙の、
白く漂ふ淺沼の
汀に立ちて黄金なる、
かぐはしみ髮けづりつゝ
まだ消えのころ夕榮の、
み空に若きさきがけの
小さき星のまなざしに、
はしき笑いの水に落ち、
白菀こぼるゝ香の高く、

勞ゝすめん水こそあれと
其掌にこぼれしはそも
母花ほころぶ其口に

ひとしき眸こらしては
迦かろきゆらめきに
森の女神の榮えあり

山本飛擊君筆



○初日の出

千葉 森靜子

あき津島わに年立ちて、
雲ゐにたな引く初がすみ、
けふあら玉のはつ日のて、
紫、紅、に彩色ぬ。

家ごとかゝぐる日のみ旗、
霞をもれてうらくと、
音もゆたかにばれ釣瓶、

千代しめ繩の松かざり、
のどかにてらすはつ日影。
輪飾かけし水をけに、

若水つれる少女子の、片頬を紅く色そめぬ。

◎華嚴の瀧

下野　木村しづゐ

地軸も破れよ裂けよと、眞直に落ちて雪と散り、
玉と砕けて岩を裂き、白沫高くひるがへる、
七十丈の華嚴の瀧。
龍神はひそむ瀧壺の、上をしぶきのかゝりては、
危く身をばひるがへし、翔ける小鳥の巧みさよ。
靈ある鑿の手をあげて、神のきざめる巌千年、
青苔ふかくとざしては、往昔のさまも偲ばるゝ。

◎藤の露

出雲　綾錦

雁なき渡るゆふまぐれ、戀しき窓に身を寄せて、
涙ながらにながめやる、雲の行方はいづこぞや。
十とせそのかみ目に胸に、寫し置きたる母君の、
やさしき聲や花の面、それさへ殘る色もなく。
松には風の友あるに、吾れは友なき只一人、
あるはしのびの濃き露を、共に汲はれぬみ母のみ。
瀬にせかれ行く鮎すらも、その水上にのぼれるを、
せめての憶ひまゝならぬ、義理とはつらきならはしや。
思へば妬し花露の、花にむすびて花に消え
露にかをりて露に散る、露と花との運命かな。

◎あらたま

西井善子

新玉の年の初めの、淸らけき海や波なく、
天朗りいとさやかに、なく田鶴の聲も床しや。

彩色の雲押しわけて、さし昇る初日の影に、
眺めやる沖の彼方よ、新潮の湧きたつ光。
われ猶も耳を澄ませば、そよ〱と吹く朝風に、
靜かにもとゞろく音ぞ、それやそれ潮のひゞき。
光そはわが大君の、庇ひなき恵の色か、
響そはわが神國の、萬代の運命語るか。
初日影昇るがまゝに、その光響と和して、
廣やけき大海原は、平和の色ぞ輝く。

◎まぼろし

和歌山　保田愛子

秋たけて木の葉うつろひ、骨あらはなる山のひだ、
ふく風も身に沁み入りて。蝶の羽はもろくも折れぬ
君見ずやそのなきがらに、蟻の塔きづきなせるを、
はかなしや榮華のゆめの、さめはてゝ今このすがた
草叢になくこほろぎは、哀れなる彼が運命を
悲しむと聲を限りに、吊ふとあゝよもすがら
闇の子うらぶれのわれ、こゝにきてこのさまをみて
叫びにき涙とともに、「榮華とは只まぼろし」と

◎釜山港の一夜

備後　池田郡子

絶影島岬砂白く　千鳥の聲は波に消へ
島をとり捲く漁舟の　やゝに廣ごる月の夜半、
たばしま近く寄り添へば　寂寥の夜の香は高く

銀花を刻む海の面に　縮緬の御手は啓がれり、
あゝ美はしき夜の海や　み空に閃めく清光の
浪に揺られて砕けては　銀蛇浮ぶにさも似たり、
此の清景に對しては　世を果敢なみし我れ乍ら
あはれ運命(さだめ)の辛くして　暫し讃美の歌をうたひぬ。

○少女が歌　　讃岐　あやめ子女史

知るや君
春の花もろくもちりゆけど、　香はいたづらに殘られど、
霞の色は消えゆけど、　空の光にさそはれて、
つゝむにあまる綠葉の、　かげいと清き水の心を。

聞くや君
天にやさしき佐保姫が、　心の琴の音はたえて、
そこに姿をかくせども、　未だうらわかき織姫の、
天の河原の星ちかく、　その宵々に消む梭の音を。

見るや君
ゆかしき風のあとゝめて、　朝の露のちる玉に、
うれしや野邊の草花を、　靜かにわけて行く鳥の、
翼も更のかげうけて、　自然のあやに醉へる姿を。

○磯の夕　　松江　さゝがに姫

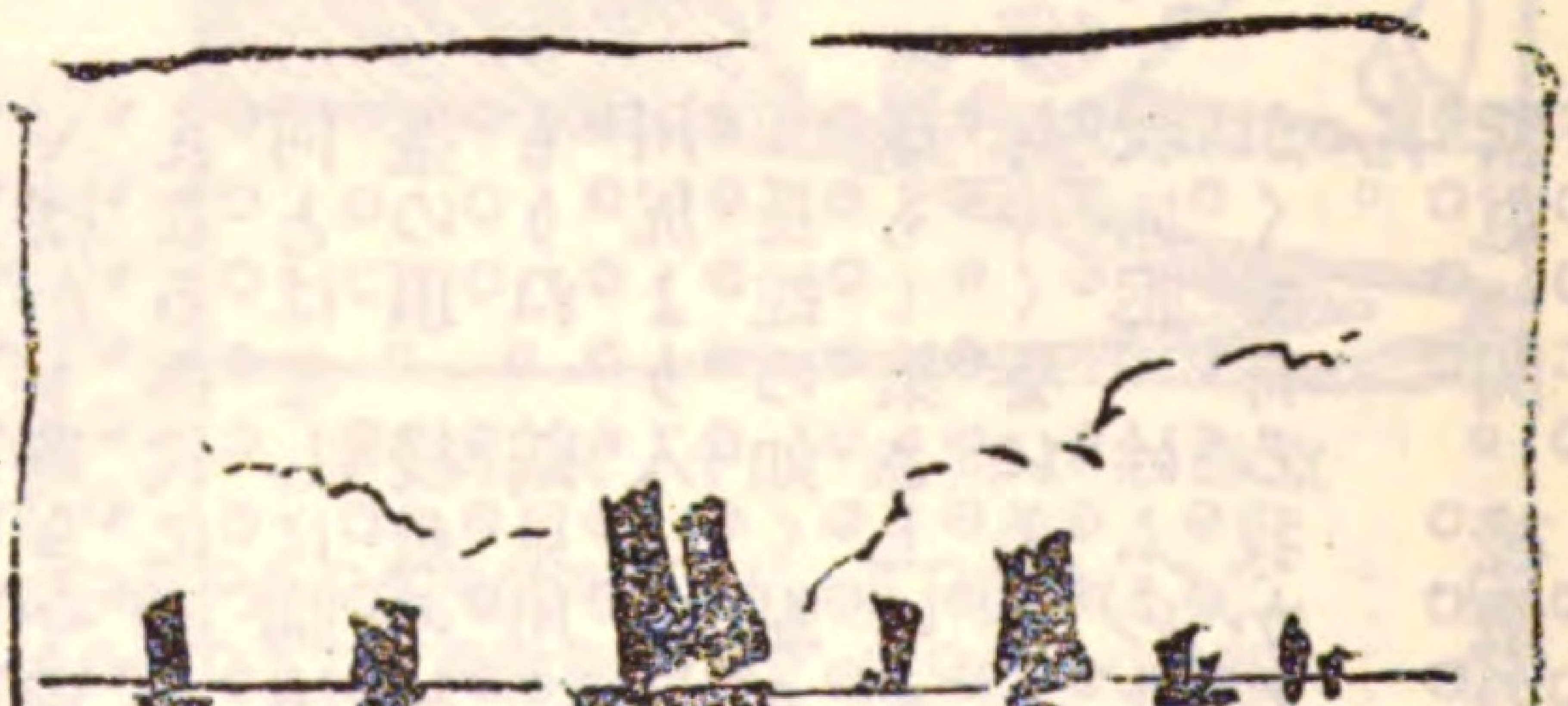
雨はれし夕七彩の、　虹いたづらに薄れつゝ、
匂ひのみなるそのほとり、　夜の平和は開けゆく。
夕の思ひ夢みつゝ、　潮さびれしあら磯の、
人生の殿にわれ立ちて、　海の莊美をながむれば、
深みの潮逆捲きて、　をたけび寄する荒浪を、
清き汀にそと受けて、　撫でつ宥むる砂や貝。
幾萬年の末かけて、　讒ひよる浪激しきに、
撓まず倦まず節操の　かはらぬ詩を謳ぶるよ。

○白菊　　播磨　天野登美子

あゝくしき花の香、　あゝたへなるしべよ
あゝくしき白菊、　あゝ妙なる花よ。

うるはしき朝日の、
にほふなるみ園の
またまなすしらぎく、
あゝくしきその香や。

海（賞外）　熊本島崎　平岡信子



○磯邊の思　　奈良　竹子

夕ぐれの思に堪へず、
只一人磯邊さまよふ
くれて行く海原遠し、
種々にわが世を思ふ。

彩雲は四方を照らして、
空遠く虹は棚引く
水赤く光をうつしゝ、
夕日影今しも沈む。

はかなきは人の運命よ、
夕雲の遠き磯邊に、
つく〳〵と世の樣みれば、　吾が頬に涙ぞあつき。
夜の色四方をとざして、　濤の音は幽かに、
眺むれば大空高く、　輝き出てし宵の明星。

文學士
沼波瓊音先生選



特別第三賞

○その夜（觀艦式）

神奈川縣鶴見五百四十一番地
佐久間芳子

世に壯嚴の數をあつめ、美はしきものゝ數をつくせる彼方、する墨の夜の幕ふかう垂れこめし沖遠く、うづ潮よする東の海に、たとはゞ天上の星晨こよひこゝに光をあつめて天降りけんとばかり、今し大いなる光明の舞臺は開かれぬ、旅順の沖に日本海に、幾多光榮の歴史を有する我大艦隊、幾百の艨艟海を壓して、秋津島國天高う、秋風清く菊匂ふ今日を、歡呼の中に我大君の、みふね見そなはしゝかしこさよ、今し美はしき各艦のイルミネーションは點ぜられぬ。探海燈は縱に横に、蜘蛛手と黑闇の夜の色を裂きてみ空に閃めけば、大いなる岩の如く山の如く天の一角に蟠まれりし夜の雲、金色の縫縁を縫ひそめて嚴かに人の目を驚かす。頭をめぐらせばそこの山の上と云はず畑といはず、蟻の如くに集ひし人の携さふる灯は紅玉の散りたるが如く、焚き上ぐる篝の炎空をこがして、寂びしき秋の山路に時ならぬ不夜城を現ずれば、鳥は塒を驚かされて怪しき聲に啼きたてつゝ、闇の暗にのがれ去る、人てふ人は手に〳〵赤き提灯打ちふり〳〵萬歳をよぶ聲潮の如く湧きのぼりて高く星の林が搖がす、涙こぼるゝばかり尊き今宵、み民われ生けるしるし有りて此盛んなる御代に遇ふ、嬉しきかあらず悲しきかあらず、何とはなしに胸迫るやう覺えて、夜風さむけき富士見臺の頂。棧敷の杜にそびらあてゝ、歩むるが如く沖をまもりぬ。鶴見川ほのじろう闇を流れて、潮田岬松黑し、川尻より入江の岸につながれし船のともし火、高う低う長蛇の如く點々相刻りて其數を知らず、思ふ夜光の球もて築き上げたる浮城の如く、光を競ふ流星の如く、輝やく譽に美くしう飾られたるみいくさぶねの中なる我同胞、けふの此いさをゝなしゝ尊き將卒の目にも、かくて有る我かごと歡喜極まりて涙滂沱たるものあらん。

紫電一閃。棧敷の葭簀に鞘走りして、探海燈は我頬にきらめきぬ。あなまばゆ、面向くべくもあらぬ強き光よ、かの黄金山の頂かけて旅順の沖に投げられしそれよ、さはれそは恐るべき忌むべき追想の閃きなるよ。探海燈は一閃又一閃、おごそかに人の目を驚かしぬ、

歡呼の聲は更に〳〵物凄きばかり四方に起りぬ、拍手の音は大濤の巖に碎くるに似たり。我も人もさながら物に狂へるにも似て。

（評）莊重盛麗、以てその夜の偉觀を不朽に傳ふるに足る、

特別第三賞

○劣等生（立ちぎゝ）

福岡 長岡鶴子

そは猶今宵の如く、月淸き夜なりき、いつも聲高に語り玉ふ進太郎樣の、常にも似ず、小聲にて親しき友に物語り玉ふをきけば……

＊　＊　＊　＊

忘れもせじ、八月七日午前九時すぎのことなりき、師の許を辭して、宿へ歸らんため、今しも福岡市唐人町の角を過ぎんとする吾を、後より「先生、中村先生ではありませぬか」と呼び留むるものあり、立ち止まりて振りかへれば、余が○○小學校にて、敎生たりしとき敎へたる生徒なり、嬉しげに、余が側にすゝみより、丁寧に辭儀して、親しく敎を受けたることの禮を述べ、尙言葉をつゞけ、「いつお出になりまして……お宿は……」と問ひぬ、吾は「七月十九日以來當地三番丁に宿し、もの學びに通ひつゝあること、明後日は歸るべければ、暇あらば、今明日中に他のお友達と共に遊びにお出で、……と答へ去らんとすれば、彼は又丁寧に頭をさげて行けり、我は彼が其日の行につきて、少なからず、心を動かされぬ、彼は吾が敎へたる級中最も劣等生と目せられたるもの、別に特徴とてもあらざりし爲か、呼びかけられて振り返りたるとき、吾は彼が名をも思ひ出す能はざりき、劣等生として取り扱ひたる余か頭には、あゝすでに、彼はあらざりしなり「冷淡なりし……」と、彼が雨中（呼びかけられたるときは、すでに雨降り居たり）吾が前に辭儀したるとき、余は心に叫びぬ、君！劣等生なりしだけ、また余が手に冷淡に取り扱かはれしだけ、彼が心事、尙更やさしく感ぜらるゝにあらずや多くの所謂劣等生の（吾は所謂といはん）余が通り過ぐるを知らぬが如く、會ゝ出て逢ふときは、餘義なく、

近江滋賀里所見　（賞外）



京都市小川通　千くめ子

頭を下ぐるに比して如何ぞや、思はざらむとするも得可らざるなり、……前には余が業を卒へて將に故山に歸らむとするを、わざ〳〵停車場まで送りくれたる三人の劣等生ありき（余は人のいふが如く劣等生といはん、學科に於て劣りしを以て）こゝに再び、後より呼び留め、只名ばかりの先生に辭儀したる劣生等に逢ひぬ、優等生の見もかへらぬに、何たる不思議の現象ならむ……か」とこゝに至りて話は終りぬ

妾は胸の迫るこゝちして、立ちぎゝしゝまゝをかくなむ

十一月七日、日清き玄海の濱にて

（評）文直截、怨無限、獨步集を讀むが如し。

天

○うたかた

姫路市小利木町八番屋敷本郷方　水守なみ子

岸を嚙む大浪小波は、ざゞゞざつとあたりに響いて、夜は深々と更けて行くばかり、さつと一陣、破戸の隙から吹き込んだ寒い風に、燈灯は一しきりゆらめいたが、暫くすると、又元の位置に復つて、寥々々々と物を云ふ。折りから表に道を辿んで行く木履の音、續いてしめやかに語り合ふ男女の私語、妾は思はず日記の筆を止めて耳を欹てた。

『だけど妾が死んだあとで、阿母さんは怎麼におなげきなさるだらう。』と濕んだ女の聲。

『もう其麼事は云つてくれるな、どうせわし等は不幸者さ、生きてゐて御心配をかけるより、死んだ方が孝行だ。』と哀つぽい男の聲……あつ情死ぢやないかしらと我知らず口走つて、臆病な妾は早胸がをどつて居る。が怖いもの見たさの慾に溺れず、そつと立つて破戸を少し開けると、先づ燈灯の光がさつと外面に流れた。はつと思ひ乍ら罅隙から窺ふと、飛んでちぎれて又結ぼれ乍ら走る雲の間から、見え隱れする利鎌の樣な月の光のため、二つの黑い影は、忽然としていたましい影を露はし、又忽然として限知れぬ闇の中に葬られつゝ、海の方へ歩を運んで居る。空には、ばさりと垂れた闇黑の幕を、打ちつけて居る金銀とも見ん數知れぬ星が、沖の漁灯とまがふばかり、きら〳〵と瞬いて居る。と、晩秋の夜風は、後の山の方から、丁度血に餓ゑた野獸の如く、蓬々と髮ふり亂して、黑い翼を低く垂れた並木松に悲愴な唸りをさせ、どつと一齊

に海へ吹き下して、静な睡を驚ろかすので、海若は怒つて波逆立つ。さながら世の中の破滅に先だつ瞬間の様な感がするのである。

ぎやつと異様に叫んで飛んだ怪禽の聲に、二人は少なからず胸とゞろかした様子。殊に女はひたと男に寄そうたが、いつしか足早に松の木陰に隠れて了つた。始めてはつと氣づくと、妾は二人を見殺しにして居る。早く助けてやらねばと心は身をせめる、動悸は海嘯の如く昂まつてくる。あたふた上り框を一足下りたが、總毛立つた身は、手が震ふ足が震ふ唇が震ふ。又た机の方へ馳け戻つた。時計は將に十二を打たんとして居る。

* * * * * * *

直様阿父さんを起して海邊へ走つて行つた時には、海上はいよいよ波荒く、貴き生靈を何處のはてにや漂はせし、狂ふ瀾怒る濤は、海中にひそむ魔の叫びかとばかり、徒らに人なき岸に怒號して居た。

（評）景情凄々、非凡の筆、

姉妹　（賞外）



長門萩　小國緻子

地 ○遠足

神田區千代田町廿一番地桑方　小磯君江

けたゝましいべるの音と一緒に校門を出るや、いろんな樂しい空想に耽りながら、佛蘭西靴を輕く急がして家に歸りました、未だ靴ぬぎで半分編上の紐をときながら奥へ聞えよがしに、「母さん。」母さんはしとやかにお好みの薄小豆の御召を召して千羽鶴の襖を開いて此方へこられました「あのねあした向島へ遠足するのよ、朝は十時に行くのだけれど今晩中にお辨當をこしらへて頂戴な、それから林檎も三つ四つ入れて下さいよ」ぽつとほてつた頬に髪の毛を五筋六筋ひるがへして、胸の動揺を抑へながら私は母さんにお願ひしました未だ靴の紐は半分しかとけませんて。

「まあ君江は何をそんなにあわてるのちやんと上てからお咄しなさいよあしたは何？向島へ遠足・・・おほゝ

……然し君江の足弱には良い位でせう」あら母さん迄あんな事を仰有る先刻爺やへ一寸咄したら爺やは北曳笑て「お嬢様のお遠足何だか可笑しう御座いますよ」つて。ほんとに憎しいは、明日はきつと日本晴花月華壇の秋草の眺めながら金鈴銀鈴の様な蟲の聲を耳にして仲よしの雪さんや清江さんやらてあの私の好きな薄の紫の友禪にオリーブで女郎花を散らした袖をふつてカドリールを躍りませうよ、爺やなんかは知らないわ……

……急に氣がついて上りました。風呂敷包も投げ出して洋刀鼻納ハンケチ。お辨當は女中のお竹が持て行く事になりました、今度はお天氣と南向きの小窓から外を眺めますると、芭蕉の葉越に何だかあやしい雲……大概大丈夫かしら、何だか心配だは灰色の雲を恨めさうに眺めながら獨語しました。妾の袴をたゝみ乍らお竹は「お嬢様明日は何だか雨が降りさうですねおほゝゝゝゝ」つて、憎らしいは。

（評）洗錬愛すべし〳〵、怨情の稚情寫し得て妙甚し。

（人）

○八年の後

松江　寺澤みつ子

今しハイネの詩集に眼を遊らして居ると、何處からか白色の蝶一つ、窓を掠めて去つたので、本を閉ぢ乍ら行衛を見送つたが、蝶は、一面に黄金の花の咲き亂れた野に、隱れたのであらう、見えなかつた。遙に暮れ方の陽と、晩稻の一穗々々に刻まれて、餘光は田の面の潦水に、波形の幻影を舞ひ立たして居る。するとそれを左右に縫うた畦道に、高く低く踏む足音がして、軈て川沿ひの稻架から現はれた二人の子があッた、年頃は共に十歳計りであらう、一人は漆黑の下げ髮を、眞紅のリボンで結んだ女の子で、一人は筒袖を着た逞ましい男の子である、今し女の子袂から流れ出て居る毛糸を、花と見たのか、翻々と戲れる蝶一つ。先刻のであらうか？すると、男の方は俄に立ち留つて、『ん！僕忘れて居た。』と云ひ乍ら羽織の脇へ手を入れた。出したのは柿二つ！『今朝貰つたのを、華ちやんに一つ遣らう、と思つて居たのに……。』『あら眞實！まあ……じやあ有難う。妾おつ母さんと二人で食べるわ。』華と呼ばれたのは、袂に納めて行くのである。蝶は何時しか先に立つた。

かゝる間に男の方は柿を食ひ了ッたのか、『僕此種を此處へ植ゑて遣らう。』と傍の土橋の袂に埋めて、「華ちや

ん、何日頃生へるだらう？』『あの先生がね、八年か、るッて！』『じやあ待遠いね』『あ、だけどね、その間に龍ちやんも妾もえらい者になれるから宜いわ！』『ン：：さうだね、その時は華ちやんと二人で食べやうね。』

『あゝ二人でね！』

陽は後の山に落ちかゝり、遠い藍色の山の裾から、徐ろに薄暮の色が蔽ひ被つて、頭の上には斜に紅の雲が流れた。今し蝶は一高一低、二人の行手を行きつ戻りつ！『あれ奇麗な蝶が。』『あゝ華ちやんとこの方へ行くわ。』と見る彼方、木立の中に道を見下した家の庭、女の母人であらう、招いて居られる。『あれお母さんが、妾歸るわ。』『僕も行からうか？』『あお出て！』と起る唱歌の聲、聽て一雙の姿は稻架に消えた。螢の光り……窓の雪……妾は、此二人が八年の後、今日を樂しく語らん事を祈るので、

（評）和氣融々、樂を點出したる、美し。

雪の晴（賞外）



愛知縣豐田村　平野俊子

秀逸

○寸燐工場

但馬國朝來郡竹内　秋山かめ子

近き將來に於て汽車は通じ、一新面目を此里に表はさんとする其時に當つて有志の人數名は相謀り寸燐工場の一棟を設立し、文明の空氣を漲らせんとて六月に敷地を買ひ入れ今や新らしき方柱狀の烟突から黑烟濛々として機關の轆々たる響きも安らけき里の人の夢を破るのである、あゝ其工事は着々と歩を進め。各戶の椽先きに其小箱の秋の日に乾されてゐるを見るに至つた、爲に悠々爲す事なき幾多の女の手はふさがれたのである、學校下りの少女が鬼ごつこの遊びは減じたのである、土臭い里の人等はこの貿易品の爲に其心を一洗した、西に藤和の山林を控へて其軸木供給は

遺憾なく、前に山陽の支線を以て其捌きの路は充分なり、あゝ壮なる此里、あゝ豊なる此里
金梨山の月は百千の金龍を波に走らして秋の景色を一しほとまさしめ、虎臥山の城跡は百年の恨みを荒城の松に懸れる月に訴へ風に歌はしめて居る、朝來の山は秋の錦を織りなして佐保姫を舞はしめて居る、幸多きは妾の身よ、樂しみ深きは妾の身よ、寸燐工女なる賤の女ながら、高貴の人の幸福よりまさる此身

（評）工場が出來て自然美を損ったなど、言はず、意氣勃々。

○江の島の春

長野縣北安曇郡陸郷村　安坂藤子

病を養ふべく江の島に來てからもう二週間あまり、語らう友なき侘びしさに、つくづく都が戀しくなつて、明日は槍が降らうが刀が飛ばうがと思ひ切つて決めた四日目の朝、長閑な波の音、雑巾がけの澤やかな日向の縁側が、見る目眩ゆく光つて居る
折角の決心脆くも折れて、またしばらく靜養しようと云ふ心變りの早いのが、空の變化の夫れに伴れるのかと微笑まるゝ。
裏山を廻つて邊津宮神社の下坂を登る
藻山、常盤樹の此界隈は、冬枯の淋しさを知らぬ代りに日を追うて新くなりゆく春の移りも知られぬのであるが、爭はれぬは其時節の面影である。
自然の岩角を切り下げた石磴、その冷かなる段の上に椿の花の落散るも面白く、椿の散は、やがて春深くなりゆくなり、と思ふも嬉しく、心地ゆるやかに段を上れば、社頭の梅花數百點の星をつけて、いち早き春の歩みを告げ顔である、かくして春は知らぬ間に老いて、梅子老い、櫻實熟して、やがて涼呼ぶ人集り、衣香島中に充ち〳〵て、清けき春の行末は穢れた夏の手に移るのである

（評）春の朝景色に脆くも袖引留められしも優し、末段の慷慨もよし。

○露

伊勢　菊之舍

夜と云ふ黒い冷かな幕が天から投げられて、山も川も海も野も田も家も一面に包まれてしまふと齊いみ空の内に圓い月がかゝる、此時吾等は多くの友と共に其月の都を出て風に乗つて下界へ降りたのである
吾等が月の都を出たのは丁度望の夜であつた、下界は水の樣に澄切つてかすかな鐘の音が風につれて此處迄聞えて來る何か知らぬが黒い島が其中を縫うて鳴きつつ行くのが見える

吾等は多くの友と秋風に送られて地面をさして降り初めた、其時の愉快さは何とも云はれない

地上をさして下りつゝ吾等は友とかう言ふ事を語つた

吾等は地面に降りると何れ何物かの上に乗せらるゝてあらうが吾は掃溜に下りるのはいやだ、汚れた地の上はいやだと云ふ、そして或者は美しい花の上を望ましいと云ふ者もある、或物は可愛い兒の袖の上を望む者もある、或者は石の上はいやだ木の葉の上だなどと爭つて居た

其時秋風は靜かに吾等を制して、汝等は是から何處へ行くかも解らぬに好きな事を云うて何をさはぐのか、汝等は人の世の爲に神の惠を傳へ淸く尊き影を與ふべきではないか、世を厭へる人に望をあたへ戀に惱む人を慰めねばならぬ汝等ではないか、下界の人の子の爲情と涙とを以て蘇せよかし汝等よ、吾はいつ迄も汝を守るてあらうと云うて誡めた、そして吾等が地面に着くと等しく、秋風の姿は消えて了つた、

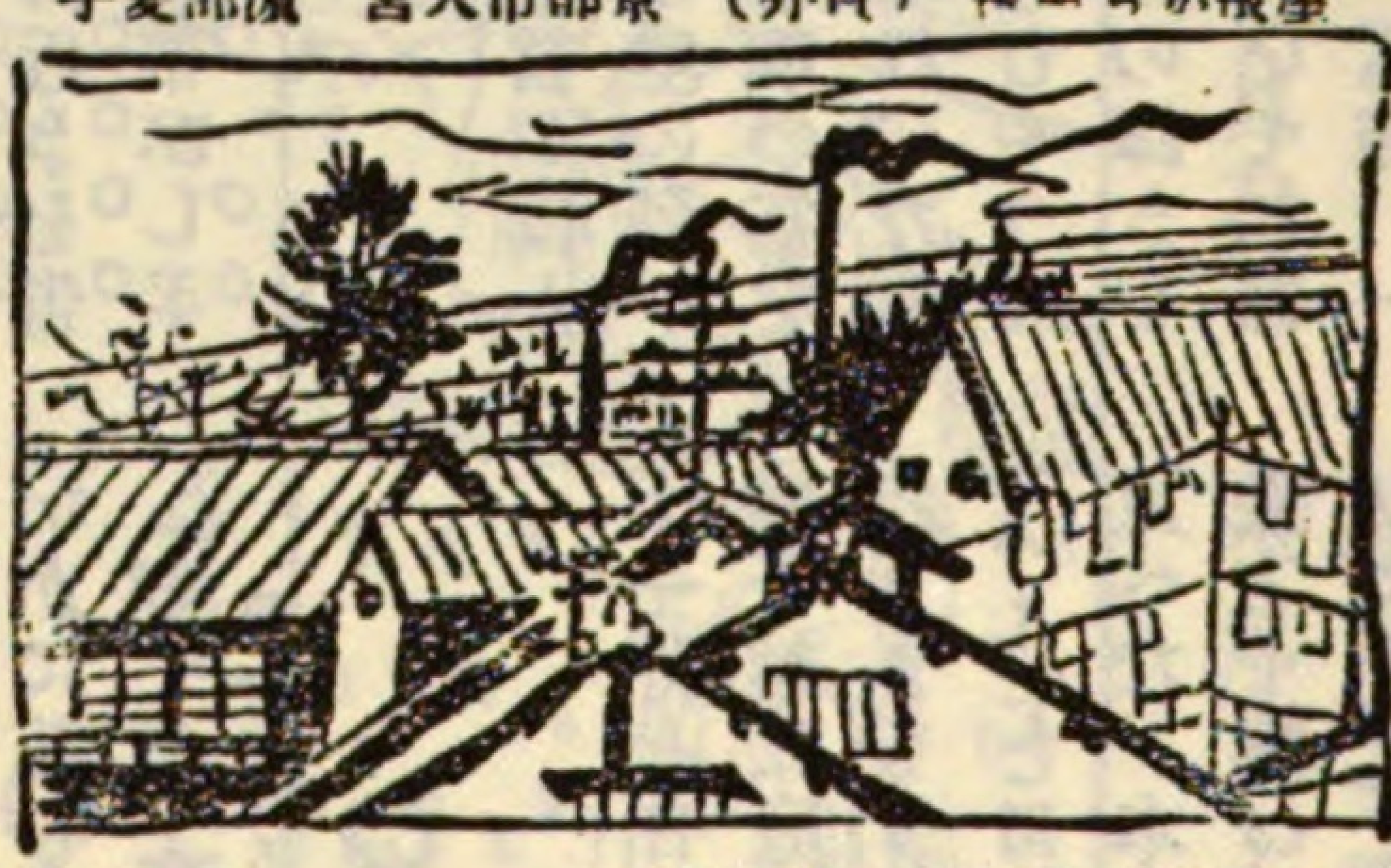
汝等は茫然として地面に置かれたまゝ今の秋風の言葉と考へ人の世の爲盡すべき事を盟うて居た、其内に段々東の空が白んで鳥が鳴き風がそよそよと吹いて、やがて暖かな美しい光を持つた日は華かに青い空へ昇つた、

吾等は其光に驚いて氣が付いて見れば、四邊明るく美はしくなつたばかりか今まで冷かな黑い色であつた吾等體から黃金の光を放つて菊の花の上に置かれてあつたのてある

そして傍らの花園に立つた美しい少女が、吾等を眺めて、あゝ奇麗な露だと云つた

（評）清新、文亦露の如し、

屋根から屋根 （賞外） 京都市大宮 濵部愛子



○年立つ空

三河西加茂郡石下瀬村 澤田みさを

年立つみ空の化粧ぞ美しき、夜べの雲ゐまだ散りやらぬ曉は、一色にほの闇き紺藍を罩めて、紫金に輝く明星の光も幽かなるに、ひんがしの山際少しあかり立ちて、燻れる樺色の一刷毛に彩られ、夜の女神がみ手にのべられし白雲の亂れは、いつしかに澄み行く濃き孛藍色の帷に美しき模樣を織りて新しき日神を迎ふべく粧をこらすなんめり。

山の端に棚引ける銀鼠色の朽木形の雲、やゝに退き去りて、殿軍に殘りし許り幽かなる光を放てる曉の明星の、やがて美しき瞳を閉ぢて、夜の國に還り去れる頃としもなれば、煙れる東の空は早くも澄める橙色にぼかし出され、紫藍色の大帷は何時か葡萄色とかはり、葡萄色はやがて瑠璃色とうつり、日神の出御近きを告ぐる橙色のやゝにひろごるにつれて、嬌羞を帶びし手弱女の頰にも似通へる美しき薔薇色を含みつゝ、こゝに日もあやなる一大絵卷物を現ずなる。

麗はしき色彩に飾られて、狂ひ動く雲の姿も言ふばかりなき觀物なれど、殊に奇しき妙なるは東の空の秒一秒うつり行く粧なりけり、見よ桃色に匂ふ瑠璃の空を紅追ひ、黃走りて、やがて一點の猩血あらはれ、たちまち春潮の一時に湧き立てると許り、燃ゆらむやうなる妖炎東の空全面を彩りて、やゝに眩き爛銀の輝きを加へ、見る／＼白熾鐵とも見ゆる一條、つゞいて二條三條、天に射るよと見るまに、百條、千條、萬條、一度に起りて天をつき、晝の雄神は嚴めしきみ姿に、慈眼の瞳を見開きつゝ、悠然として新しき年立つ空に臨みたまへり、あゝ其の時よ、八洲三千里は萬斛の黃金の滴りをあびて、こゝに麗しき金世界を現ぜしが。寸…尺…丈…日神の昇りたもうにつれ、空は紅あせ、黃衰へ、極めて薄き普魯士亞藍色となり、靜に淸く平和ぎて、いかに新しき年の平和と長閑なると示せるが如し。

あはれ年立つ空の、いかに奇しき變化に富みたるよ、いかに美しき彩に富みたるよ。

（評）旭日を寫したる妙文、麗水子のと蘇峰子のとあり、これ、それ等を學べるものか。

○ひと日のわざ

能登國輪島町　高森一子

十一月七日、朝――目は醒めたが餘り寒いので其儘、硝子越に庭の方を眺めて居ると、不意に後ろの方で「お起きよもう七時ですよ」と、母樣のお聲がした。私は「ハイ」と口の中で言つてッヽト立つて手早く衣服を着更へた、本當に冷たかつた事、けさの寒かつたこと。

晝――縫ひさしのお父樣のお羽織を出して來たが、縫ひにくて／＼背を合せる迄に、針の四本も折ッた、殘つてをるのもくの字方の計り。もう何だか厭になつて仕方がないので、其まゝ母樣にも告げないでお向を訪うた。すると千代子樣も一心にお針をして被在るので夫を見た私は、自分の良心に咎められて、「イエ私遊び

來たのじや無いの、内の時計が休んでゐたのでお宅のを見に參つたのですわ」と、態う口から出たまゝのことを言つて直ぐ引ッかへして再び、針を取つた其お蔭て太陽の這入らぬ内に仕上ッた。是も千代子様の賜だと心の内で感謝した。

夜――お友達に上げる栞を二種編んで、時計を見たらまだ早いので、今日着いた女學世界を繙いた、眠に附いたのは十一時に少し前。

（評）靈の段よく人情の機微を穿てり。

○自炊

陸中和賀郡笹間村　森毛　利子

今晩は僕が、炊事方擔當だと仰有るから、お飯の方は兄さんに任して妾は、お菜を買ひに出かけた。

程經て歸つて見ると、お飯はグッ／＼煮えてる、火は熾んに燃えてる、兄さんは……、と見ればあちらの方でお膳の準備、

オヤ、兄さん、お飯ならモウ、火を引いていゝてせう。

と云へば、

さうか、然し今夜は工合が悪いから、お粥にしようよ、お汁を煮る手數も省けるし、經濟的でもあるし、所謂一擧兩得だから……、

さてお膳に向つて後も、

偶にはお粥もわるくないネ、

と平氣らしく仰る顔付といつたら？、失策つたのに、

＊　＊　＊　＊

其後兄さんは、再び炊事擔當などとは、間違つても仰有らなかつた、偶兄さんお飯の方をといへば、僕は序があるからお菜買ひに、といつも逃げてある。

（評）羨ましき生活、



子守（賞外）　上野沼田　佐藤つゆ子

○今朝

群馬　せゝらぎ

「お祖父様どこへお植ゑ遊ばすの」と、私は雑巾がけの手を止めて、伺へば、こゝとて、いつもおうたひをなさる、はなれの、まがきの下を指し給ふ。お頭の霜と色をきそふ、白菊の一本を左手に、鍬を右手に、持た

せ給ふを、見れば、そゞろに、太刀とりたまひし、五十年の、むかしのお姿の忍ばるゝよ、
朝夕丹青遊ばした、しるしの見えて、此苔と成りしを、見たまふ、御心の中、いかになど考へ居れば「もうお茶がはいりましたよ」と、お母樣のお聲がしたから
さあ、大變と急いで、又取りかゝればバケツのお湯はもうさめてしまッた
「お庭の垣根の菊のはな色は何色かぞへて見れば赤も黄色も亦白も……」。とかあいらしい、唱歌のこゑがだん〳〵近くなる
お父樣と、運動にいつた、久ちやんは、もゆるやうな蔦と、漆と、やさしい野菊と、夏のなごりし川原なてしこの、少し色のあせたのとを、持て歸つてきましたあゝ、私の文机の上にも亦、世の中の秋の、色がやがて移される事でせう

（評）清淡なる小品文なり。
原文あまり假名ばかりなり、字畫の誤も多し、漢字を知ることに努め給へ。

○弟と妹

秋田縣橫手町伊藤慶太郎方　伊藤蕾子

俳句を作つたから、訂正して下さいと、今年九歲で學校の方は、尋常科の四年生の弟が、持つて來たのを見ますと、まるで句になつて居ない、どこを訂正すれば可いかわからないので、思はず吹き出しました。
するど、弟は大層怒りまして、『失敬なッ、訂正して吳れと願つたのは、わるいところがあるからなのだ。それに、劈頭笑ふなんて、いくら姉さんでも、失敬じやないか。』と、疊ざはりも荒ら〳〵しく、障子も、ピシャリと閉ぢて、出て行つてしまひました。
　すると、今度は、障子の明けやうも靜かに、疊ざはりもしとやかに、妹がは入つて來ました。これも、作り初めだから、訂正して下さいとばかりに、自作の短歌を持つて來ました。で、妾がそれをぢッと見て居ますと、『姉さま、笑つて下さい、妾は、笑はれても怒りませんよ、武ちやんのやうに。ね、妾、姉さまにならいくら笑はれてもかまひませんから、どうぞ、他の人に笑はれないやうに訂正して下さいな。誰れだとてみんな同じこと、初めから上手な方はあるまいと思ひますわ。』と、妹は今年十一歲で高等科の二年生です。
　嗚呼、この妹と、この弟と！、どちらが可愛いでせうか!?

（評）余はこの弟を愛し、この妹を寧ろ憎む

○奥村女史の演説を聞く

能登崎島町勝田方　池野秋花女史

切々として絃を斷つの其れにもまさッて悲壯な聲である、話頭は今や、輜重輪卒に移た。言々句々悉く涙で血て、怒濤の如き一揚一抑眞に人をして泣かしむるの語調である。

『人は皆輪卒〳〵ッて言ひます、其れから俚謠にもあります「輜重輪卒が兵隊ならば、電信柱に花が咲く」…』妾は實に憤慨に堪へんのです、無論輪卒は銃を取りません、取りませんが、其苦痛、其困難はたしかに歩騎砲兵以上てす。妾は今度滿韓の野に渡ッて、彼等が國家のために渾身の血潮を流して、行き惱んて居るのを見て、實に〳〵惆然て堪へませんてした。』

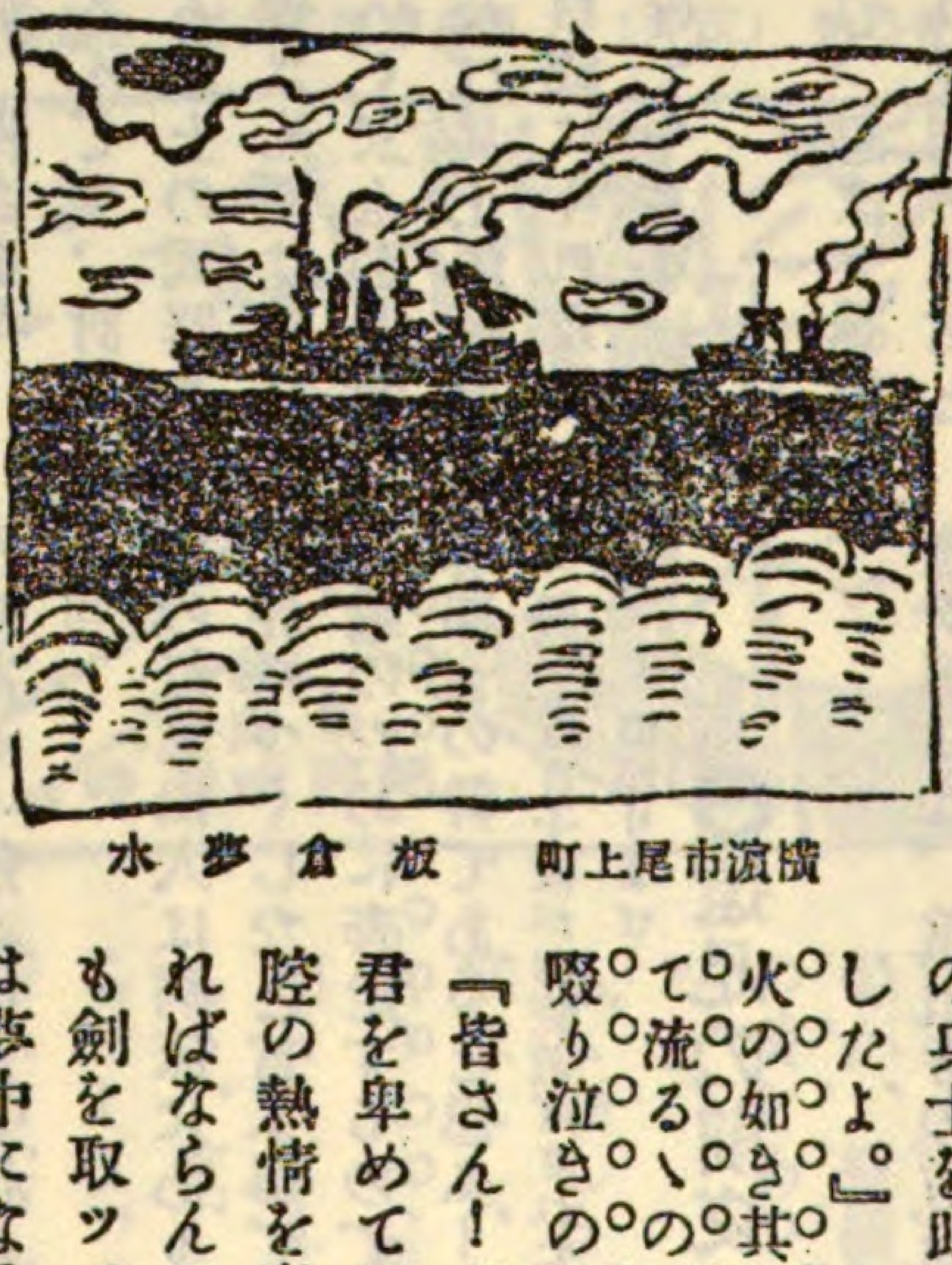
女史は感慨に堪へざるものゝ如く、眸をみはッて、口唇を咬みしめて、トンとテーブルを打ッて、さて凜然とした。

『什うてす、皆さん！、妾は彼の地に居ッて、野戰病院を訪うた時、其七分通りは皆輪卒と訊いて、此處でも亦熱い涙を流しました。さうして妾共がまゐりまして、本會の事業の事を話しましたら、滿場の兵士、悉く病苦も何も忘れて、潸々と泣きながら感謝するので、其時妾は實に〳〵、われ〳〵は身を粉にしても、可憐の兵士を助けなければならんと思ひましたよ。』

火の如き其双眸より熱い涙が滂沱として流るゝので滿場悉く水を打ッた樣に啜り泣きの境に入ッた。

『皆さん！、病死と言ッて、兵士等諸君を卑めてはなりません!!!、否却て滿腔の熱情を表して、勞はッてやらなければならんのです。ごらんなさい雖しも劍を取ッて銃を取ッて、進軍する時は夢中になるものです、だから彈丸一發、胸板を貫かれて、ウンと死ぬ人は仕合せてす。其處へくると輪卒は可愛い相なものてすよ、足は腫れ太ッて、力は盡きる、散々に苦しんだ揚句、冷酷な死の神の手にわたるのてす。……』

語尾が長く引いて、低い調子だけれども、腸を寸斷



大觀艦式（賞外）

濱松市上町　板倉夢水

て、衷心からあふれてるので、句々皆骨に沁み込む樣てある。

『皆さん！兵士が劍を取ッて、潔よく倒るゝのは國家のためてすけれども、極端に言へば、われ／＼のために戰ッてくれるんてす、討死して吳るんてす、其を其を人情として冷然默視して居られますか。皆さん！、兵士はわれ／＼のために戰かッてくれるんてす、討死してくれるんてす！吾々を守ッて吳れる最上の武器なるを忘れてはなりませんよ!!!。だから皆さん朝は早く起きなさい、夜はおそく休みなさい、いくぶんかの金錢を取ッて、そしてかの可憐なる兵士及び兵士の家族をすくひなさい、否、金甌無缺なこの皇國に生れた以上は、身を粉にしても可憐の兵士を扶けてやらなければなりません!!!』

其の調子がいかにも、悲壯で激烈だので、思はず凝視すると、其風姿、其眉、其眸、悉く是れ愛國と忠君との精神でかたまッて居る樣に覺えた。

最後に女史は淚をはらひ／＼『皆さん、妾は什うせ、演壇で死ぬつもりです、死眼前にありてすが、妾の主義は倒れて後にやまんのみて、國家の爲めなら、水火も敢て辭しないのてす。……』『恐らく皆さんと御はなしするのも是が最後てせうから今申した忠君愛國の四字をとこしへに／＼忘れぬ樣切望してやまぬのです!!!……』

と語り終ッて女史はほろりとされた。妾は何となく胸が高くなッて、深い／＼感想に沈まざるを得なかッたのである！熱心は人を偉ならしむるの唯一のものである!!!

かの紅葉山人は病床にありつゝ、死ぬまで筆を取ッて文界につくしたと言ふ事であるが、又女史は死ぬまで事業のために奔走するのてある。枝こそ違へ歸する處は同一の幹であると思ふ！。

（評）五百子樣が御覽遊ばされたら嘸かし御滿足に思召されることて御座りませう。

○遠足の前夜

遠江國見付町　土屋まつゑ

愈々明日は、舘山寺の方面へ向つて、遠足をするのであるか、待ちにまちかねた、妾の望みはこゝに達せられた、

あゝうれしいな、うれしいな明日は學校へ六時に集るのぜから、早くやすまないと、必と眠くつて困るに違ひない、だけれど、山田さんたちは、靴でお行きなさ

るつもりかしら、それとも、田舎路のことだから、草履になさるかしら、今日お聞き申せばよかつたに、どうも氣になつてならない、おやまだ八時、では一寸山田さんの處へ行つてこようと決心した「お母さん！山田さんのお宅へちよつと、おきゝ申しに行つて參ります」と、母上の今夜はもう晩いから、明日の朝に早くゆきなさいと仰つるのもきゝいれず、すぐとかへりますとて出かけた、そしていつて聞いて見ると、やはり草履にするとのことだ、また明日は……と別れをつげて、小路を右へまがつて中川橋へかゝつた、人通は少なく、いと靜かて、月光が水面に、きら〳〵するのが見ゆるふと足をとゞめて欄干にもたれ、寂々と更けゆく、大空を眺むれば、何處より雲のいてけむ、今まで燦然ときらめいて居た月光をかくした、おや明日は雨になりはしないかなど、小さき胸を痛めてゐると、遠くかなたより、若者のひな歌が、だん〳〵近くなるので我にかへつて、いそぎ宅へと歸つた、

明日は早起きをするのだから、すぐと寢たが、どうしたことやら眠れない、目を閉ぢて見たけれど、何時眠られさうもない、目は益々冴ゆる許りである、明日の目的地なる舘山寺といへば、濱名湖岸で、見はらしのよい處なので、後は小松原、彼方の岸も松原半島、其間には、白帆あげた漁船が、縱横に往來して居る、實に自然の美をあつめた、景色のよい處だとのこと、

あゝ樂しきは、明日の遠足である、氣候はよし、加之に向ふ處は、非常に景色のよい、廣々とした處ださうだから、明日はどんなに、まあ、愉快のことだらう、直ぐと、東都のお叔母さんに知らせよう、

折から、戸外には颯々と小岱おろしが、棺を弄ぶ音のみ高うきこえて、其の間々に、犬の遠吠がかすかに耳に響くのてある。

（評）履物のを一寸したことなれど面白し斯ういふ際には、こんな事が氣になるものなり。

山寺の秋（賞外）　南多摩郡忠方村　中島寥葉



和歌

佐々木信綱先生選

天 ○

うすもやのあや絹あけばうつくしき
　初日浮べて新潮よする
　　　出雲大社のふもと　紅花子

【評】初日の光、いかにうるはしからむ。よみつゝもすが〳〵しき思むねにみつ心地す

地 ○

折にふれて
　　　相模鎌倉　石田千代子

五年の旅を歸れどうらぶれの
　姿に泣かん母もなき身よ

【評】あはれなるおもぶき胸にしむやうのうた也。

人 ○

夕空にみだれたゞよふちぎれ雲
　　　群馬縣碓氷郡坂本町　片井満都子

それにも似たるわがおもひはや

【評】空ながむる若人のおもわ戀の色深かるべし。

秀逸

○ かゝる時かゝれとてしも益良夫の
　汝に教へし母にはあれど
　　　土佐　秋月廣江子

○ 廣庭の黄菊白菊咲きみちて
　大臣のやかた晝靜かなり
　　　栃木縣　木村靜江

秋風

○ こもりゐの夢もあるらん秋風に
　草の二尺は心して吹け
　　　弘前　翠葉光子

○ 病む母のみ髪をけづる寮の椽
　小春日和の風ゆるう吹く
　　　弘城　松琴女史

○ 何となく芭蕉破葉にうた染めて
　雨にうたする夕ぐれの窓
　　　麹町　加藤豊子

○ 世を人をさては我身をあざけりて
　　　下野　新井琴子

入りし山の夜太古に似たる
○下總　川奈部よし子

永へにねむれる蝶を吹きなぶる
颪うらめさし秋の夕暮
○南總　花江女史

白菊に雨やはらかき夕まぐれ
若き女のうらなひを聽く
○備中　川合花枝

思出の悲しき宵を文机の
小瓶の薔薇そとくづれたり
○四谷　佐藤つきす

紙燭して門に出づれば雁ぞなく
脊を旅にやる露のあけぼの
○上總　賀川秋子

白藤に雨やはらかき朝の窓
手飼の鳩の行方ながむる
○陸中　黑澤美津子

雨もよひ雲ひくゝ迷ふ夕暮を
枯野の末に狐聲する
○神田　大澤隆子

思出の千束の文をやきすてゝ

なほ物思ふ灯のもと
○府下　うい子

なき母のあつきなさけのしみ〴〵と
思ひあたれる秋の夕ぐれ
○芝　八太邦子

花賣りて歸る少女に行き逢ひぬ
小雨そぼふる京のはづれ路
○千葉縣　芳竹女史

南椽に小猫ねむれる冬日和
水仙さきて高き香たゞよふ

●
やせし手にふれひき裂きて地になげて仰ぐみそらを星一つとぶ　姫路　濱田きぬ子

もみぢ
梭の音やさしき節の唄やみて小窓しづかにもみぢかつ散る　淡路　奥井竹女

●
すゑ遂にかゝる運命としらざりし若き心のむかしはづかしき　武藏　ぽたる子

●
かぎりなきうれひを笛にまぎらして海にそひ行く夕月夜かな　新潟　小林かう子

夢
戀しさのかぎり集めし身なれども夢には笑ふ事のありけり　千葉縣　石井いせ子

●
誇る色香なけれど名無草さて秋の野のあはれましけり　久留米　鍋吉和歌子

●
ほゝゑみてうつりましたる御姿におもひ出多き我が涙かな　羽後　草剪みさを

初冬の雨　名古屋　早川くわ子
なか／＼にのこるも哀れふかき野に木の葉まじりの時雨そほふる

●　岩代　根本葉江子
しら雲のひまより見ゆる紅葉山龍田の姫の宮居なるらむ

第十號の綺葉書見て　横濱　白ばら
秋の夜をともし火近く文よめばあはれ身にしむ虫のこゑ／＼

●　栃木縣　前澤規矩子
編笠の人は世にかくれたり那須の大野の黄昏れの月

●　下野　木村露子
鐘の音はゆるう夕べの靄に消えて紅葉の山は月になりゆく

深夜聞砧　青山　森茂子
むさし野の野末の風にひゞきくる衣うつ音のさてもさびしな

露中の虫　大分縣　清水南溪女史
白露の玉のひゞきと思ふまで澄みこそまされ虫の聲々

●　各古屋　原田こと子
なげゝとて給ひしふみにあられどもいかでかかくもかなしかるらん

●　備後　福田かよ子
うちつれて子らのかへりし森の上にきらめき出てぬ夕づつの影

偶感　出雲　じん子
旅僧の雨にぬれたる破れ衣やれたる袖に秋の風吹く

晩秋　八王子　小池つれ子
菊瘦せて吹く風寒き朝な夕な鋏取る君の忍ばるゝ哉

野菊　尾張　川村嘉音尼
中々に霜霞なせる花よりもあはれなりけり野邊の白菊

●　弘前　佐野翠坡
杉多き奈良の都のみ社の眞晝靜かに鹿群れ遊ぶ

紅葉　能登　福田美與子
あれはててとふ人もなき古寺のもみぢの錦誰か見るらむ

立春　越中　諏訪芳子
朝日さす暖が軒端の霜けぶり霞となりて春は來にけり

●　總山　關操
もゝ千草かれてさびしき秋の野に獨りのこれる菊の花

●　信濃　清水りん
人遠き山かげの庵月澄みて淋しさかこつ松虫の聲

凱旋せる軍人に代りて　大阪市　川村秋子
國のため露ときえにし友かなしこがらしさゆる滿洲の月

春雨　上總　小川さつ子
朝そらの霞もとのみも思ふ間に柳の糸をつたふ春雨

●　信州　岩問花子
諸共に慰めむすべのつき果てゝ只姉妹が抱に合ひて泣く

●　大阪　田中千枝子
凪砂地に磯の老松かけさして月あかき夜を雁鳴き渡る

●　千葉縣　朝尾節子
ままごとに睦ましかりし清にあひてはぢらふ身とはいつなりにけむ

●　神戸　花子
旅僧の行くかげ寒く月さへてあしの花ちる川添のみち

●　鏡ヶ峯麓　月の桂女史
戀しさに君がみ名をば百千度色ある紙に書きて見し哉

●　近江　片岡露子
湖の水に雲なき秋日和島山めぐる小舟繪によき

●　越後　三浦美以子
菊の露硯にうけてかぐはしき秋に別れのうたしるさなむ

秋の日　南總　鵜澤白童
衣ほせる竿が裏庭人なくて小き柿の實ほろ／＼と落つる

●　姫路　婦美子
今宵また忘がたみの小ばこより取り出てゝ泣くようすゞみの文

折にふれて　周子
故郷の母のよふらむ心地してさむれば寂しこがらしのおと

冬の朝　常陸　川島かく子
少女子が淋しさみゑに似たらずや置く霜さむき冬の曙

秋の夕　久留米　笹原雪子
夕庭にさびしく落つる桐の葉に哀れをそふる蟲の聲々

たをやめの身をなげしてふこの池も今宵しづかに月のやどれる　紀州　保田愛子

大御代の春にあひてぞ露のちよの高れもいさなはれけむ　横濱　花舟子

山里の松の嵐にみたれけりふけ行く夜半の衣うつ聲　下町　久保やを子

芭蕉葉に秋風そよぐ南窓歌詠む尼のいとうら若き　遠州　靜枝

病める母の看護にひとり侍る夜半心も千々に虫そなくなる　薩摩　山本ゑみ子

中村醫學士
令孃文子筆



雁一つら聲なく渡る潮の上の夕の雲に秋の風吹く　仙臺　南もり子

歌なくて寐れんは惜しきおばしまによりて虫きく草月夜かな　神戸　梶原靜子

水仙

行く雲の雪ともならん夕まくれ千鳥しはなき枯芦そよぐ　梶原　紫香女史

夢に見し人の俤なつかしき霜の朝戸に水仙薫る　駿河　あき子

竹

秋姫が夜ことの露に綺羅そめてかきましゝ紅葉色まさりゆく　日向　野元ちゑ子

鹿

すなほなる心の友とみるへきはまかきの竹の外なかりけり　岐阜　田中悦子

さらぬだに物あたれなる山里の夕さびしくさを鹿のなく　新潟　大崎きくの

月によりて君ます空をながめやる夕の袖に雨の香さむき　福井　榎並保子

訛ある法師に道を問はれけり稲刈り歸る秋の野の暮　福島　隈水女史

雨細ふ紅葉ちりしく夕まぐれ何地行ぐらむ白き蝶とぶ　千葉縣　森靜緒子

野の夕べ鐘の音遠く流れきて薹に小さき揺ぎみゝたる　横濱　山崎京子

あら玉の年たつ空にあふぐかな雪もかゝらぬ不二の神山

野末吹く風も身にしむ秋の夜を誰か子のすさび笛の音きこゆ　筑後　菊花女史

落葉掃く人もの言はす冷かに廣庭わたる秋の夕風　筑前　副島吟風

菊の花園に立て

花園にとりどり咲ける菊の花いづれを取りて母に手向けむ　近江　はる子

町はづれ辻占賣のともしびのかげうすれゆきて雪ふりいてぬ　金澤　山田はる子

もゝ草のくまなき露を眺めやる人うら若し花園の月　加賀　多和田鈴子

山路霧

戀こひて山路を一人辿り行けば君すむ彼方霧たちはたる　美濃　傍島美遊喜

●　伊勢　武部みちよ
城あとのくづれ堀江の水青く蘆の葉そほつ夕ぐれの雨
東郷大將　相摸　山口春子
日の本の國のまもりと仰がれて外國人も慕ふ君かな
冬の月　播磨　西村むら咲
冬枯てとふ人もなき山里にすむ月影をあはれとぞ見る
●　信濃國　とき子
君しまさは共に愛てんを歌はんを紅葉うつくし夕暮の窓
●　横濱　寺田光子
ともすれば墨染衣ねがふ人のその心根をあはれとぞ思ふ
折にふれて　本郷　朝井松子
學び舍を窓に時雨の聲聞けばそゞろ戀しき古郷の母
●　香取　平山ふさ
山松の梢の風は吹き絶えて月すむよはなさを眠のなく
●　奈良　今田操子
言葉にはいでたゞ君をはげませどつゝみもあへぬ袖の白露
●　上野　河內千代子
くれ竹の節面白き笛の音にいよゝ冴へゆく十六夜の月
●　信濃　中島秀子
打招く力もなげの枯尾花一むら殘る野邊ぞ淋しき
●　新潟　風間露子
新墓に香の烟の細うゆれてたゝずむ人の面やつれたる
●　小石川　千代子
晴れやらぬ冬のはしめの空よりもくもりがちなるわがこゝろかな
●　大阪　鈴木しゆん
共に觀し月は昔にかはられど君なき今宵思出多き
●　美濃　杉山芳子
夕霧はたなびき初めて晩稻田の案山子の笠に百舌鳥なきしきる
●　茨城　藤田時子
たつ年にまついのろかな日のもとは海のみ國よ海さちあれと
落葉　備中　さゆり子

枯尾花なびく野末に日はおちて高嶺おろしに紅葉みたるゝ
●　廣島　白雄
何となてゆかしかりけり白ぎくの垣にみださゝ咲が一つ家
新墓　長門　白菊
風なきにたむけし小萩小ゆらきてぬかづく人のまだうら若き
●　三河　つま子
夕はえの彩雲ながら水にひきて白帆しづかに歸る海原
●　茨城　秋山きみ子
白百合の花かげうつる野の水や夕べ人なくたゞ香のたかき
●　上毛　愛子
糸萩の小さき花に宿りたる露や亂れん靜かなれ風
●　芝　穎川とき子
もみぢ葉は今朝の嵐て散りはてゝ木立もれくる月ぞ淋しき
●　長門　梅田染子
筑波ねは霞にこめて利根川の流れゆく／＼春の日長き
●　德島　美智子
家を出てこゝに三年の秋のくれたらちね戀し白菊の窓
●　横濱　菫香女史
大君にさゝげし此身ながらへて今日古さとの山を見る哉
孤兒　愛知　成田いし子
母ならぬ母とも知らず抱かれて安けにねふるみなしごあはれ
冬月　下野　松野舍
我かげのうつるも淋しさ夜ふけて見る人もなき冬の夜の月
●　德島　仁木春子
あいみてはまたそのかみぞしのばるゝひえし血汐も湧く心地して
●　千葉縣　田村滋子
白菊の苗分けやりし友は逝きぬ花は我世と匂ひ匂へと
●　麻布　水野淑子
はしき子をふたりなからにさきたてし其父母よいかになはさん
●　大阪　きく子
木枯の吹き荒ぶ夜を城跡の築地のうへに月さえ殘る

萩　駿河　古山秋子
亡き兄の御墓の邊り日は暮て雨になやめる萩の花ちる
◎　淡路　伊藤紫浪
みだれ咲く小萩の露に筆そめて君がもとへの文をかゝかな
◎　姫路　雩水子
うぶすなの森のいてふは落葉して朱の鳥居に鳩さわげなる
●　群馬縣　吉田きみ子
溫泉の宿のおもひ出おほきおばしまたゆふべ淋しき鹿の聲きく
夕暮　下野　中山久子
憂き事を思ひつらぬる暮に鳴きこそ渡れ雁の一つら
◎　盤城　鈴木紫子

松本穆子筆



うま酒に醉ひてねむりし其夜の夢なつかしき白菊の宿
菊　大阪　志波梅子
みあれるをことほぎがほふ匂ふかな今朝さきそめし庭の白菊
◎　伊賀　木津君子
さなきだに秋は淋しき夕まぐれふる里戀し萩のうわ風
夕暮　防州　岡部佐保
さびしさの思ひにたへぬ夕まぐれ君がかなしき便りをぞよむ
◎　神奈川　西山せい子
旅人のすてしわらじも埋もれておく霜白し里のいたはし
◎　小樽　梶水仙子
木の間もる燈のほ影やり水の上に涼しくうつりける哉
◎　群馬縣　田所きよし

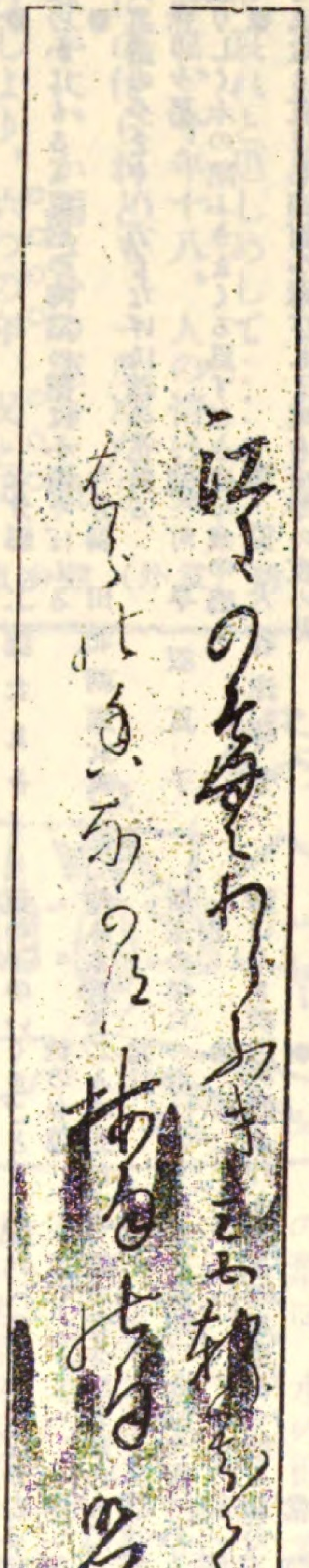
君ねぶる窓の山茶花散りそめて夕べ寂しく小雨そぼ降る
◎　牛込　林あつし
辿れども行けども果はなかりけり思へば長し文のはやしの
菊　長崎　吉田しげ子
つくろはぬ賤が垣根の白菊はひときは淸き姿なりけり
◎　牛込　遠藤義子
病みませる母なぐさめて窓押せば有明の月に雁なき渡る
姉君のみ墓に詣て　酒田　花枝子
絶え〲に虫のこゑする墓原の一本野菊夕風さむき
水鏡　薩摩　伊東幸子
やつれにし姿をうつす里川に振分髮の昔をぞ思ふ
秋雨　常陸　青柳愛子
さらてだに物うき秋のひとり寢に寂しさそふる夜半の雨かな
虫　南千住　江口すみれ
よもすがら友まつ虫の月にすむ聲あはれにもなきあかすなり
里擣衣　湊川　春浦女
ふかくさやうつらの聲は聞絶て里人衣たゝ衣うつなり
◎　神奈川　安藤昌子
弓張の月にほのめくはたすゝきなびくもあはれ忍須の篠原
◎　大分縣　四萩子
何となく君が呼ぶうむ心地しておくつき訪へば蟲の音ほそき
◎　靜岡　入木奐津子
秋風に庭の小萩のさゝゆれて花もこぼれぬ露もこぼれぬ

菊　常陸　秋山欽子
兄君が手植の黃菊一つ咲きぬいざ玉章に添へて送らん
●　羽後　佐藤くめ子
たゞ一人秋の花野をさまよへば友なつかしき鳫かれの聲
●　上野　佐藤露子
山ないてゝ谷にをさまる朝霧の七戸の村を今流れ去る
●　千葉縣　白井よし子
鹿の聲淋しき宿の秋暮れて音さわがしく冬は來に鳬
●　下谷　佐川良子
今更に逝にし君を戀ふるかなありし此世の跡を詫びつつ
●　茨城縣　大部たか子
よにとほき山よりおくの山里は秋よりさきに秋ぞきにける
●　新潟　小林國子
紅はらの露を硯にそとうけて君に送らむ歌をかくかな
●　群馬　千翠子
今日もまたわが待つ人はかへり來て入江の蘆に夕日うするゝ
共樂園に夕涼みして　羽後　喜佐子
夕風に池の蓮のゆらぐ見えて日にすみゆく蟋蟀の聲
●　奈良　久子
山茶花に眼白しばなく小春日和書院の庭に日は斜なり
●　靜岡　上田桂影子
月影の眞白に渡る枯野原旅僧黑う夜寒身に浸む
●　尾州　野菊女史
鐘の音に夢さまれて窓おせば星幽かなり有明の月
●　千葉縣　小川梅江子
男波女波しづかによせて大海原ほがら〱と初日さしのぼる
●　大阪　倭文子
ますらをのかへりむかふる門の邊にいまを盛りと匂ふ白菊
新年　湊南　杉野むら子
大君のみいづかゞやく大空に雲美しう年立にけり
殘菊　越前　みやこ
入千草のうつろふ野邊のむら菊や松にもまけるみさをなりけり
●　江豆　野澤英子
桃の畑桑畑の末に里見えて鷄の聲からうすの音
●　大阪　白菊
我が宿の霜のかきれにのこりけりかほりゆかしききくの一本
●　美濃　芳山
しめはへし賤が伏屋の門松のあたり長閑に鷄の鳴く
●　信濃　神津良子
いさりする小さき舟の數見えて夕日いさよふかれあしのぬま
蟲　兵庫縣　ゆかり
なつかしの君の名よ叫べどいらへなき奥都城處只虫のこゑ
●　北播　紫女
去年の今日別れし友のしのばれて見るもかなしき十六夜の月
●　多可郡　林さかゑ
夕窓に桐の葉落つる音のしてうら若き人の物になやめる
落葉　大隅　山崎八重子
繪筆をたてしばし思ひにしすむかなもろくも落つる桐の一葉に
●　神奈川　佐久間芳子
世をかへば君が妹と生れいてゝ君が情にあはんとぞおもふ
●　能登　池野白百合
小男鹿の谷川渡る大和路や見ゆる山々皆もみじして
●　豐前　秋滿香子
わざ卒へてかへりし宵をそゞろありくふる郷のみち月影匂ふ
秋の田　熊本　緒方千代子
豐かなる年のしるしは秋の田の垂穗の色にあらはれにけり
●　相摸　添田たけ子
只ひとり辿る枯野の日は暮れて身に染む風のそゝろかなりき
述懷　越後　白菊子
行く路はいかにさかしくこゝしきいざや越えてむよしおそくとも
同じ職にある赤十社の友へ　大坂　三宅とみ子
敷妹方へたてぬあつきめぐみもてみとるつとめの美はしきかな

折にふれて　高山　田中信子
夜もすから旅路の君を思ひれのまくらにつらき秋風の音
葛　大坂　越田喜美子
月はさえて千草は匂ふ秋の野にくづの葉のみは何うらむらむ
折にふれて　伊豆　久子
終夜ねられぬまでに懐しき君思ひ居ればかりひくう啼く
●　福岡縣　柴田ほがら
すゝき原子守の歌に野はくれて星かげ淡し産土の森
初夢　京橋　黒ゆり
鏡にのりて春の女神に我が歌を捧さげまつりしよべの初夢
●　秋田　天野きくの

二年を親につかへて兄君よふる里の山戀しからずや
●　上総　丸山愛子
海の音しづかに暮れて夕月の眞砂にゑがく松の一むら
●　徳島縣　山本艮子
木の葉ちるおともさびしき秋の夜にあわれをそふる小夜砧かな
枯野　千葉縣　天美桂花女史
うちまれぐ力もなげに枯尾花一むら残る野邊ぞさびしき
●　上総　小川くに子
富士がれの雪の色なる扇には凉しき風もたゝみこめけり
●　高崎　吉田藤枝
枯尾花かへらぬ秋をまねくだに淋しき野邊を日は暮れんとす

井關馨子筆



霜枯の庭に一本のこりけり薫めでたき白菊のはな
●　秋田縣　ふみ園子
山里は紅葉の奥に小男鹿の聲も聞こえて秋ぞ寂しき
●　豐後　上陸子
初春の光りうら〳〵みなぎりて大君さながらの富士の神山
女郎花　丹後　楓女史
百々千草みだるゝ中に女郎花露おもげなる姿さやしき
●　愛媛　入千草
鐘の音を遠くうすれておの夕べ寂しく小雨そぼふる
●　向嶋　天涯女史
病む友を町のはつれにおとなへは破れし芭蕉のそよぎかなしき
折にふれて　牛込　小島濱子

●　陸中　黒澤美枝子
舞姫の聲によりくる御社の小鹿の群に紅葉しくるゝ
秋雨　千葉縣　小川嶺月子
かきくもりふる秋雨に袖ぬれて猶たちまどふもみぢばのかげ
●　石見　白百合
夕ばえのくしく彩どる雲見ては思ひみだるゝうらぶれの秋
●　備後　つゆ子
ゑのぐ皿洗ひてすてし水の上に影宿しけり待宵の月
●　常陸　酒葉貞子
よろこびの聲天地を動かして駒もいさみて君かへります
寒菊　千葉縣　鎌田壽賀子
塵の世をはなれて清き尼寺の垣根に香る寒菊の花

歡迎會にのぞみてよめる　越後　須藤曾和

あらわしたからのにかりて歸り來しますらさつきに美きたてまつる

●　越後　とし子

こがらしにちぎれ〳〵とぶ夕雲のそれにも似たるものだえある胸

●　三河　榊原しなる

たま琴の妙なるしらべふとやみて遠の砧の音のきこゆる

峰月　福井　白菫女史

人まれて汝もなもしむか月影の更行く峰に猿なくなり

紅葉　信濃　千鳥

散る紅葉惜まぬ人はなきものを何に急ぎて秋は行くらん

亡き母を思ひて　大和　神田なつ子

うつし身に添はぬ秋なり花野なり胸につめたき歌おぼへぬる

●　大分縣　工藤たまき

琴の音のほのかにもるゝ奥庭の海棠の花に小雨そぼふる

●　大分縣　田北朝翠女史

なき母のみ墓詣の夕まぐれ力もなげに萩の花散る

秋の夕暮　麹町　早坂茛子

庭の面に散りしく木の葉ふきまくる風すごき夜を梟の鳴く

●　相摸　大谷津峰子

寂としてこゑなく更けし湖面を淋びしくてらす冬の夜の月

●　兵庫　柳田百合女

溫泉の宿の山茶花の花散る夕べとなりの宿に琵琶の音きこゆ

●　兵庫　雫翠女

美くしき夕日斜に椽に浴びて春霞見もれば野雲雀の鳴く

●　茨城　榊春子女史

五位の君が吹く笛の音の低うもれて月さえわたる嵯峨の秋の夜

●　茨城　藤枝花生子

荒れ庭の草葉の中に色ぞへて咲き亂れたる黄菊白菊

秋夕行路　常陸　酒葉つれ子

入相の鐘の音やみて人去りて紅葉ちりしく村の大寺

●　千葉　田文子

君いますかやいつこと眺むれば雲井はるかに雁なきわたる

●　千葉縣　秋子女史

日にそひて里の小川に紅葉の流るゝ見れば秋くるゝらむ

●　長門　梅田糸子

雲もなく風もなぎたるこの朝此の世の外の心地こそすれ

枯野　大和　河部白菫子

背ゆきて萩刈ゆきて日はくれぬ十里のひろ野只風の聲

●　津市　松尾弔歌女

あさまだき菊の小庭にためらひぬ手折らば露のこぼれやせむと

●　熊本　平岡敏子

行く春の雨なゝめなる夕暮を薔薇の花の音なく崩るゝ

●　紀州　坂本澄江

里の子のいくさごとする聲たへて月はのぼりぬうぶすなの森

秋の夕暮　本郷　秋田吟月女史

佇める若き二人の聲なくて鐘の音さびし秋の夕暮

元旦　香川縣　あやめ子

新玉の年たつ力はしられども長閑けき空そまつあゝがるゝ

●　茨城　里の光子

静けくさ葬送の群の行き過ぎぬ紅葉かつ散る森の下道

●　常陸　石崎歷子

山里の翁のいほりおとなへば梅さくあたり鶯ゝなく

●　京都　鴨遊子

男ましき君の勳は富士の山雲井に長くひゞき渡らむ

折にふれて　越後　千鶴女

うら〳〵となんとはなしに暮らしけん二十餘年たゞ夢の如う

●　大和　橋かほる子

添ぶしの露もうごかず月更けて萩原遠く小狐のゆく

折にふれて　備後　林高子

ひたすらに御國を思ふまごゝろの民の叫びはそらにとゞかん

笛　廣島市　くめ子

數妙のまくらにかよふ笛の音に昔をしのぶふしもこそあれ

文學士 沼波瓊音先生選

抒情文

天

○行く水

福井市寶永上町五十ノ番地 榎並保子

一

君、野邊行く冷たき水に痩せし影流して獨、思ひに耽ける淋しき姿が胸を、たゞ哀れと思しめして……。許しませ君、今年十八、人の情け覺えぬ女には侍らねども、一度冷たき神の、み手に、か弱き身の運命を握られ候ひしより、六つの年、父と母とに逝かれ、世の荒き浪にもまれ、冷たき風にすさばれ候ひしがまゝ、に、情けある人の言葉も、やがては仇せんとての、てだてとのみ思ひ、がみて、許しませ君厚き君が、み情をゆめにも、此の冷き行く水と共に流し捨てんとには候はねど、君と二世を契らんには、あまりに姿が血汐の冷えて候へば、君が愛に報いまつらんには、君がみ情けに對へまつらんには、あまりに姿の胸の、秋の枯野の其れの如く、うちすさびて候へば……。

あはれ君、冷たき行く水に寫し、姿の影の、あゝいかに、淋しく候ふかを、

二

片々、枯れて落ちて蟲に喰はれし木の葉は、水の面に寫し、痩せし姿が影を横ぎりて、さと流れつ、かくて、流るゝ木の葉のあとを追うて、長き思ひは、小さき此の胸に堪へ難くて……。

去にし夏の一夜、涼みがてらに、情厚き溫き君がみ言葉聞きしとき、とはに忘れじと、み情けを此の小さき胸に彫りつけ候ひしが、かくて秋の一夜、君が、母上の姿、呼び給ひて、いと、ねむごろに『我が子とならずや』と、のたまひしとき、たゞ、うれしとこそ泣きくゞれ候ひしが、されど、されど許しませ君、君がみ言葉に從はんには、

海濱の眺（賞外） 熊本市財津まみえ



君が母上の愛娘とならんには、あまりに妾の胸の、すさびて、妾の心の狂ひて候へしかば、すげなうも、み情けに背きつ、戀ふる心は、慕ふ心は、君にも、まさりて切に候を、ひたすら忘れんとあせりつゝ、住みなれし懷しき都を後に、此の田舍に歸りし妾が胸を、たゞあはれと思し召して……。淋しき入日は、榮えなう行く水に、うつろひて、さても淋しく。

三

その後、やさしき、御母上が御文の折々に、君は、此の頃、いとゞ物思ひ給うて、面やせ給ひしとか、承りぬ君、たゞ君をのみ、杖とも柱とも頼み給ふ老いませし人の、日毎、憂へ給ふ君を見給はゞ、其の悲しみ、如何ばかりに候ふらん、君、過ぎにし事は、昨夕見し夢と、あきらめ給ひてよさらば、いざ、妾も行く水に、絕ち難き思ひを捨て流し、昔を忘れ候はん哉、昨日今日吹きわたる冷たき秋の風に、君が、御胸の思ひも吹き拂はせ給ひてよ、さらば、

（評）冷かにして極めて溫かなり、溫くして極めて冷かなり、不自然にして極めて自然なり、妙甚。

地

○老蝶に代りて

神田區千代田町廿一委方　小磯君江

花に醉ひ花に遊び花に眠りて讃美の詩そも幾篇、畵人をして彩筆を投げて恍惚たらしめし妾が此半生あゝ夢と相成候よ、花との戀に此淸高なる姿を煩ひ候ひしはある朧の夜、花に眠りてその甘き蜜に醉ひ候は春暖き日思へば唯淚のほろゝとこぼれ候。

春光九十あはれ夢の如しとや、一風一雨花散りて靑葉若葉の日數經て、秋風はしなくも小萩が原に來て囁けば風物轉たうら悲しく妾が燃ゆる思、そも誰か解き候はん、里の土橋にさびしく咲ける白菊は正に妾か終焉の手向に候や蕭條たる秋の日を浴びて羽風弱くいとはかなげに彷徨へる妾が姿例へば才子佳人が野面に曝す血髑髏半生の榮華の覺めし終り君哀れと思召さずや、妾とても詩にあこがるゝわかうどが靑春の血汐を如何に躍らしめ候よ、妾がうるはしき綾の袖は強く吹ける秋風になぶられて金茶葡萄の濃染はいたう汚れて候、

あゝまたもつれなき秋風の吹きくるよ、妾が舞衣のほころびはつめたくゆらゝぐよ、咲く花はあれども妾が美しき心を慰むべき花にあらず數多かりし友どち今將た何處の果に彷徨ひ候らん。あゝ思へば唯涙の先だつのみにて候よ、

（評）意思深婉、作者の性格のいかに美しきかな思ふ。

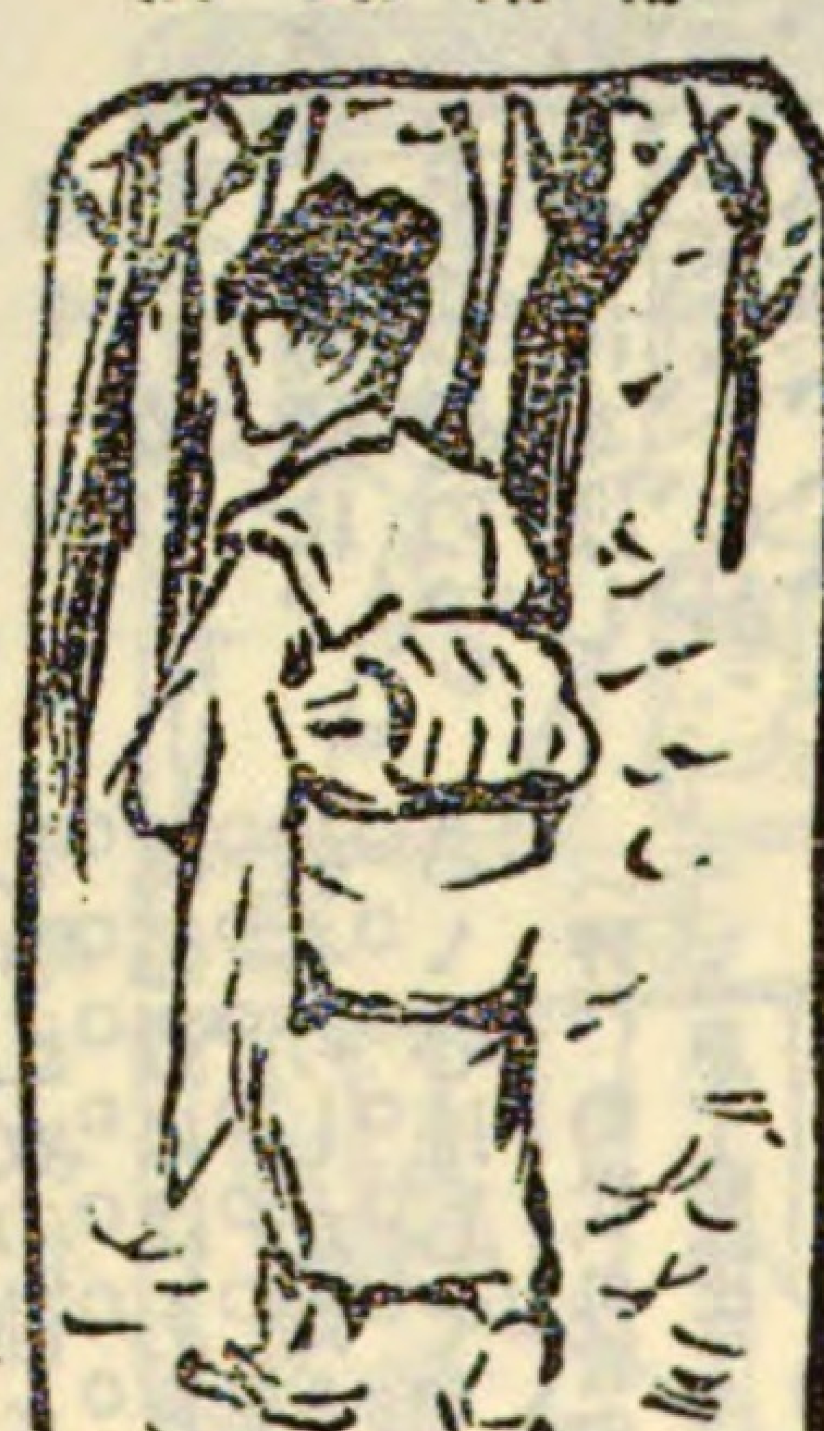
入

〇芙蓉丸

京都上京古川町仁王門下ル東門前町佐野方
竹下すえ子

嗚呼秋の海何たる靜けき事よましてや今宵は波の色も一しほ美しくて、妾は今名譽ある芙蓉丸の甲板上に音も無く冴ゆる月に向つて言ひ知らぬ喜びの胸を抱きては更け行く夜半を暫し安けき夢の界へだに入り得で一人ほゝ笑むのである、才なく智なき賤しき身が榮譽ある召集の命にあづかりしは去歲。春も彌生の末つかた隅田堤の櫻花のはや笑み初むる頃なりし、いてゝは再び歸るまじきに今一度故國の春にも會ひて、と思はぬにても非らざりしましてや家には病みませる夫の君可愛き花子も有るものを笑ひますな世の人よ恥多しとな我れも人の子情と涙はあるものを、嗚呼されど嗚呼されど横濱の港なつかしき神洲を去るの日はあらむ限り情に泣きし妾は血汐の海屍の山をかけ廻り砲煙彈雨の中に敵とも言はず味方とも言はず救ひ慰め助けいたはりて眞白の服の今日かゝる色に成りし二年の間は寸時も我が家を思ひ慕ひて不覺の涙に暮るゝ暇はあらざりしよ、昨日は我が從兄が討たれぬ今日は又共に船出せし若き友が病におそはれて相果てぬとあゝ悲慘、常よりも心弱しと笑はれし妾此の二歲は血もすゝりぬ肉もなめぬたゞこれ熱誠のなさしめしところのみさて平和克復の日は來りぬ滿洲の風はなぎ日本海の浪は靜まりぬ誰れかは喜び祝はざらんやましてや故國萬里の空に銃取る將士、そを助けし赤十字の我等、去年泣きて通りし此の海原を今宵ほゝ笑みて歸る故鄉の地秋の神洲、蒼浪ひたす一小島に生れて自ら大和女郎花の名をほこるとには非ねど思へ今日の妾が幸と名譽を、

落葉（賞外）



常陸石岡町　榊原ゆき子

明日は横濱にも入らむそこにはなつかしき夫と戀しき
我子も待つなる可し、嗚呼此宵喜びに眠り得ぬものは
芙蓉丸の中にしてたゞに妾のみならんやは、

（評）感慨なし、いかに寂々たる月夜なりけむ。

秀逸

○幸なき身

兵庫縣姫路市　かく女

あはれ父君は、海山遠く隔たりたるいぎりすの國に、いますとのみ聞きし計りにて、面影さへも春の夜の、朧氣にも覺えねば、妾は皇國の柞の陰の下露におほしたてられて、乙女となりにしを、さても淺猿しきわが姿や。赭き髮碧の眸、とても、世の人に見られん姿にあらねば、憂き春秋の十あまり八の年月は、閨ふかく身を秘めて潮干に見えぬ沖の石にあらねども、人に知られぬ涙に枕を濕し、化粧の窓の朝夕、黄楊の小櫛に赭き髮搔きあげては、千條に亂るゝ心の緒の、解きがたく紅筆投げすて、長き憂愁に打ち沈みしよ。碧のまなざし怪しう閃めくを眺めて、罪なきます鏡の面を恨み、母君のみ袖に取りすがりて、泣きあかし泣きくらしゝも幾度ぞや。朝は柴かる賤の女に嘲られ、夕牛追ふ牧童に罵られて日々つらき想ひをなしつ。あゝ憂を語らふ人もなく、涙を頒たん友垣もなく、野中に淋しく立てる一本松の頼み少なき我身の、かくて若き希望の光を抱きしまゝ身の春も萎れんとするなるを。されば若草萌ゆる春の野遊、夕日眩ゆき紅葉の山美はしき乙女の袖を連ね群れ行く樣の睦まじきを見ては、誰妬むにはあらねども、つらき憂愁のいよ〳〵ます鏡、打ちけしがたきの炎に胸を焦し、毒塗る征矢に射ぬかるゝ心地して、今更幸なき我が運命に悶ゆるぞかし。

（評）嗚呼「母君のみ袖に取りすがりて」すがる子の思、すがらるゝ母の思、悲慘なる哉。

○うたかた

能登國輪島町　高森一子

お父樣は凝と私の顏を見詰めなすツたまゝ『まア考へて御覽ん、三年四年費して女學校を卒業した所で、斯麼田舍では到底必要が無いじやないか。女は裁縫炊事さへ心得て居れば、學問なんか高等小學で澤山だ、そら此暑中休暇に歸省してゐた女學生を見たてあらう、

わしはあれを見て、此春お前の願うた時に許さないで良い鹽梅だと思うて居るのだ、そりや一部を見て萬を量り難いけれどもだ、わしに言はせるとやはり女は東洋的即ち女大學流に育つ方が良いのだ、物事に優しく面は柳の春風に靡くが如く、心は盤石のそれよりも堅くとか、お、さう／＼之はお前の修身書にも有つたナア、だからもうそんなことはよして、是からは舅姑に仕へるのだと思うて、女の道を修めるのが第一じや』と、優しい中にも、凛とした冒し難い聲音で申されました。父の氣質を知つてゐる私は、何うして三たび四度願はれませう。いや例令お願ひしたつて駄目なんです。て、今は全く／＼望の綱は切れて了つて其行衛を見失うたので御坐います。あゝ

實は此春小學校を卒業した時もお願ひ申したのですが遂に、聽入れて下さらなかつたのです。併し學術の花の香に醉うて、たゞ／＼理想の影にのみ憧れてゐた私は、どうして父の言葉に優しく滿足する事が出來ませう。其上雜誌なんかを見ると女學生日記だの、寄宿舎生活などゝ云ふ文章が私の心を煽ぎ立るので、益々胸の希望は燃え立つ斗りで、何うしても押へる事が出來なかッたので有ます。それて、今一度折が有つたならば御願ひして見やう。彼の清子さんも初めの内は父君が許して下さらなかつたのが、幾度となく御願ひなすッたので、今ではあの樣に金澤の女學校に行つて被居るんだもの、私だッて再三お願すれば糸子じやなし、乾度可愛想だと思うて許して下さるであらう、今年は兎も角來年と云ふ年もあるから。と、そこに儚い一縷の望を抱きまして、密かに數學などを忘れぬ爲に繰返して居ましたのに、あゝ今となつては。樂しい想ひを描いては人知れず微笑んだことも有りましたのに。あゝ

（評）一讀、泣かむとす。

がいせん（賞外）



陸中一關町　阿部とみ子

○その瞬間

神戸市稅關官舍六號　勝田かつ子

我はからくも岩に抱きつき、波にもまれ／＼て恰も綿の如くに、勞かれ果てたるからだを力なくふり返り見

れば、今が今まで我等同胞の乗り込み居たりし、汽船達運丸は跡かたなう浪間に沈み終りぬ。怒濤の音と共に入り亂れて聞え居たりし、悲慘極まる泣き叫びの聲も、早やわが耳には聞えずなりぬ。あはれ大方は浪に溺れて惜しき命を落しゝならむ。可愛ゆき妻子を持てる人も、絶大の希望をいだける人も、綿々としてつきぬ恨を跡に殘して。さるを奇しくも我れ一人は、浪にもまれながら沈みもせで、夢ともなくうつゝともなしに、岩の上に打ちあげられぬ。されど見れば此岩とて僅か暗礁の上部、五六尺水面に現はれし部なれば、元より我が生命を救ふべき安全の場所にはあらず。寒さと饑とに生きたる心地なき身の、再び洋中に押し流されて、同じ境遇にうせたる人々の跡追ひて、海の藻屑と消え去るなるべし。物凄き怒濤は山の如くに押し寄せ來り、碎けよと許り岩に打ちかけ、打ちかけてはさつとほとばしるすさまじさ、最早や死すべく覺悟定めしわが身にも、思はず身振ひするを禁じ得ざりき。あゝ恨なり。我を便りに待ち給ふ年老いし一人の母君と、妹とを故里に殘してけふこゝに、長へさめぬ眠をむさぼるかと思へば、萬感胸に相往來して、たら〳〵と熱き涙のわれ知らず、冷たき石の如き頰をつたひ流るゝを覺えたりき。浪は早や我が肩を浸せり。わが最後も數分の後に迫りき。われは心靜かに神に末期の祈を捧げんとて、なよなよと弱り果てし手もて、空に十字形をゑがきぬ。弦月は早や彼方の水平線に沈まんとして、光はうす青くこの慘憺たる光景をてらせり。

（評）宛然西人の作

○待つ身

山口縣豐浦郡豐西中村安岡　村田節子

灣頭の殘月は三度ゆきぬ、されど父は歸り給はず。淺碧の空に雲なく、乾ける砂を踏んで、漁船に棹さし、船歌と共に遠く漕ぎ出給ひしが永き別とは神ならぬ身の知らざりき、最後の歌聲は尙耳にあれど、父の姿は遂に見る能はず。

一碧の海は悠々として、處々練れるが如く白う光りし、小春日の其夜、秋陰晤として墨色に渦まける雲、忽ち天空より落し來り、一陣の風東方より起るよと見ろ間に、雲は雲と相追うて、波濤哮り、逆卷く波は雪と粹けて、滔々の音は天地をゆるがせり。

いはずもがな、我は狂はんとして、渺々たる洋上を見渡せど、一帆の影だに認め得ず、只白泡渦いて海村戸

を鎖し、たえ〳〵に聞ゆるものは、「難船救ヶ船を出せー」の聲、我心を驚かすのみ。

曉雲東より西に奔れる頃ほひ、風をさまりて波は無心に磯馴松の根方を洗へり、あゝされど父の歌聲は響かざりき。斯て風冷かに星を散らせる秋の夜、水悠々たる折もありけり、月白うして物の遮ざるなく、晝よりも静かに島影をのせ、睡鷗の夢を浮かべて、幾度か新月なりの濱邊に、波穏なる夜もありけり、あゝされど、父の櫓聲は音もせざりき。

つきいでし波止場に、最後の歌をきゝしより、月は三度移りぬ、其間夜毎日毎砂の上に佇みて、水天髣髴の間を望めども、父のとまがふべき船影はあらざりき。今宵しも又かの歌聲を思ひ出でゝ、うたゝねの夢も結び難きまゝに、十日の月を踏んで、濱邊をさ迷へば、銀河一道白く微々として、海より海に流れいず、月愈冴えて玄海の水あるゝのみ、十間以前にきゝし、舟歌の主は今いづこ、生か死か、死か生か、ふり仰げば月はしばし雲に隱れつ、岩を掤ひて遠く〳〵〳〵目を放ちたれど、遂に〳〵待てる甲斐もなく、姿はしも見えざりき、聲はしも聞えざりき。

月は松が枝に落ちて、涙は新に泉と湧き、滴々として掩へる指を洩りぬ、あゝ側を顧れど父はいまさゞりき。

（評）悲哉の氣溢る。

○鐘の音

長門豐浦郡生 野村桐山方 梅田糸子

夜半のねざめに鐘の音ひゞきぬ、思へは我妙見寺の麓にさすらへる身ぞ、ゆかしの鐘の音や。

秋深うして萬山黄ばみ落つ、枕をそばたつれば野に悲しき聲す、あなあはれ鐘の音、歎きの胸に物思へとや、怪しきかな、物思ふとしもあらなくに、いつしか頬に涙流れぬ。

間どほなる鐘の音はその初めの響きを終りぬ、われは枕によりて消ゆる響きの行方も知らず思ひ入りぬ。

第二の鐘聲起りぬ、夜はいよ〳〵しめやかにして、響はいよ〳〵冴えたり、山をかすめ海をわたり、一度は高く一度は低く、絶えむとしてはまた續き沈まんとしては亦浮ぶ、あゝ天地の律呂痛める所あるが如し。思ひに堪へで我は窓おし明けて磯近く歩みぬ、十日あまりの月さやけかりし夜半なりき、澤江の入江霧立ちこめ青海島の山々幽かに薄墨にて繪かけるが如し、幽靜なる眺めかなと我は磯松の根に腰打かけて、來し方遠く思ひやりぬ。

思へばつたなかりし身の運命よ。如何なる禍神の手に弄ばれしか、八歳の時母を失ひ歎きの涙乾くまもなく、兄に別れ父に後れ悲慘の涙にむせびしを、こゝ澤江の叔母に育てられてやう／＼人となりぬ、かゝれば人並に物學ぶこともせで、辛き浮世を渡りつゝ、妙見寺の鐘を聞くこと已に六年、この松原に泣き明しあきらけき月に恨めしき夢のふし多かりき、其も今は見ぬ夢とあきらめん、されどつきせぬは父母戀しの涙なり。夜はいたく更けて、山も水も寂寞として地に眠り星も月も寂寞として、天にかゝりぬ。寂しき眺めかな、願くは月よ傾かざれ星よ沈まざれ、我が追想の涙に飽くまでは。

（評）意到り辭隨ふ、但し女子が夜半叔母の家を拔け出てゝ月下に徜徉するの不自然を惜む。

○土佐日記を讀む

越後　みや子

いとゞ降りしきる雨に、まだ宵ながら道行く人も稀なり、衣ぬふ手さへたゆげにて、兎角思ひめぐらせば、心までいよ／＼沈みゆくまゝに、あはれ何にまれ、心慰むる物もがな、好める文讀むこそよけれど、文机に向ひ、紀氏の土佐の守より任果てゝ、都へかへり給ふ時、書きつけられし日記をひもとく、此頃は唐文のみ多く用ひられ、倭文は女ならでは、書く人も稀なりければ、わざと身を女になして、書き給ひしとかや、誠に辭づかひやさしく、且船路なれど、馬の餞すといひ、眼もこそ二つあれたゞ一つなる鏡を奉るなど、をりをりをかしき言を交へて興を深くし、人の上はた所のさまにより、愛たき歌も數しらず、まして阿陪仲麿ぬしの、唐土にてよみ給ひし三笠山の歌は、幼き時より聞き居れど、今宵此書によりて始めて委しく知るを得たり、宇多の松原に鶴の飛びかふ樣、渚の院に昔を偲び、あるは雲の上も海の底も同じやうなる曉月夜掉しゆく船、かゝる折には、いかにもして、その船に御供せまほしかりけれど、いかにせん、一月十五日小豆かゆ煮るは、昔も今も變らぬためしと思へば、何となくたふとくぞ思はるゝ、荒き波路に海賊追ひ來と聞きたらば、いかに恐ろしかりけん、されど國民の幸を計りしぬしなれば神もあはれみ給ひしならん、土佐より都まで今は一日にゆきつくべきを、五十日餘も費し、そのかみを思ふにも開けし御代ぞうれしき、船に乗り給ひし日より、着き給ふ日までも、常に歎き悲しませらるゝは、彼國にて失せにし女子の事なり、人の親の子を思ふ心

は皆かゝるにや、いざよふ月に誘はれて、東へ下り給ひし人も、我子の書のみを思ひ、しばしも忘れ給はざりき、子を思ふ道にとはかゝる折にやよみけむ、あはれかくまで親は我子を思ふものか、まして母なる人にいたりては。

かゝる事ども思ひつゝくれば、亡き垂乳根の事まで偲れて、いつしか袖はあつき露にうるほひぬ、我母は妾を生みてより程なく、みまかり給ひしとかや、されば御顔さへ覺えず、ましてあたゝかき情は、元より知るよしなけれど、時につけ戀しく、子をこふる思に勝るてふ歌も、我には親こふるとこそせまほしけれ、あゝ戀しき母、なつかしき母よ、せめては一人なりともはらからを殘し給はゞ、いかに嬉しかるべきを、一人殘りし妾の悲しさ、手枕の夢になりとも一度御顔拜せまほしき等、心はいたく亂れたる折、何所よりかやさしき御聲以て、我名を呼び給ふに、驚き且は喜びて、見かへれば、こはいつくしみ深き今の母君の、夜更たり、寢よと仰せらるゝなりけり、あな思はぬ永起しけるよと、燈細うして、臥床に入り、いつしか船路ならぬ夢路を辿りぬ。

（評）土佐日記を讀むといふ陳腐なる題目を捕へながら亡母を慕ふ思を述べて話かしたるが嬉し。結果の一句題目を離れずして面白し。

雲の月（賞外）　備後尾道　大本孝子



○新　墓

津市西新町三九、　松尾花子

入日のあとの美くしい夕榮の空を仰いで草花の咲き滿ちた田舍道を白菊を手にして辿る私は軈て瑞光寺の崩れ懸つた山門を潜つて手を清め列び立てる墓石を縫うて左に着き當つた處松尾綾子と墨痕鮮かに立つた一基の新墓に辿り着いた。これぞ愛しい妹綾子の立姿ではないか。香も優床しい白菊の花束を手向けて、合唱數刻ふと首を上げると纔と計りに墓石に搦む線香の烟の中にやつれた綾子の立姿。「あッ綾ちやんッ」叫んですがらうとして、はッと氣付くと其優姿はあらで白烟縷々として徒になびく計り、と眼には涙が湧いて悲しい思ひは又もや泉の樣に湧くのである。

思へば丁度七日前の夕まぐれ、空には冷かな雲が流れて秋風肌寒い時であつた、一座しんみりと打沈むで、御両親を初め私も妹の枕邊につき添うて早や其終焉も近づいた、やつれた寐顔に見恍れて居ると、不意に綾子は目を開ひて何か云はうとするので、口を濕してやると、細い手で私の右手を握りメめ頭上の白菊の瓶を指さし乍ら息も切れ〳〵に、
「姉さん私もう死ぬのよ、そしたら此花を立てゝ下さいな」
「綾ちやんそんな事云はない者よ、しつかりなさいな」
一同が慰めて居る間に、醫師の嘆聲と共に、あゝ綾子は遂に眠るが如く逝つたのであつた。一人の妹を失うた私かくして白菊の花を手向けるのが、せめてもの樂しみなのである。
默想から覺めると、冷かな墓石を廻る烟も細う手向けの白菊風になびいて早や露を宿して居る。いざと計りに立上つて涙の目に眺めやると美くしい夕空も藍色に溶けて淋しさうに星が二つ三つ見めいて鐘樓より打出す晩鐘は悲しい音を告げてやがて夢の樣に消えて行つた。

（評）暮色碑を包まむとす痛恨堪ふべからず。

○にこつ記

麴町區三番町五拾番地　赤城壽美江

吾等少女の身に取りては雜誌に己の文の載りし時程喜しきはなかるべし。數ふれば早や六月程以前、妾の文も某誌上に載りし事ありしが、その時の事ども思ひ廻らせば常に何となく可笑しさ湧き來て堪へがたし。
その雜誌の名は言ふまじけれど一日發行のものなりしが、妾は得堪へで三十日の夜雨を犯して明々堂と呼べる書店に行きて問へば、出でぬと言ふに早や胸轟ろきて怪しう打ち震ふ手もて受取りつ。開きてや見んとも思ひたりしが家に歸りて心安かに見るに如かじと家に歸りぬ。讀みさしの雜誌亂れ居し机に凭れ、小暗き洋燈の心かき立てゝ打ち騷ぐ胸抑し靜めて妾はくりぬ。さても如何や、幾度か捨て幾度か改めて作りあげし妾の文果して出てしや、もし出てしならんには吾心如何に樂しかるべき、されど若し出でざれば……思はず繰りかけし書打ち閉して思に沈みぬ。あけよ早や開けよ頭の中にて何者か叫べり。否開き給ふなと他が叫べり。開け給へ、否開け給ふな、妾は如何はせんかと躊躇へば兩人は益聲高に罵り騷ぎて吾心はよもぎのそれ

よりも亂れに亂れつ。されど妾は斯くて本を閉しおくに得堪へて、又も打震ふ手もて開き始めぬ。めくる紙の音のみ高く胸に響きて、その音毎に胸は早鐘の如くなり來ぬ。最後の一枚殊更に高くひゞけり。と見れば、おゝ妾が眼はふらふらとせり、吾名！吾名!!!文林の字の下、甲賞と記せる所に妾が名妾が文、夥しく圏點さへ附せられて……されど妾は若しや間違ひにはと再び眼を注ぎぬ、されど吾名はやはり吾名なりき。あゝそのをりの吾胸!!!如何なる文豪如何なる詩びとなりともなどと言ひ表はし得べきか、只々怪しう打ち躍りしと言はんのみ。斯くて何處にか鯨波の聲の上りし如く覺えし妾は思はず雜誌を取りて固く握りぬ。

何人にても妾が本箱に秘めある書を一つ一つ見行き給はゞ、必ずや二つに折りし跡深らきざまれし一雜誌を見出し給ふべし。妾が雨靜けき夕、風打たえし朝の獨り笑みの秘密はそれにてこそあれ。

（評）恕軒先生も、新聞に己が詩文の出たるを見て、亦快ならずやと言はれたり。

秋晴（外賞）　松江市外中原　寺澤みつ子



○ふる郷

周防　楓子

いざゝらばわが故郷!!!

我はいま見返り松の根方に立ちて幼時の十歳とせ親みし、はたちとせの旅寢の夢にも片時去り能はざりつるなつかしのふる郷に、ふたゝび相見じと心に誓つて、永刧の別れを告げなむとす。

あゝ濁りに濁りし世の水の、いかなればとてこの清淨なりしわがふる郷をまで汚さむとは思はざりつるものを。七とせ世の風波と戰ひ疲れて、瘦せし躰軀に「失敗」の二字を擔ひつゝこの松が根に立ちたる時よ、錦を飾らずば死すとも踏まじと誓つて知己朋友に送られ未來の成功を夢みつゝ別れたりしも此所なりしよと思ひては、かへり見るわが破れし衣の恥かしからざるにはあらざりしかど、汝が清淨なる潔白なる心には、必ずや、わが零落をとがめずして、罪なかりし幼時の村童として迎ふるならむと思ひては刹那に迫るその溫かきふところのなつかしさに、恥を忍んで歸りしに、思ひきや、その姿こそ昔に變られ、山の綠、小川の水、そはわが幼時のふる郷の如く純潔なるものにはあらざりき、純朴にして、勤勉なりしわが里人はいつしか輕薄の氣に染み、怠惰に流れて昔の俤は止めず。なつかしき幼時の友に逢ひて昔を語らむとすれど冷やかに嘲りてかへりみもせず、あゝ、ふるさとのことゞゝは我を忘れたるか、否、忘れしにあらざるも見ざる振りして過ぐるにはあらずや、あゝわが腦裡を朝夕去りやらで七とせの春秋、冷き世の風に泣きつゝもせめての慰藉となしたりし故郷のそは過去のものなりし。見よわが幼時、里人が勤勉より生み出されける、金風ゆたかに打靡きたりし垂穗は夢か、酒色と怠惰にな

れたるわが里の田畑は荒に荒れたるにあらずや、かくして純潔にして温和なりしわがふる郷はいつしか冷やかに濁り行きつ、あはれかゝるふる郷に何等の慰藉をか求めむ、むしろ終生去り能はざる悲しき怨みを抱いて、孤影さびしくふたゝび故郷を去つて我は塵の世の子たらむとす。いざさらばうらぶれてわれ何所の里に泣きくらす事あらむとも永劫にこの地を踏まざるべく、よし錦衣を飾る事あらむともふたゝび汝と見ゆるの時なかるべし。

さらばよわが故郷、

今ぞ最後と見返れば流石に熱き涙の禁め難きよあゝかの山、かの河、森よ里よと見返れども、故郷とは遂に情なき涙なきの地なるか、平然としてかよわきうらぶれの子が永別の涙も知らざるがごと……。

◎わかれ

防州　岡部佐保

靜かに暮れ行く黄昏の空に、紅う染められたる夕雲のちぎれ、ゆるく南に流れて、淋しく鳴き行く寒鳥の二羽、三羽、折からなり渡る鐘の音に幽かに消えつ、後は菊部川の水紫に、蘆と葦の葉末に渡る秋の風寒く、羅の如き夕霧は靜かに川面に棚引きぬ。行く人もなき往還の松の並木に、早暮色蒼然として、暗のとばりは今や天地を蔽はんとぞする。

おゝ鈴蟲のなくよ!!。

あゝ彼の鎮守の森、黄金の如き大銀杏、げになつかしの處ならずや。春は薔の花の上に、夏は涼しき夕月の下に、秋は鈴蟲の萩園に、冬は美しき銀の原、妾が歌ひし自然の詩の、如何に樂しかりしぞや、垣根の小川に小さき笹舟を浮べ、庭の泉水に金魚呼ぶ時、與そへし優しの妹、無邪氣の弟、げにやエデンの遊里、エンゼルの戯れ!、妾は獨り登仙の思ありしを、あはれやそれ、果なき曉の夢!!。

ゆら／＼と糸もて釣るが如き十六夜の月は、今しも尾花の末をはなれて、入江に上る舟の帆白く、亂れ飛ぶかもめのつばさいと美しう、妾が故里は今し夜の戸張にぞ包まるゝ。

げに燃ゆるが如き希望を抱きて、黄塵の都をさけ、此處、山の姿美しく湖の景色清き里に、一夜假寢の夢を結びてより、朝は沼の蓮の花、夕は岡のちる紅葉に、携へ來し一管の笛を操ひて、思ひのまゝなる塵外の遊びに、過ぎ行く月日も打ち忘れしを、げにや、此處も浮世の、秋風ならぬ人情のすさびに、あはれか弱き妾が胸のいかに堪ゆべきぞや。

あゝさらば行くよ、妹よ弟よ、夢な恨みそ。

颯と吹き下ろす山風に、思はず佇めば、星一つ西に流れぬ。そゞろに寒き風の聲かな、秋の夜は更けゆきぬ。さても靜けよ村よ、平和なる里よ、さらば別れむ、相見む時はよしなくとも、妾は永久に忘れはせじ、崇高き山!!惠み深き川!!、いざさらば今を限りぞ。妾が爲めに悶ゆる人よ、願はくば彼の美しき星を眺め玉へ、そこに崇高なる囁きはあり、そこに神の默示はあり、うつしゑは何暖く妾が懷に眠れりさらば君よ。

ふと頭を回らせば、霜天星の瞬きしげく、川瀬の蛇籠に泡白くして、砧の音遠近に聞こゆ。

あゝ亂れみだれし心の緒琴!!、さても悲しき別れにぞあるかな。

◎覺え帳

名古屋　玉置かう子

◎世にあさましきもの、かず／＼あるがなかに、唯暫時あづまの都へのぼり居ける人の、覺束なき彼の地のもの言ひざましたる、心の奥も見えすくべう覺えて、いと胸わろし。

◎さはれ、くだりゆく世のさまこそ、なほあさましけれ、野邊のおくりにおのれは行かで、近きあたりの知れる人などに、名札のみたのみて言傳てやりつる、いくたびも見たり、かゝるとしても胸の安きにやといとかなし。

◎さる人の言はれけるに、今の世の紳士貴女ともいふものは、うつくしき鞋、芳ばしき香水、絹の帽子、美麗なる髮飾、羽織や、官、職、等持てる人なりとありしが、げにさるべうもや、思へば末の世の字書こそ、あやしきものなるべけれ。

◎赤きものは、雪深き庭の南天の實、瀬近き岩山かげの丹躑躅、などうれしくもなつかし。

◎さきに同じ窓に遊びにし伊藤清子の君逝きたまひてより、今又花野露

子の君そのあとなしもおひて急ぎたまひぬ。うたて世のあらむかぎり、いく千たび、人の命のはかなきをかこちて、われ亦人にかこたれん身の行末こそ覺束なけれ、さるをまた、茲に義兄君の訃に接せんとは、いよ〳〵あらき運命の神の力ぞおそろしき、紫水ぬしは兄がしたしかりし友垣とて、さいつ頃弔ひ文を給ひぬ、われそを讀みて、あつきまことの涙とゞめもあへず、たゝみにひれふして、さゞと泣き侍りぬ。

○耕女　　但馬　小四　八百子

四方は朝もやに包まれて田舍の朝の靜かさ日はまだ出ないし何處だか薄ら寒い樣な日てある衣服をはしをつて手甲脚絆をつけて出た折あしく今日は爺やは居ないし淋しくて鎌を手にして居てもそれからそれといろ〳〵な事を思ひ出して氣が妙にしづんてしまふ氣を取直してみるがまた思出す。しまひには手を休め鎌によりかゝつて昔しの事を考へる。丁度去年の此頃は秋季遠足て親しい友とあの廣々とした海をながめながら磯馴松の蔭て外の生徒のかへるも知らず遊て遊び狂てゐたそれから淸い月の下て種々な話しをしつゝ好きな箱根山から寄宿舍の古つるべなどの歌をうたつてかへつたのも早や一年の昔となつたあの頃の事思ふと夢の樣てあるあのこひしい八重子さんは東京へ行てしまひなさつたし同じ級てあつた友だちは皆都に行て學の道にいそしんてゐられるのに、なんてわたし一人此淋しい田舍何もならはず明ても暮てもはかない野良仕事ばつかり、八重子さんは早や三年になんなさつたのに。何てわたしは學問が出來ないてあらう、こんないやな百姓なんかしてつまらない。あゝ友達の身の上が羨ましい、手にはこひしい八重子さんのうつしゑ、愛らしい笑顔、何だか云たげな、來いとでも云なさりさうな、今までの思は消えて笑顔に成て一心に見込て居ると頭の上て烏が一こゑ何だか笑ふ樣にないた。憎らしいと思て顔を上ると日は今し山の端をはなれて何彼のきらひなく照て居る何とも言ひ得ぬ好い心地に成つた、あゝ何て此淸い平和な田舍がいやで汚た塵の都がこひしいて有うと不思議な程て有る。

足跡（賞外）　茨城縣下妻町　外山しん子



爐邊にて　　横濱　埋れ木

れ、京子さん、あなたの理想當てゝ見ませうか、田園生活てせう……あら笑て被入るよく知つて居りますよ……私の理想ですか、さうれ別に是といふ事もありませんが唯此の世の中を淸く過して行きたいと望むて居りますよ、私花子さんの樣に舞踏會や音樂會などの樣な男の方の大勢いらつしやる所へ行くの大嫌ひてすの。男の方……殊に若い方は何てすか怖いのよ。よく外の方は男子と交際なさる事を大變面白いやうに云ておいでゞすが、私好みませんの。てすから男子の朋友などひとりもありません。あなたの樣な優しい私を愛して下さる親友があればそれてもう〳〵充分てすもの。眞實に仲よく致しませうれ、長く〳〵死ぬまても……あなたの其愛の泉を湛て被入る樣な眼や、女神の樣なみ聲が何時も私と共にあつて、悲しい時や、淋しい時に、私の心に慰みを與へて下ある事を、實に切望致しますよ。ほんとうに私は幸福てす。あなたの樣な友をもつて。

私の理想の家……それは靜かな靜かな里……此屏風の繪のやうな所……小川のほとりに建てゝ庭には花を澤山植ゑて置きますの。虫も宿るやうに、風も薫るやうに、あゝ其時……行水に月影浴くる夕、おく露繁き花の朝、是非尋ねて下さいれ、そして共に手をとつて、氣高い〳〵光りのもとに、淸い〳〵薫りのあたりに靈き誠の祈りを神に捧げ樣ではありませんかオヤお話しに計り氣を取られて、火が消えたのを知りませんでした。ては又明日學校で樂しく勉强致しませう。

巖谷小波先生選



特別第一賞

海老谷川のほとり　もと子

春の川浪華に入りて分れけり

（評）春水の洋々たる浪華に入りて幾多の枝流を分つ春の川の趣充分に見えたり

特別第二賞

多可郡中村ノ内鍛冶屋村　林さかえ

明月や鹿あらはるゝ岩の鼻

（評）月、鹿、岩鼻、必しも景の新しきに非ず只中七に夏夜の詩趣湧くが如し

特別第三賞

伊勢津市西裏福満寺内　岡本いは子

木をかへて猿のもの喰ふ時雨哉

（評）着想奇、句作巧、山路に時雨の景、髣髴として其境にあるが如し

天

陸中一関高等小學校　黒澤美枝子

早打ちのかごにたばしる霰哉

（評）早打に霰取り合せ得て再び動かし難し

地

岐阜縣本巣郡穗積村　廣瀬わた

土蜘蛛の窟に迫る夜霧哉

（評）此霧夜にして、即此穴凡ならず

人

羽後　花枝女史

電燈に夜の蝶飛ふ柳かな

（評）何人の眼にも入る所にして、而も容易に句となしがたきもの

秀逸

訪ひよれば藁うつ土間の小春哉　越後　藤原素子
寂として山茶花散るや寺の朝　兵庫　柳田のぶ子
織姫の従者歸るなり流星　千葉　森静緒
裁物の上に小春の小猫かな　下總　川奈部よし
大雪や京も靜かに日の暮るゝ　加賀　佐伊田芳枝
酒賣らぬ田舎の驛の寒さかな　廣島　岩本松葉
髪結ふたばかりや冬の小半日　神戸　水越輝子
律院の夜の雨きく落葉かな　長門　梅田染子
秋淋し門田に映つる夕案山子　下野　湖春女史

行く秋や河瀨にうつるはだか馬　上毛　田所きよし

朝の月大極殿の氷柱かな　上總　夢弦女

野菊咲く墓の徑やものの糞　四谷　佐藤つきす

賤が家の檐に咲いたる黄菊哉　石岡　栗原きよ

竹取の翁渉りぬ秋の水　信濃　千鳥

元日や盥にうつる富士の影　千葉　小川とり子

刀痕や老將軍の冬籠　茨城　外山よれ子

話しにも襟かき合す夜寒哉　神田　白鴿女史

町人の連歌もすなる松の内　奈良　花野松子

柳ちる下や易者の古机　神奈川　みゑ子

虫鳴くや名ばかり殘る城の跡　神奈川　中村三重子

菊の間の金屏に灯ゆらきけり　伊豫　幽月女史

神杉のそれからそれへ蔦紅葉　大和　峰畑節

古路や柳に暮るゝ馬一つ　小樽　北田すて女

柿の木にしぐれて殘る梯子かな　千葉　鵜岡きぬ枝

西行の笠傾けて水鷄かな　岐阜　赤塚みれ子

清水の舞臺に雨の燕かな　岐阜　赤塚蝶子

星月夜蒙古に近き宿りかな　岐阜　福井ひろ子

五風十雨水落す日となりにけり　越後　藤原正子

蛸壺の中からも立千鳥かな　讃岐　あやめ女史

打なりて何かにしたき氷柱哉　神戸　むらさき女史

綱つくる厨に稻の葉風かな　松江　佐々がに姫

土橋落ちて秋風川を亂しけり　越後　藤原豐子

岩を嚙む男波女波や磯千鳥　越後　藤原法子

米粒に倂た蕾く春日かな　岐阜　高井こまつ

正成の帷幄に散るや山櫻　岐阜　坂口きぬ子

羅綵干す小舟の苫や小春凪　岩代　田中むらさき

物寒う月照る野邊の芒かな　茨城　秋山きみ子

西行の馬上に眠る小春哉　越後　春江

稻刈りて案山子は弓を收めけり　伊賀　木津君子

垣添ひにおもと並ぶる小春哉　大阪　燕子

空灶も時雨聞く夜の茶哉　千葉　田村たき子

小春日の小椽に猫の晝寢かな　秋田　大越玲子

冬枯や蔦の卷きつく一里塚　福岡　山崎蝶子

襟に挿す歡迎會の紅葉かな　京都　安田はつ子

時雨るゝや一本高き大榎　津市　中村とも子

朝寒や生木燻らす渡守　磐城　會田富智子

小式部の繪を友にして冬籠　能登　繁子女史

秋深うなりぬ水色山の色　相模　添田たけ子

來る鳥は無けれど嬉し歸花　東京　添田ふち子

落鮎や有明寒き月の照り　下野　湖春女史

月もはや三更過ぎて木兎の聲　栃木　市川きよ子

罕の柿周の天下に熟しけり　岐阜　坂口ますよ

鹽濱の松皆枯れて啼く千鳥　越後　藤原梅子

磯千鳥白砂青松けぶりけり　越後　藤原里子

武藏野は薄ばかりぞ晝の月　三河　澤田つま子

清女にやあらぬか雪の宴に侍す　栃木　鈴木菊江

旅僧の笠登寒ふ蜻蛉とぶ　石見　森脇仙子

笠につく椎の落葉や初時雨　近江　牧場峯子

横に降る霰の中の鳥かな　名古屋　鈴木まさ子

雛鷄の蚯蚓爭ふ小春かな　秋田　伊藤菁子

小春日のテニスマッチや紅き頰　駿河　あき子

濱寺の庭風呂さめて千鳥なく　越後　藤原光子

元朝の晴衣つめたく重ねけり　京橋　里ゆり

はつ冬や山をはなれし雪の雲　富山　諏訪芳子

利根川を上る白帆や晝の月　上毛　すみれ女史

艦橋をするする登る初日哉　神戸　德永みれ女

臥しなれぬ枕冷たし犬の聲　備後　艶子

牛ひきて野菊かざせる童かな　姫路　三木喜代子

水櫻の曉寒し鴨の聲　播磨　西村むら子

文學士　沼波瓊音先生選

消息文

特別第三賞

○故郷の友へ

上毛　好月子

千草八千草枯れはてゝ草間にすだく虫の音さへ日々にほそり行きていと物淋しさを覺え候をまして乳の香うせぬ年頃を知らぬ他人に雇はるゝ身の一人旅へがたく候夜の御用終りて門とざゝんとかたへの郵便箱かきさぐり候しに一封の玉章月あかりにすかし見て先づ御なつかしさに涙ぐまれ申して候かく仰せられ候ひては今更に御わび申上やうも之なく候へ共妾は御別れ申候ひてより世の荒波にゆられゆられてから人心を味ひてより世の中は皆かゝるもの水の面清さは底濁るもの薔薇の花美くしきは針含むものとのみ思ひつゝよしなき人に義理一遍の御つきあひは致したくもなしとすねすねて今まで一度の御たよりもきこえあげず候ひしを御怒りもなく絶えて久しき御便に接し御やさしき言葉の數々只々うれし涙にむせばれ候おちぶれて袖に涙のかゝる時人の心の奥ぞ知らるゝ今の身となりては更に更に思ひ當りて候かへらぬ愚痴とは知りながら父まさば母だに世にまさばかゝる悲しさは夢にも知らでなつかしき故里に花をめで月を賞しつゝ諸共に語りあかさんにとそゞろありし昔の春のこひしうなりまさり候せめて折々御文など賜はり昔にかはらぬ御言葉のみ御願ひ申上候夜や更けけん廣き御屋敷のいとゞしづまりて朋輩の鼾のみぞ高うきこえ候なつかしき花子様いざさらば

（評）側々人を動かす。想像に非ずして必ず實況なるべし。世を冷酷と疎み果てたる時、昔ながらの親友の書に接して泣く、感慨無量。月下の郵便箱、朋輩の鼾、等不幸なる境遇寫出されて餘蘊なし。

（字を正しく書くやう注意ありたし）

天

○戰地なる兄上より愛馬の死をしらされたるに

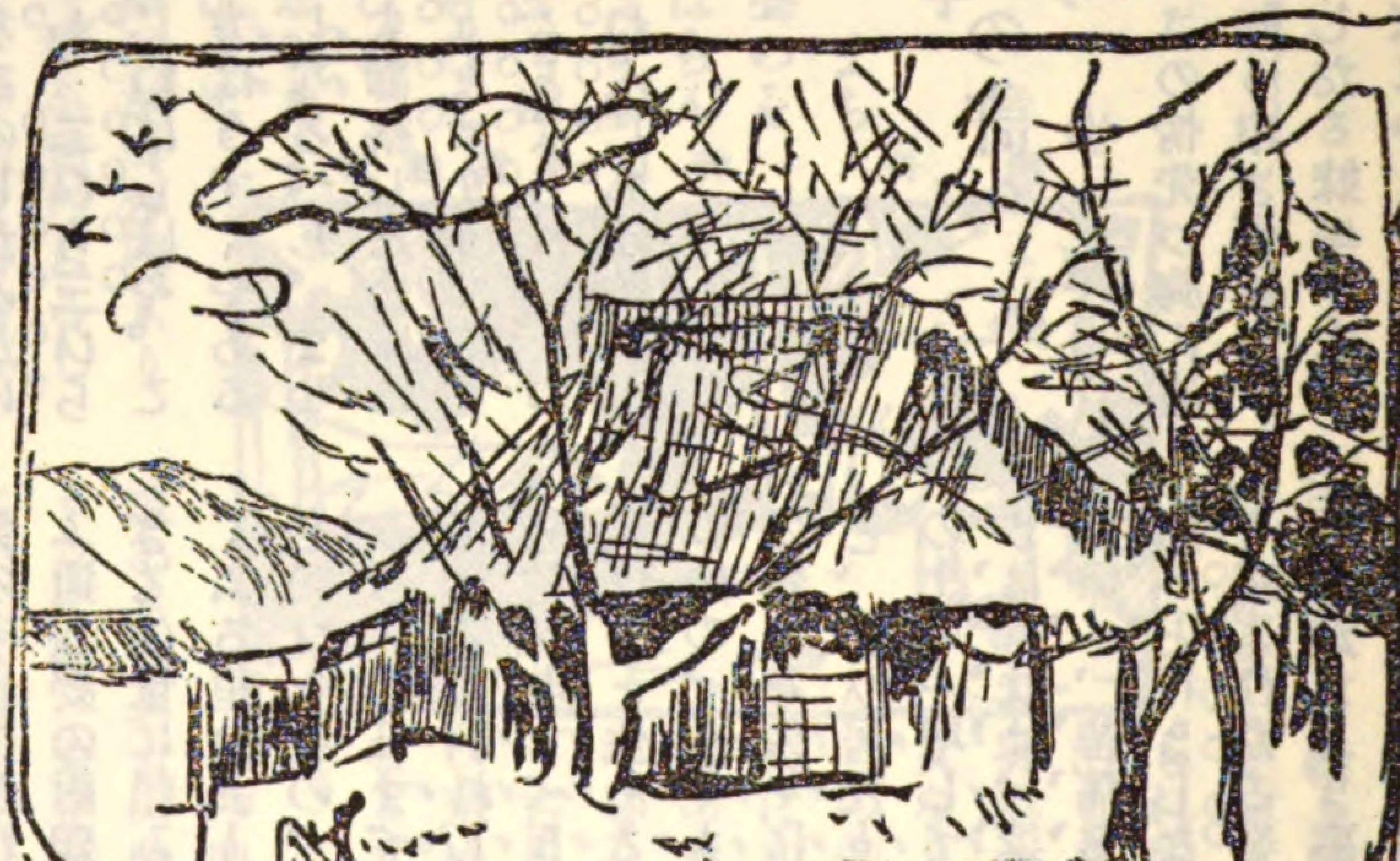
麹町區飯田町六ノ十　葉流子

夢か、あらず、まぼろしか、あらず、あゝみなこれ悲しのうつゝなるをいかにいたし候べき。

あゝ若月は逝き候とや、あゝ若月は逝き候とや。「額に彈丸うけて倒れながら、一聲高くいなゝいてあゝそのまゝに息絶え候」とは誰が御言葉ぞ、……十有七年、私と生れし年を同じうして、同じ家に育ちしあの若月は、はや相見ることかたく候か「さらば」のみこゑにひらりと飛びのりたまひし兄樣をのせて、勢よく馳せ去りし若月の姿、肉付ゆたかなりし身、ふさ〳〵とせし尾、……あゝ私は忘れがたく候よ……かたみなるたてがみ、只とはに手箱の底にかたく大切にひめ置くべく候。オ、今ぞ今、耳をすませば、主なき厩にいなゝきの聲、かすかに聞ゆるやうの心地いたし候、もしや、もしや、若月が一人、いづこかの空を飛びて、かへり來しには候はじか、あゝ兄樣よ、若月は逝き候ひしか、あゝあの愛すべき若月は逝き候ひしか……。

選外　大和　時用なつ子

（評）死せしものゝ唯馬なるを知りつゝも、なほ悽慘の情に堪へざらしむ。



地

○友の許へ

けふ子女史

世のおとづれ稀れなる山里、人の戀しさは、とても都には知られぬまでに候。さても、何處の梢に御目のとまりてにや。かねてより紅葉せばおどろかし給はむやうのたまひしを、一すぢにたのみまゐらせて、今日は明日はと待ちくらし候ものを、御車の音もせねば、昨日今日の霜に色變りゆく梢、うらめしうのみながめやられ候。そよとの風のたよりは、きかせ給はざりけむ、御かへりごともまゐらぬは、そのふみ如何なる處にか紛れたると、心もとなく候。つれなき木枯の風はなか〳〵

に。人も來ぬ此のあたりにまでたづね入りて、今朝は、其の名殘とや、門の小川にからくれなゐのしがみかけわたして候。さはれ、風のさそひしか、二ひら三ひら封じこめ候を、せめて哀れとも御覽じ給はらばや。こゝなるは、かく色濃く候へど、都の方はうすくやあるべきとおぼえ候。紅葉も本意なかりしなるべし。まして、あるじのわびしさ、かへすぐ\も御察したまはるべく候、心づよう風にもまかせで散りとゞまりたるも候へば、なほおぼしめしたゝせたまふとならば、この二日三日のほどに、いかで一度と、ねんじあげ候。かしこ。

（評）婉曲なる文。情あり、景あり。

人 ○妹に別れし時友の許へ

大阪鹽町一丁目　つゆ子

お知らせ申さんと筆とるだに、悲しさの情先づ胸に迫りて、何と認むべきか、それすらも知り申さず候ふ。かねて、あなた樣のお愛しみを添うしたる妹事、去る月の半ば頃よりふと風邪の心地と臥床につき申し候うてより、日々に病の募りて、妾の力限りひき留めんとせし甲斐もなう、情けなくも去る七日遂に冷けき死の神の手にひかれて、この世を去り申し候ふ。知らせ給ふ通り妾の兩親は早く世を去りて、妹とたゞふたり廣きこの世に顆み少なくも孤子として殘されつゝ、已むなくふる里を去りて、伯母の情けに當地にて人となり申し候ひし身の、いつも姉妹互に慰めあひて、憂も悲しみも、今日までは漸う通り來候ふものゝ、その力とも恃む妹に別れし今よりは、噫何としてこの果敢なき世を送り申すべきや。

死はもと生あるものゝ慣とは申せ、未だ十五にも滿たぬ妹の、かくも果敢なく消えゆかんとは、……。明くる年こそ久々にて共にふる里の、兩親のみ墓に詣でんと、喜び居たりしも今は仇、と思へばいとし悲しさの念いや增してたへ難く候ふ。

さはれ妹は、遂に世の快樂を得味はいで身まかりしとはいへ、苦痛多き世を逃れてなつかしき兩親の在ます所へと行きしなれば、つゆ恨みには候ふまじ、たゞ獨り殘されたる妾こそ、實に限りなき恨みに御座候ふを、あつかましき事ながら、孤獨の妾をあはれとも思召さば、お手すきの折一度御越し下されまじく候ふや、妹も死に際まで、お許樣のみ名呼はり居り候ひしものを、

おてづからなる花受け申すやうなれば、いかにうれしう思ひ候ふやらん。

（評）悲極めて切なり而して筆更に亂れず。

秀逸

〇廢學せし田舍の友へ

京の都にて　前崎照子

いつかとうれしき雁の御便りをのみ、まち渡り候ひしを、思ひきや、夜半の一聲のそれにもまさりて悲しき悲しきみ文給はらんとは、さながら一字一句涙の玉もてつゞらせ給ひけんやうなる、よみもてゆくまゝにいよゝ胸いたく、未だにたちかねてそのまゝながき袂もしどゝにぬれまさり候ひぬ。わきてもいや深き御孝心といしくも思ひあきらめさせ給ひての御廢學にはひた泣きになかれ申候。しかし萬づに秀でさせ給ひかつ外國ぶりに迄至り深うましますものを、よしや御卒業のしるし得たまはぬとて、素志を貫ぬかせ給はぬとて、世の爲お家のため、つくさせ給ふに何御不足の候べき、なほ不治の御いたつきとにも候はねば、自然の御保養次第、やがてはすが〳〵しきもとの御身とならせ給はんには、好ませ給ふ歴史や美術の御研究はもとよりみ心のゆくにまかせ何にまれ御自修もいとやすき御事と存ぜられ候ては、かへりて物靜けき田園の御生活こそ中々御羨ましう覺え候。殊に父君が御謠いに折節み心なぐさめゐ給ふとか、父なき子は身にしみしみと樂しかりし三とせの昔思ひ出の涙にむせび申候て、昨日の我にもあらずとみに、伏見の里なるはゝそばのかげ戀しうなり候も、今はまつといふのぞみも絶し名殘にや候はん。こゝにも早う古里人となりて、君が母上のみ手とり給ひ京めぐりし給はんを、せめてはまつ身となりてましと今より樂しみにいたし居り候、

都の内さへ木枯吹すさびて物淋しき折柄、波あらき名古の浦風いかゞきかせ給ふや、み心し給はりたく候。未だとり〳〵聞えあげたきことども候へど、とかくに筆のすゝみかね候へば、余はこのちさき菊の花のさゝやきにゆづりて、しどろなるふでをとゞめ申

選外　神田小磯君江



し候かしこ

（評）何等の温情ぞ

○晩餐會へ友を招く文

無名子

清め鹽ほどの今朝の初雪、あやふく松の下枝に消え殘り候を、其まゝ硯にうけて、さて筆そめ參らせ候、こちたき薄墨のあとも幸にみのがし給へや。さても田舍に遣はせし末の妹、二三日以前久しぶりにたづね參り候が、かね〴〵妾より御許樣の御寵いたし候ものから、いと〳〵なつかしがりて、是非御ちかづきの榮をと、切にあこがれ居り候、去ながら、無作法なる田舍娘と相成り候へば、かゝる御願ひいたさんは、なか〳〵にをとがましけれど、何〻優しき御許樣とあまえて、妾同樣御敎導の程偏へに念じ上候。就ては今宵、御馴染のしるし迄に、晩餐會を催し度、幸ひ亡き祖父が手植の寒紅梅も今を見ごろと微笑み候へば、花にやどる月かげを、破窓に眺めんも一興、いで妹がをかしき手ぶりの田舍料理御目にかけんに、夕つげ鳥のなかぬうちより、とく〳〵御來駕下さるべく候。何卒よろづ御さし置き、柴の戸かゝかせ給へ、さなくば心よわき妹の泣きもやせんに、妾も冬のやうな御心と、いつまでも御恨み申すべく候。

（評）筆流るゝが如し。

○久しうたえたる友より文おこせたるかへし

むさし　ほたる

七年ぶりの昨日思もかけずこの年月忘れもやらぬ懐しの御文拜し參らせて懐舊の涙に咽び申候

誠や君樣には何事も御心の儘いみじくも御成功遊されしもの哉。去年の秋某女學校に月の桂手折らせ玉ひしと聞し時もこの彌生花の盛にいとも愛度御縁につかせ玉ひしと承はりし折も我不過は忘られて心よう嬉う肩身廣やかなる心地せられていかで御悦の一言をだに奉らむものと幾度か筆とり候へ共かゝる身の餘に愧しにて思ひ煩ふ間に機を失ひ候ひしを往年あれ迄に契り合せし君のよも我本意とは思さじと獨信じ居候ひき人並〳〵の者ならば最早可愛きの者の膝に在るべき筈の身にて猶かくあり候を訝しみ玉ひての御尋只々赤面の至りに候。さはれ何事もえ聞えじ聞えて心はるゝなれば疾く愬へまつりしなれどよに憂事の數々告げまゐらすればとて徒に優しき御胸痛めまゐらするのみなれば

いつかはこを昔語りに笑ひて聞えむ折も候ひなむ何事も夫迄はと包むに餘る胸の思も洩さじの我心哀れと思さば再びなぞとなゆめ問はせ玉ひぞ

委こそ戀れ心は猶昔のまゝの君が友に候へば思ひ浮ばせ玉はむ折々何卒床しき御文玉はり度さらば幵を拜せむ束の間を思なかりし昔に返りて我世の春を偲び申べく候へば切に御願ひ申上候取あへず御請迄かしこ

（評）言外涙あり。

○歌留多會に招かれし返事

上毛　月光

あわたゞしき御使者思ひがけなや味方の敗軍ときゝて心の駒も狂ひ出だし、一家一門打ち連立ち馳せ參り大將方と揉みあひ天晴れ凱歌をあげ候はんしばらくの間御支へ下され度萬事戰塲にて

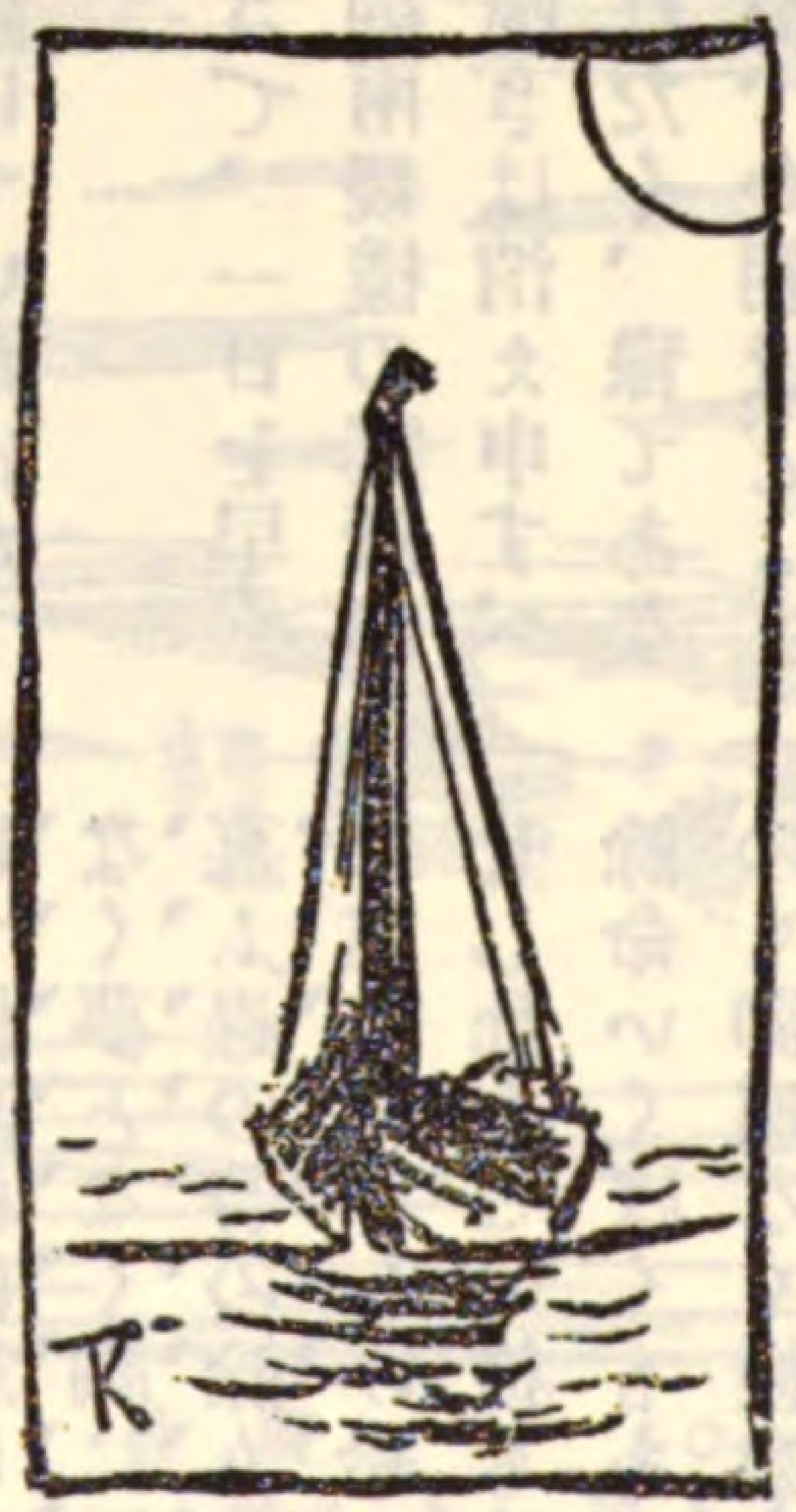
（評）選與禁せず

○ふる里に歸りて都なる友の許への返し

（十號露子樣の文を讀みて、都の友に代りて）

備後神石郡仙養山の麓　池田蔀子

悲しき御文、今宵淋しき孤燈のもとにて拜し參らせ候ふ。喜び勇みて、絶えて久しきふる里に歸り給ふみ姿を見參らせては、そゞろ羨やましさの堪へ難く、せめては嬉しき御便りにわがふる里をも偲び候はむと、日毎にそれのみ待ちはべりしに、去りとはゆめ思ひ候はざりしよ。悲しき涙千々の玉章繰り返し候ふほど、いよゝなほ悲しうなりまさり候うて、何と御慰め申さん言の葉もあらず候ふ。



選外　津市　谷かく子

されど露子樣！涙は決して永遠のものにはこれなく候へば、必らず〱お嘆き遊ばさるまじく候ふ。

もとより、親切にて情ふかゝるべき里人の、昔の阿媚にひき換へて蔑み候ふは、定めしお恨めしき限りに候はむ、されどそは御存じの如く、私の兄上が日頃申され候ふ「社會組織の不健全」とやらか致す結果に候ふべくこは啻にあなたの里人のみにはあらで、榮ゆる者に諛ひ、衰へたる者を蔑むは、世間おしなべての人情に候へばいかに悲しみ恨み候ふとも更に致し方なく候ふ。かく申せばまことに意氣地なき樣には候へども、何事も女子の身の、只々涙をのみて忍ぶより、外あるまじく候

ふ。

おゝ、さはれ、幾とせ振に歸りて詣で給ひし、亡き御兩親樣の奥津城に、手向けし水も花もなくて、あたり淸むる人なきまゝに荒れにし樣を、眺めやり、石塔にもたれて咽び給ひし時のお胸の中、いかばかり……。さぞかし涙に水壺や溢れ候ふならむ、石塔も搖れむの思ひおはし候ふならむ。それに付けても暖かきみ情のさめやらぬ亡き御兩親樣は、草葉の蔭にていかばかりお歡び遊ばされ候ひしならむ。

されば里人の嗤笑にはゆめ心を煩はさで、一日を早く彼岸の桂の花を手折り給はば、亡き御兩親樣の冥府のお歡びはもとより、すべて今日のお嘆きは消え申すべく候ふ故、疾く〳〵御出京あそばされたく、豫てあなたが南の椽にお出しなされし盆栽の梅、今朝ほどより三葩二ひら蕾を破り候へば。

（許）力ある慰藉。

○虫籠に添へて親しき從姉に送る文

豐橋町字曲尺手六十四番地土屋彌六方　島　秋　子

御別の餘りなりしことに今もなほ胸ふさがれて其の際のことつぎつぎに思出されて袖の涙に濡るゝにて候さても心なき身にも哀知らるゝ秋の草村いかに見そなはさせ給ひしか森の霞小川のさゝやき今は只思出の種とも相成候秋の最中にもならば宮路の山は紅葉見んなどゝ仰ありしも今は只昔見し夢の如くに思はれて優しき御言葉のひしとさしそひてこれかれと思出さるゝ緒と相成申候まして草むらにすだく蟲の聲の慇れさ如何計りにて候か御發足の際に給はりし鈴蟲松蟲夜る夜るかごち顏に鳴きしきるもいといぢらしくて胸砕かるゝ計りにて候哀れに悲しき蟲の音に誘れてお許樣のこと現となく夢となく胸に浮びて其思ひの去り遣り兼ね候主を慕ふ蟲の音の餘り悲しさに便りあるに任せ籠もろ共學の窓にいそしみ給ふ御許に參らせ候夜毎に慰さめ參らせし如くこの後も時しらぬ迄鳴きしきるらんと存じ候餘命いくばくもあらぬ蟲の行末の慇れさ何に譬ふるものも御座なく候盡させぬ吾が思この蟲に御聞き下さるべく候あら〳〵かしく

（許）美しき友情よ

○白菊に添へて友の許へ

四谷　しらぎく

今朝しもしるべの許より、白菊澤山送りてされしが、妾如きみやび心なき者の、手にかけむもいとほしく、せめては君が手だれの、活花の料ともならば、いかに嬉

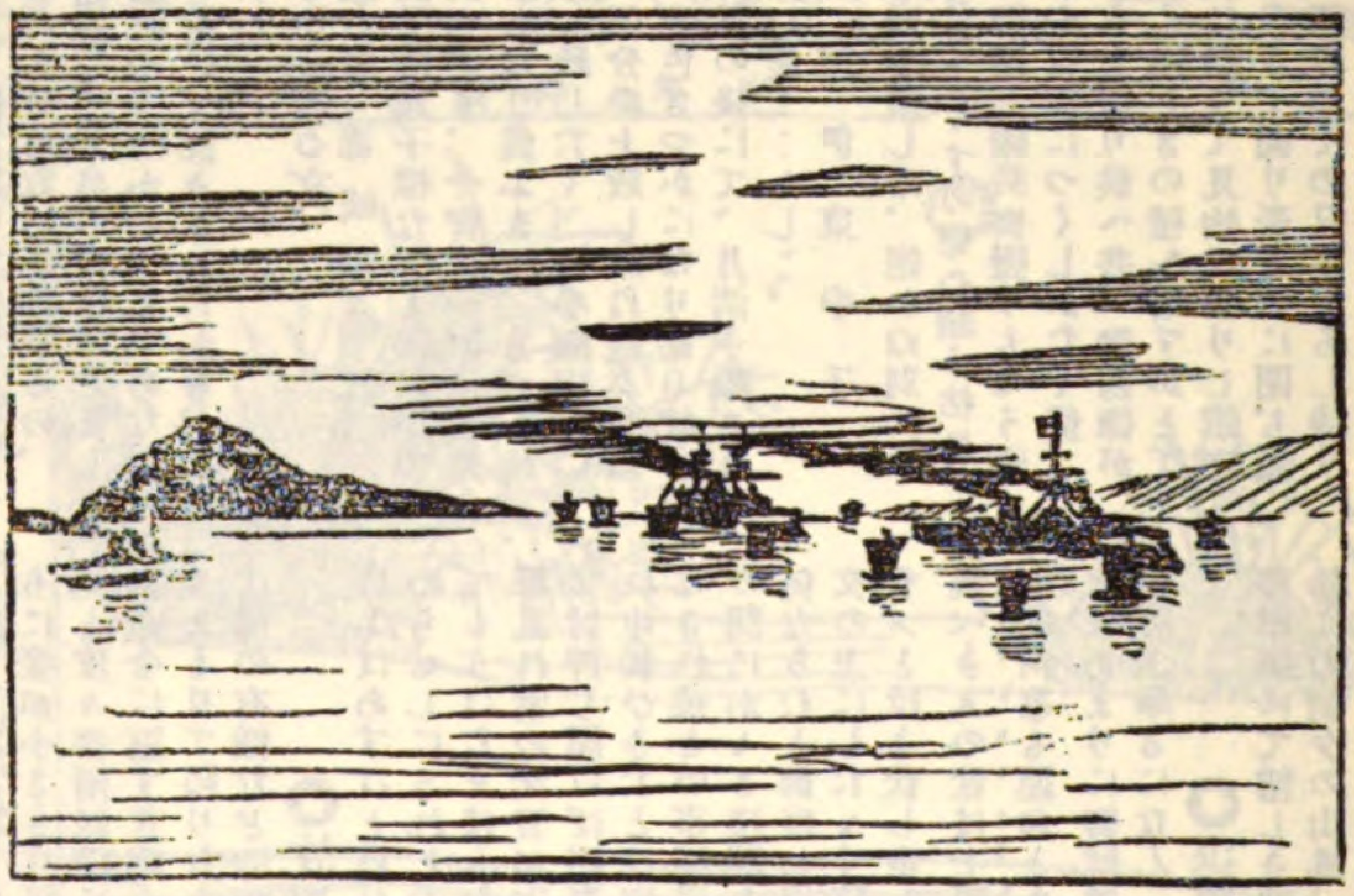
しからんと、此花の心をも汲みやりて、かくまゐらするになむ、あはれ妙なる御手にあしさふし〳〵ためられて、姿正しく御床の間にすゑ直されしときの、菊の心やいかならむ。

（評）簡潔

○遠方に去らむとする友に

美濃　青木　勝子

さらば別れ參らせむ、相見む事の却て心殘りの種ぞと思ひ斷念め候ものゝ、今更せき來る涙止めかれ、見る人もなき心安さに正體もなく咽び入候、干すに由なき此涙、まゝよ君の熱き御胸に犇とすがりて心の丈けを泣きたらむには、せめては乾くよしもと、幾度となく戸口までは濕し袂に顏蔽うて這ひ出で候、さるにまた懐い優しき御顏拜し參らせむには、中々に胸痛うて如何で別れ得申す可き、果ては絶え入りて人々を驚かし、心狂うて皆樣に笑はれむ事の必定と思へばまた心弱りて茲にかへと……、許させ給へ、今は世の有り丈けの苦艱を忍びつゝも、此儘御別れ申さむ事の却てましならむと覺悟致候、此手紙見給はむ頃は曾ては盡きぬ話にしかと手を握りて佇みし、冠木門の邊りに例の芳公が車整へて待つ事と存候、宜し此上は何事も申すまじく、只管に涌きかへる此心にかけて君の御旅路に恙なかれと祈るのみに候、



選外　廣島　門田鄰子

○程近き友へ

下谷　太田あきつ

雨細うふりいでゝ、いぶせき事限りもなきを、いかにおはしまし候か。扨はいつぞや御約束申上げ候ひし、わたくし寫眞、今朝出來致し屆參り候が、誠に上出來にて、薔薇もちたる手附のあやしげなる、肘の怒り具合、至つて不格好なる姿など、實によく撮りし者にては候はずや、よくよく御覽遊ばされおん笑ひ下さるべく、共に持せたる菊は、花壇に開き候ひしもの、餘りにうるはしきまゝ一本御分ち申し候。あはれみ机の上に飾られなば、花も本意ある事といかに喜び候ふらむ。遠くもなき御わたり、わたくし持參るべきに候へど、あやにくも今朝より例の頭重く、心地惱ましく候へば人して持せあげまゐらせ候。しかしさしたる事にも候はねば必らずみ心になかけ給ひぞ。かしこ

○植物採集に赴ける友の許に

出雲　白すみれ

先日は御手紙有難う、神々しい山氣の滿々たる杉や松の木の間に、白いテントを張つて、白玉のこぼれた羊齒草を押しなさるつて、どんなに面白いでやう、しかし名に負ふ額圓寺の幽谷の秋、どんなに恐しいでせう、時々はましらの聲もしますつて、お體が寒くなる樣ですわ、月に嘯く鹿の聲も膽をたつでせうれ、あなたの御母樣なんか始終夜テントの中へ何か惡獸でも入て彼女（あれ）を噛み殺しはしないか、風を引かれば宜いが綿入羽織一枚では淺げないだらうつて非常に心配して被入ますよ、御用心遊ばせ、此花御在

ピなの、奇麗でせう昨日花籔山の運動會にあなたの二代目をして探つた物ですよ、コロン〳〵と音を立てゝ流れる谷川の岸に美しい影をやどしてホヽとほゝゑんで居たものです、白と水紅色、絵に描いた様れ、先生に何といふ花でせうと伺つたんですけど、何だか分らないと仰有るの、キツト石竹科だらうつて、私早速、「SWの仲好草」と名づけるにしましたの、するとお友達が「古今未曾有の長名草」だつて冷かしてよ、あなたとお別れしてから後の事は此花にソツトさゝやいて置きましたから、小聲で問うて下さい、

○百人一首會に招かれしを斷る文

麹町　赤城壽美江

承れば今宵歌留多會の御催し有りて初子様貞子様露子様なども御出陣の由、私とても此の好機會を失ひ候は心外に候へども、今宵は一家にて先日凱旋遊ばされし叔父上を御祝ひ申上ぐる事となり候ふまゝ、さやかに讀み給ふ美はしき御聲も、久しぶりにて御きゝ致したく、御手製の○○とやらも御馳走にあづかりたくは候へども、何分參上致し兼ね候ふ間殘念ながら御斷り申上候。庭の松ヶ枝の月も大分色さやかになり候ふ故、此の手紙御手にとらせ候ふ頃は、定めし一勝負の後にて、月清き縁さきにてお顔のほとりをさまし給ふ時にもやと存じ候……かしこ。

○都なる兄と姉の許に

薩摩　伊東幸子

村外れの緑滴る老樹の下にて、互に盡きぬ名殘を惜しみ、飽かぬ別れに袖しぼりしより、いつしか秋も更け渡りて、きり〳〵すの聲心細う枯れ、荻の上風あはれに身にしむ時節と相成候處、御兩人様共御變りもなう御元氣にて御勉强の由、妾の喜びなか〳〵に筆や言葉につくしがたく候。當方に於ても御父上様始め皆々すこやかに暮らし居り候へ共、御前様がたの御在村の折に比ぶれば見る物聞くもの盡く淋しさの種を增すかとばかり覺えられ候。去年の今頃の御姉上様の袂に縋りて見物に參りし鎭守の社の村相撲にも、ことしは參りたき心地も致さず獨り吾居間に閉ぢ籠りて先日御送り下されし御寫眞に對ひ泣きつ語りつその日をくらし侍り候ふ。朝夕日も鎌ふばかり多忙に立働きしかるの君も今は靜まり返りて妾の文机の下に寂しさうに潜み居るも何んとなう氣の毒に感ぜられ候。最も不思議に存ぜらるるは、里の小川のせせらぎの聲にて、御兄上様が「春の諧歌ふ琴の音に似たり」と常に仰せられし頃は、妾も然か思ひて唯愉快なる聲とのみ聞き流し侍りしに。此の頃は心の底迄しみ渡るやうなる悲しき歌を歌ふかとばかり、怪しまれ候。あはれ花の都の下宿屋とやらに妾が小さき文机をも並べて三人共に共に勉强せば如何に樂しかるらんと度々御兩親様に妾も遊學を御願申上候へ共、今しばし辛抱せよとの御命令に返す言葉も知らず唯胸の憂の遣瀬なき儘あけくれ東の空のみ打ちまもりて限りなき感慨に獨袂をしぼり居り候。何卒折々は御手紙被下て都の有様など御知らせ被下度偏に御願申上候かしこ

○故里の父へ

神戸　勝田かつ子

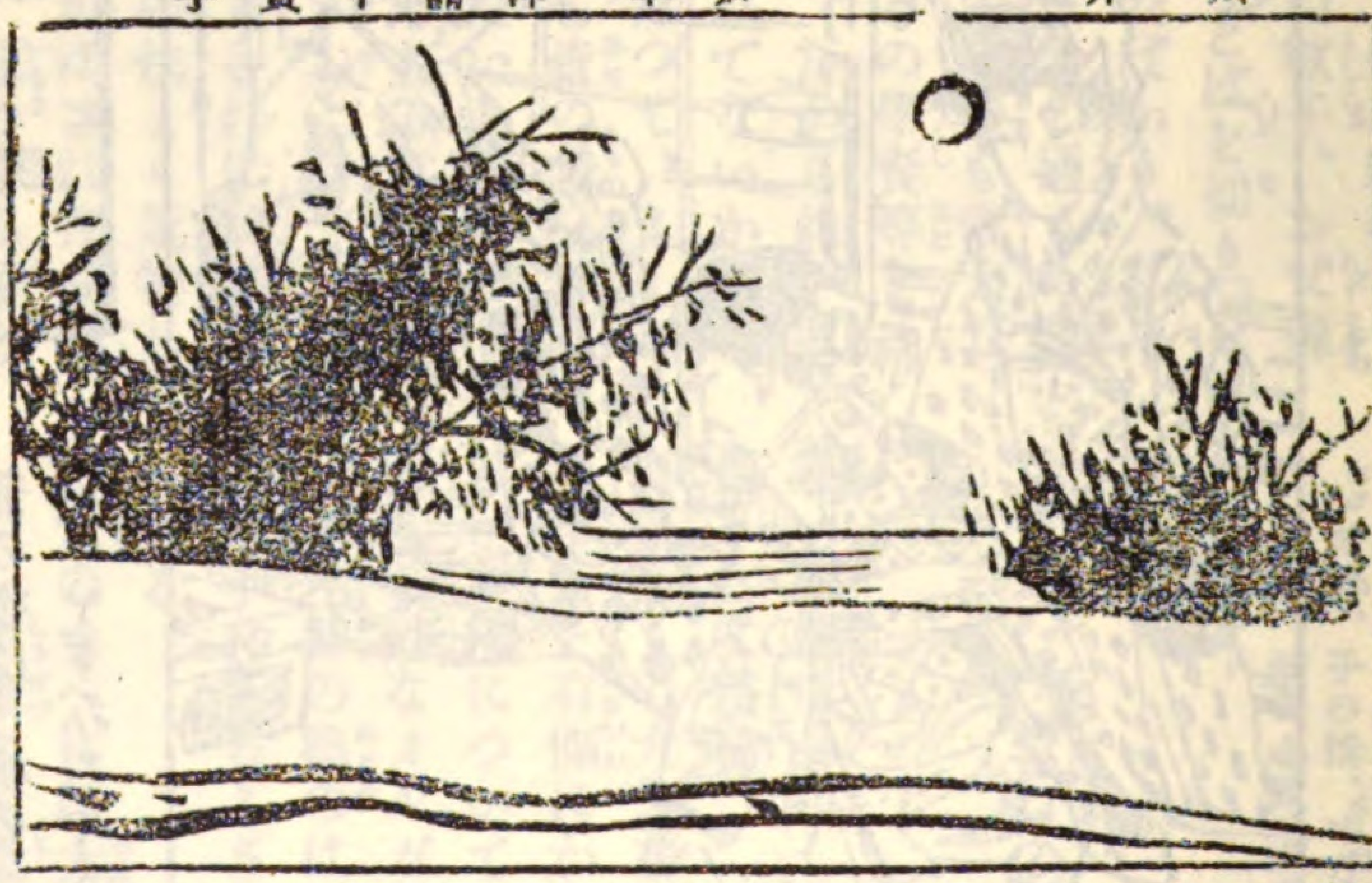
けふはあすはと思ひながらもつい〳〵心にもなき御無沙汰に打ちすぎまゐらせしにうれしや御國よりの御たより久しぶりにてなつかしき御話にてもうけたまはらむと我を忘れて手に取り見ればこはいかに墨にじみて筆亂れ常の父君が御筆の蹟とも覺えずさては變りし事もやとふるふ手もて封押し開けば變事も變事思ひの外の大變事讀まぬ先きより早や胸つぶれ申候ひきたとひ御商賣の失敗とは申せ家屋田地も殘らず人手に御渡しなされ候との事精道村にても指折の舊家と云ひはやされし我が家も暫しの間にかゝる淺間しき有様に立ち變りしかと思へば父君が御胸の内も如何ならむと御察し申しては熱き涙の我知らず頰をつたひてハラハラと御文の上にしたゝり落ち一句は一句より腸を斷つ許り果ては堪へ得ずサメザメと泣き伏し申し候ひきさはいへ父君を御恨み申す事のいかで露程も候べき人の世は七轉び八起きとか申せば富むも富まぬも時の運不運に候へば何事も運命とあきらむる外なく早速學校の方も退學して歸國致し申せはあまりに御配慮遊ばされて御からだを御無理なさらぬやうくれぐれも願上奉るになん　かしこ

○退學せし友の許に

下野　早苗子

停車場にて惜しき袂を別ち參らせしも、早や五日前と相成り申候、馴れ給はぬ朝夕の山風、御障りも之なく候や、いかに止み難き御事情故とは申ながら成業に間もなき際に至りて、かねての篤き御志を枉げさせられ御不自由勝かる土地に住はるゝ御身となり給ひし御心の中をおもひやり奉れば如何許りかと、慰めまつらん言葉もおぼえず候、私とても二なく

睦び交せし友を失ひたる悲しさ、何彼につけても御地の空のみ戀しく果てはみうつしゑ取り出して、思ひ出の涙にうるはしの御姿汚せしも、あはれ幾度にて候か、さりながらそも家事の御都合上、致しかたも御ざなく候へば、もはや何とも申すまじ、只これよりは、御身健やかに御父母君への御孝養を專一に遊ばされて、たのしき御家庭と美しき自然に清きの心を一入みがかせ給ふやう願ひ上候、よしや身は海上遠く離れ居り候とも、尙おたがひに行末遠き身、いかで秋つられし先の日の樂しさをくり返さん折の候はざるべき時々の御便りは必ずきかせ給へ、かれてより御愛讀の雜誌、其他新刊の書などは、おのれの務めとして御送り申さん程に、御ひまの折々たゆまず御自修あそばされよ此手紙書き終り候折りしも戸の隙間より廿日許りの月影漏れ來り候に此月も同じく君の御あたり照らし居候はんと思へば、一しほ身にしみておぼえ候、あはれなつかしき君には今宵此月に對して如何なる思にふけり給ふらん、はた、又此文の御手に屆く時は……


選外　岩手　沖館千賀子

○家出せし兄樣の許へ

（妹より）　三河　澤田みさを

兄樣、妾が一生のお願、何うか戻つて下さいよ、雪江樣へはお氣の毒、お母樣の御心配は傍て見て居られぬ程て、色々案じ過ごいては、毎日欝々と暮しておいてなされるのよ、元よりお情深い兄樣のことゆゑ是には深い譯もある事でせうが、常々から考へ合せますも、別に雪江樣との御緣談をお嫌ひなされやう筈もなし、唯勉强がお望みの所へ、叔父樣のお話が餘り急なので、例の御氣性からつい嫌となつて御出掛けなさつたとしか思はれませぬ、其れなら何の樣にも話はつきませうから、兎に角一度戻つて下さいよ、もうお正月も近い故、家中揃つて樂しうお年取した上、春ても晩うなりましてから、叔父樣にもお話なされ、お母樣や妾にもよく〳〵安心させて、そしてゆつくりと御望みの御勉强に御出でなさつて下さい。叔父樣へは妾から宜しう申しますて、何うぞ急いで戻つて下さい、此の忙しい大晦日を前にしながら、仕事も手に附けすに、お噂ばかりして居られるお母樣や妾を安心させて下さいよ、兄樣のお宿を知るまでに妾は何樣に難儀しましたでせう。どうか兄樣妾の心を不憫と思つて、此の手紙が着きましたら寸時も早うお戻りなさつて、妾は兄樣の早くお戻りなされるやうと、神樣に祈つて居りますから。

○かるた會に友を招く文

能登　花葉女史

今宵、龍田の姉上の歸宅せられしを幸ひ、近頃珍らしきかるた會相開き申しては如何に候や。幸ひ今朝親戚より貰ひし鮮魚これ有り候ゆゑ、妾の手料理をお目にかくべく候間、日暮早々よりお越し下され度候。それ〳〵の君へも通知いたし置き候事ゆゑ、定めて賑かなる事と樂み居り候

殊に昨年の暮は身體の工合より思ひがけなき失敗を招き候ひしかど、今や年改まると共に面目を改めて、妾の武者振まこと花々敷ものに候。今度の相手は君ならでは之無く、日頃の腕前自慢せむとの意氣ごみに候ものを、今晩の勉强は誠に卿に候ぞ。

幸子樣もお忘れなく是非々々お連れ申して……

左樣なら

廣津柳浪先生選

短篇小說

天　○希望

群馬縣前橋市石川町七番地
林　廣子

小路を曲つて四五丁許り行くと、西田町とて士族屋敷の至て閑雅の地に、杉垣を廻したお屋敷、質素なる門構へ、柱の右に小林秀夫と記した表札が打つてある。

姉樣、と、勢よくかけこんで來たのは、年の頃十三四でふさふさとして毛を藤色のリボンで止め、御下毛にした美しい少女、姉なる人は、名を敏子と云ひ色



白の面に流行のひさしがみが能く似合ふ、今しも机にもたれてノートブックに何やら筆記して居たらしく數册の書は、机の一隅に積まれてある。

「オヤすみちやん、何御入りなさいな、」妹は「ハアありがたう姉樣驚いて」

「いゑ一寸誰かと思ふたの、」

「そーいつても御勉强ねー」「あ、すみちやん今日は日曜日ですわテニス會でもあつて」「いーえ今週はお休みよ何だか氣ぬけしたよーて」「そーでしよーすみちやんはチャンピオンなのだもの」姉妹オホヽヽヽと笑ひ合つた。

今日は日和もよし幸ひ日曜日だから散歩をしやうと相談をきめて姉妹は、今しも御母樣にきいてみやうと思ふ折、敏子々々と云ふ

お聲、正しくお母樣と思ひながら敏子は母屋の方に急ぐのであつた。「御母樣御用ですか」母は縫ひさしの破布をさしおきながら「此の間の事ね敏子、お父樣にも一寸御話をしたのだよ」とて一寸ことばを切り「そしたらね考へておきましよーと、仰つたばかり、私も昨夜とつくり考へて見ました、お父樣はあの通りお急しくて御不在勝で居つしやるし、それに兄樣も帝大で今勉強最中で肝心の所だしその上月々の學資等を〆めて見るとなか／＼少なくないのだよ、だからね、敏子、兄樣がお歸り成さる迄待つて御くれてないか」敏子は只默然として答なし、「そりや母樣だつて、よー知て居るのさ、女學校も今年優等で卒業し皆の者を喜ばせた位なのだもの、高等の教育を受けたいと願ふのも最もさ、だけど未だお前樣だとて十七だものさほど遲くもあるまいからと、思ふのよねー、どーだね敏さん」敏子は母が事をわけての物語りに早くもそれに同意しやうと決心したのであつた。母も敏子の快よく返答したので互に嬉しさは充ち／＼て笑顔がかはされた。「母樣其の時はきつとよ」と言葉を殘して、妹のすみ子と諸共に散歩に出た。敏子が決心はいよ／＼かたく、一年の後と云ふ事は堅く心に留めて、さて平素は勉強に身を入れるのであつた。

皆さんにも經驗がありさうなはなし、苦もなく書かれてあるが、母の情、子の情、すなほな處に一種のあたゝかみが籠つて、美はしい小說、淸い小說(選者評)

地

○心のかざり

長野市田町二九　飯塚ぎを

寒い夜風は身にしみ星のきらめく影も何となくつめたさそうな霜夜。

海岸通りの大きなひろい賑やかな町並をもの、小半町もゆくと右側にかなり立派な煉瓦づくりのホテルがある、其横について少し曲ると一つの敎會がある、いましも美妙なオルガンにつれられて、

「神の德のはかりなや、愛の深さぞしりがたき」

と、手にとるように讃美歌の「神の德」の一節がもれきこえる、

會堂のまへには大きなはりふだに記された文字、

「高潔なる婦人　今村愛子」

群集の人々はとりどりに話合つてゐることである、

今迄ベンチに腰を据えてゐた女、やをら身をおこして

聖壇にのぼつた、蝦茶袴折目たゞしく、オリーブ色のリボン、艶やかなるまなざし、おもながな容顔、すらりとした脊、銘仙の綿入もどことなく上品に見ゆ

牧師の祈がすみ讃美歌が終ると聽て彼女は手にした聖書をうちひらいて朗讀をはぢめた、彼得前書、第三章の三節より四節、

「爾曹の妝飾は髮を辮金をかけまた衣を着るか如き外面の妝飾に非ず、たゞ心の內の隱たる人すなはち壞ることなき柔和恬靜なる靈を以て妝飾とすべし此靈の妝飾は神の前にて價貴もの也」と、よみをはると口をひらひてかたりだした。

「皆さん、私はいつも此章の此節を讀んで深く感ることで御座います、實にこのところは私達のこよなきあぢあふべき言葉です、女のとかくわるいくせは何ひとつ出來ず修養も足らんくせに、少しばかしの學問を鼻にかけむやみにいばりたがる、私は此樣に申上げたからとて粧飾をかざつてはいけないとは申せんが然し、いくら盛裝したからとて日々の行爲が劣等では何等の價値もないと考へます、それは丁度紙できりぬいた梅花と同じで形は美くても香もなければゆかしいところもない、それで滿足してゐられるとすれば誠になさけない次第です、「良妻賢母」敎育のかほどにさかんな今の世に婦人らしき婦人謂ゆる高潔なる婦人を得んとしても容易に得られないのみか日々に德操はすたれてゆくと、これを毎日の新紙にてらしてごらんなさいまし、諸敎育家の御痛心もさつしてゐますが、いくら敎育があつても心の修養がたりないに基きます、智德躰の三育の外に私は靈育の必要を感ずるものに御座います、何卒お互がみえをかざるまへにまづ心の修養をつんで頂きたいと同時に婦人らしき婦人になられたいことを望むのです、そうして神聖なる美しい歷史の生涯の頁をつゞりたいと思ひます「高潔なる婦人」最も我國に於いて今や其必要否現出をまつてをります、皆さんどうです信仰の善きたゝかひを戰ひ、「自己の完成と國家の幸福」と言ふことに心をもちゐられて、圓滿なる婦人となられたいのです」一語一句これみな赤誠よりほどばしりたる言葉。

傍聽席の婦人も感にうたれたのであろう、頭もうなだれて熱心になつて耳をかたむけてゐる

かくかたり終へて徐々と壇上からくだつて、ベンチに腰をおろした、

牧師は席をたつていりかわり壇にのぼつて、讃美歌の五十三

「めぐみのひかりは、
　我がゆきなやむ、やみぢをてらせり、神はあいなり」

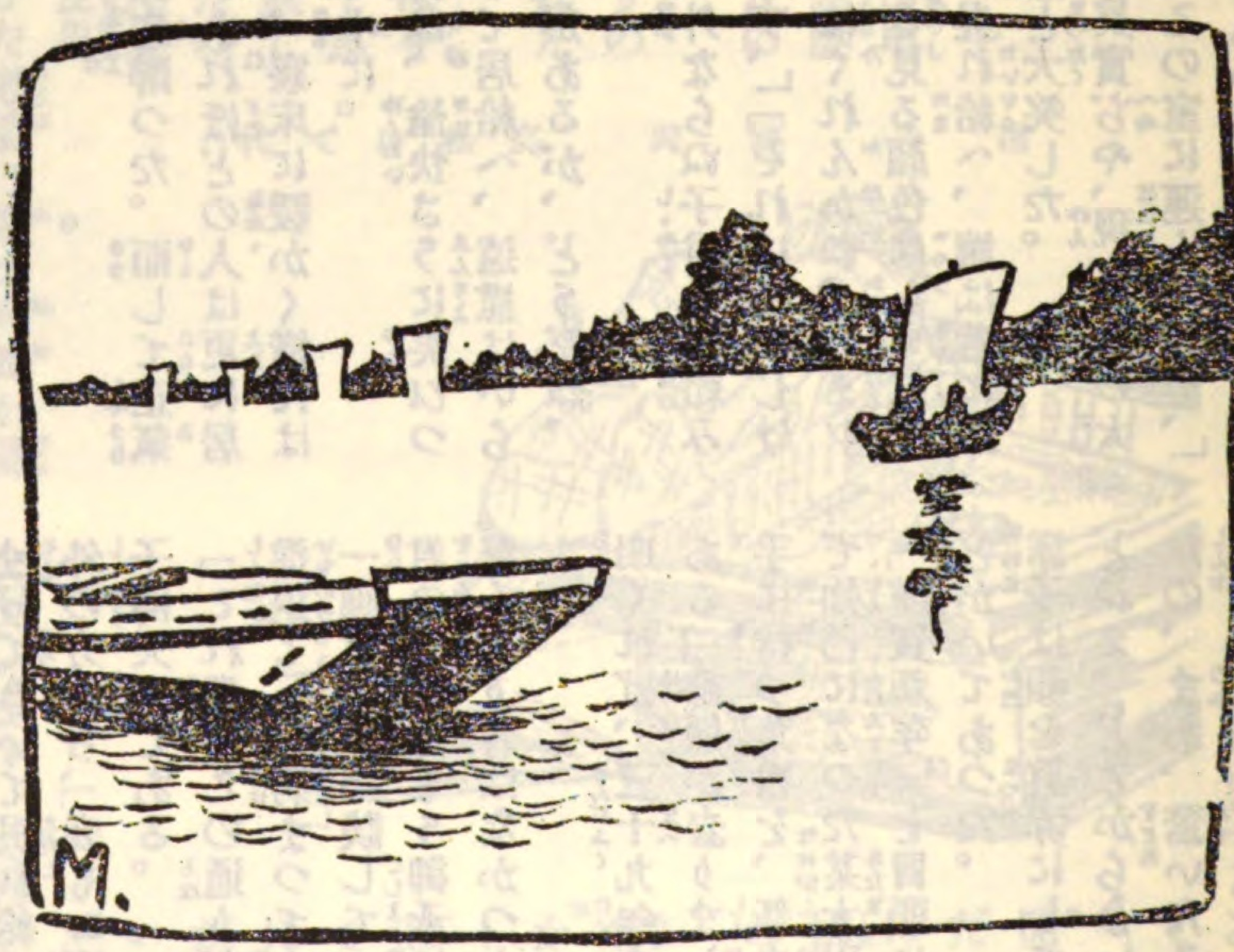
さわやかなる調べがやむと、皆なうちひれふして「主の祈」をしてむつまぢき集會はとぢられたのである。

世の惡風波にそまず、神を敬し尊み常に善き信仰と熱誠なる精神を以て、自己の完成にひたすら力を注ぎつゝある今村愛子の名はしらぬ人はないくらゐだとの話である。

小說としては少しかたすぎるかも知れないが、高潔なる婦人其人の辭と、會堂の模樣とが一致して、人に一種の信念を與へる（選者評）

人

選外　越後　金帆女史



○新夫婦

陸前仙臺市肴町百一　工藤かめ女

天晴なる戰功を立てゝ、金鵄勲章を胸間に閃かし、目出度凱旋した北山中尉は、身躰が十あつても足らぬ程、そちからも、こちからも、招待を受けた。殊に村田子爵は屢北山父子を招いては盛んに宴を開いた。その度毎愛娘の露子をその席に侍らせる。

その數日以前、中尉の父は、折〳〵、子爵邸に見えた。その最後の日、父は、喜悦に絶えぬ顏色で門を出た。今日も今日とて盛大なる宴會は子爵邸に開かれた、例に依て北山父子は主なる客である、然るに、中尉の父は、今日は見合はせるといつて、只異樣の笑ひをもらすのみである、中尉は不思議に思つ

たが別に氣にも止めず、それならばと單身子爵の邸に赴いた。

＊　＊　＊　＊　＊

中尉は頗る醉つた。正氣を失ふ迄醉つた。而して正氣に返つて四方を見れば、意外、あれほどの人は更に居ない、そればかりでない、身は、寢床に暖かく橫たはつて居た。三疊ばかりの小室の中に。

「やッお目ざめですか、」と子爵は、愉快さうに笑ひつゝ入つて來た「いやその儘にして居給へ、遠慮はいらんさ……時に北山君、君に賴みがあるが、どうだね、きいてくれんかね、」

漸く起き直つた中尉は一禮し「外ならぬ子爵のお賴みです、何なりともお承け致します、」「それはかたじけない、外でもないが孃を貰つてはくれんかね、」「えッお孃樣を……あの私が……」見る見る顏色は唐紅。

「あゝ不足でもあらうがきいて吳れ給へ、孃は君に頗る熱心なんだよ、ハヽヽヽ、」と大笑した。

「お冗談では困ります、」「いや眞實ぢや、現に、君の大變に醉つたのを見て、苦心してこの室に運んだのも、」

「あの、お孃樣で？」「あゝ左樣ぢや、」「これはこれは、」と頭をかく。

「て、孃の心中を哀れと思つたら、いやでもあらうがまげてきいて吳れ給へ、」と熱心に子爵。

外の方から「妾もお願ひ申します、」と入つて來たのは子爵夫人である。

「これ奧もこの通りぢや、」

進退こゝに窮まつて中尉は餘儀なく承知した。「ですが一應父にも相談して……、」皆まで言はせず、「おつと、君の父上はもう御承知て、」「えッ父は承知？」中尉は驚くより外はなかつた。

＊　＊　＊

明くれば、三十九年の正月元旦、二人は夢のやうである「郵便が參りまして御座います、」と下女のお竹は手に持つ葉書を、新夫に渡した。見れば發信人は戰地て知己になつた某大尉。「オー珍らしい、」と引き替せば「謹賀新年」を冒頭に「併せて新夫婦の健康を祈る、」とかいてあつた。

露子は顏を眞赤にして「あらッ新夫婦だなんて厭なことねえ、どこからきいたのでせう、あら貴郞が報らせたの、まあ、驚いたことねえホヽヽヽ、」

新婦は嬉しき笑ひもらした。

輕快飄逸、讀むに心持がよい、新年早々此篇を讀者に捧げた作者の

秀逸

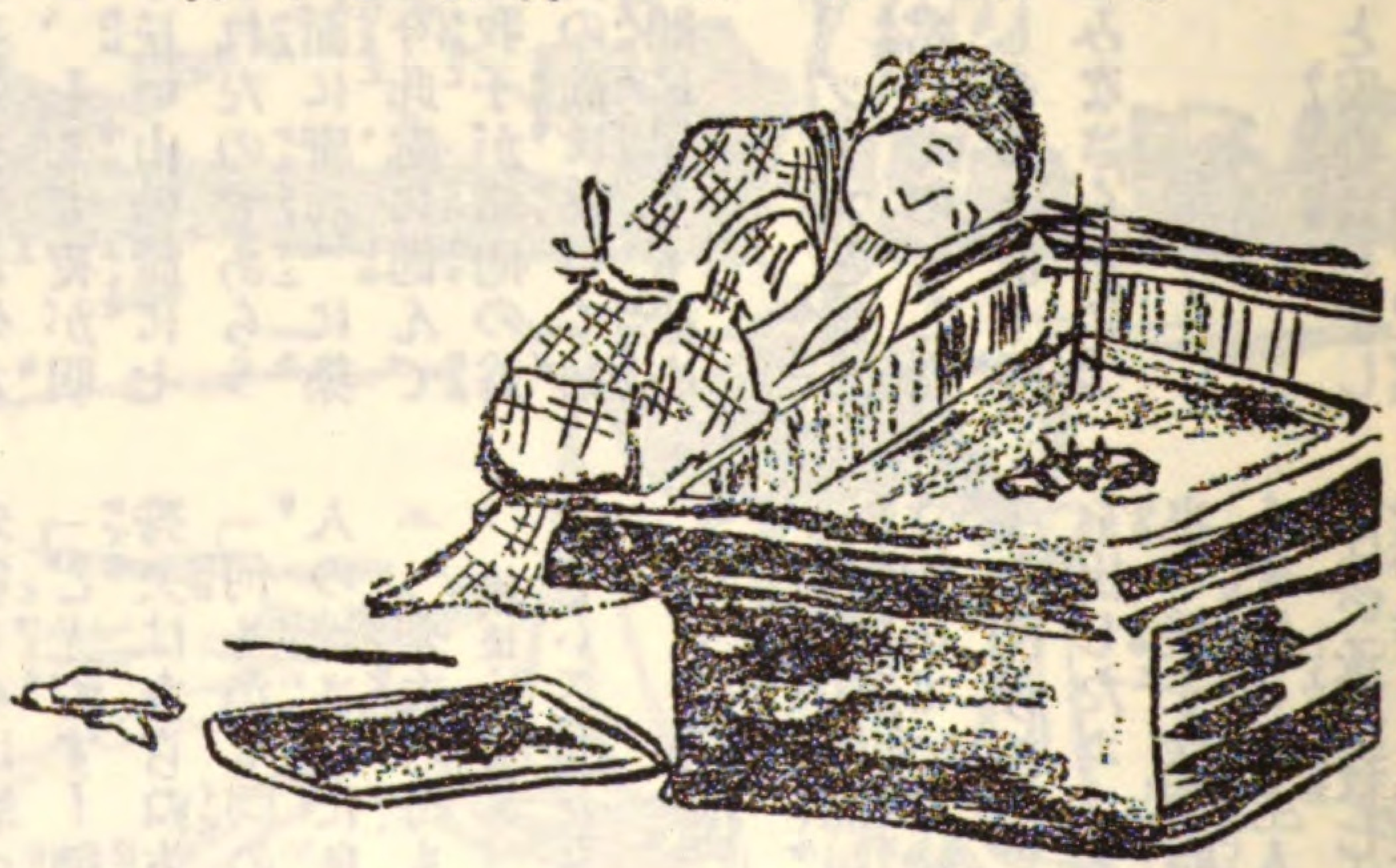
○戰後

能登高森　一子

「不見不知の者が突然にお訪ひ申しては、何だとも思ひましたが恁麼譯で暫時でも早う、聽たかつたので！。」

手織木綿の袢天を着た六十斗りの老婆が斯う言ふて、切に手を採んで居る。時計は今三ッ打つた。

「イエ少とも其樣な事は！では今悴を呼で參りますから」と夫人千惠子は徐に立去つた、四十五六歳で有らう。程なく母と共に現れたのは、一週間前に芽出度凱旋した步兵少尉武山秀夫、即ち此家の長男である。此立派な青年を見上げた老婆の眼は何故か濕んでいた。



選外　麗岡　高松ひで代

「あ、是は〳〵若旦那樣で被在いますか……誠にはや長々御苦勞樣でござんした。夫でも負傷一ッ成されいで、眞實にお芽出たうご座んすわ。」

「はァ有難う……而して只今母から聞きますと貴君が新井君のお母さんだそうて、——遂々戰死なさつて實に御氣の毒で堪らないのです。併し國の爲に亡くなられたのですから何の位家の名譽か知れませんよ。」

「まア御勿躰ない皆樣が名譽の戰死名譽の戰死と被仰つて下さるんですから私や最う泣かねいでござんす。……あの若旦那樣？内の春治は何うして死んだで御坐んすか、夫が心配で心配で……其こた死んだ時は同隊に居た人からも手紙が參りましたが、私や讀るじやなし人樣に見て頂いたのですが鐵砲に當つて戰死したと斗りて瞭然した事は解らないのでございます。夫れて先刻奥樣にもお咄申た通り昨日他人に貴方樣が、春治達の隊長だと聞いたので此樣失禮

致しましたので。」
「はア春治さんですか」と、秀夫は腕を組んだ。
あゝ某月某日の闇の晩であつた。上等兵新井春治外六名の兵士が斥候の爲に出隊儘歸隊ない、そこで夜が明けると數名の兵が探しに出た、所が小丘い山の麓に七人の死骸が有つた。敵の爲に刺し殺されたのであらう七名共數ヶ所に劍の痕があつて傍は一面に唐紅に染められてあつた。秀夫は其時の有樣を今此處に偲んで身を顫わしたのである。‖今が今迄我子が鐵砲の爲に死んだのだと信じている、老母を面の前に飾つて如何して事實を謂はれ樣。秀夫は此一瞬間に早くも決心したので
「ハイ夫は實に立派な死に振りでした、ヅドンと飛んて來た彈丸が意外にも春治さんの胸に當つたのでしたそれが急所だつたと見えて、萬歲と仰しやると直ぐ呼吸が絶えたのです、だから少しも苦しみなさらずに。夫を譽めない者は有ませんてした。」
老婆の顔はだん〱低くなつた、
「あ、左樣で御座いますか、是てやッと安心致しました親仁殿にも話したら甚麽に喜ぶことやら。此樣氣强いことを申しますが、其處が女の愚痴で人樣の無事に凱旋になつたのを見ると、泣かずに置かうと思ふても獨り泪が出るんて……。」
老婆も今は堪へ兼ねて熱い涕をはら〱と落した。
「ご尤です！御察し申しますよ」と、
秀夫はあらぬ方に顔をそむけた。
「何もかも國の爲だと思ふて諦めなさいナ而して今一人の娘さんに良いお婿さんを貰ふのが何よりてすわネエ」秀夫の母も共に慰さめるのであつた。

戰後にはあるべき事情、此處にも人情の反覆もあれば、涙もある、書いて枯淡にならなかつたのは蓋し作者の手腕(選者評)

◎健氣

岡田まさ子

「今日は洗濯屋でお勘定を」臺所で朝食の後片付けに立働いていた綾子肉色の襷十字に手をふきつゝ間の障子を開けて「あの洗濯屋さん？」「毎度有難う」と勘定書を出したカフス三組、カラ四本シート三枚〆四十八錢也、綾子は暫時瞶めていたが言ひ難くそうに「小僧さん今ね、御主人がいないから明日來てはくれまいか」「はい承知致しました左樣なら」とすたすた歸つて行く後見送つて綾子はホッと溜息「ほんに良人は、これで二晩お歸りなさらないが何處へお出でだらうお、今日

は晦日ね、いやだわ、又お米屋さんが來るでしよう」綾子は今年十九歳圓顔の眼の邊に愛嬌がある瓦斯大縞の綿入メリンスの晝夜帶髮は流行の庇髮、黄のリボンの映りよく、良人は佐藤繁、某銀行の書記、俗に豪傑肌で理と思へば重役でも誰でも遣り込める僻があつて行内で兎角首尾が惡い其の爲めか近頃酒を過し熟醉して歸つては綾子を困らせるのであつた

＊　＊　＊

冬の日の暮れ易く朝からどんよりと曇つて寒い風がピユウ〳〵、夜になつたら雪でも降りさうな空模樣、綾子は今日こそ良人が歸るだろうから何か暖かい者でも

選外　肥前平戸　すみれ



と夕食の仕度をして待つているのである、まだ四時だのに内は暗い、もうこんなに暗いのかと簞笥の上の洋燈を下し火を點けたキラ々々した強い光は暗かつた室内に投げられた、おゝ羞明いこと、だがお遲いのねと呟きながら二階に上ろうとした時、玄關にけたゝましい物音同時に「おい綾何をして居るのだ早く出て來い」「お歸り遊ばせ、今日はたいさうお遲いのでしたね」「ゲーフお遲くつて惡いのか、おい惡いのか」帽子は横に襟飾を何處にか落したと見え付けていないヅボンに土の塊が付いている、室に入るかいなや大の字態、「フーおい綾、水だ水

だお前は酒飲の妻にも似合はぬ氣が利かぬな」綾子はおど〳〵して「貴郎お召でもお着換なすつておやすみなさいましとコップに水を入れて置いた「何だ糞、そんな不法な事は吾輩聞けんのだ馬鹿」、誰をか罵倒して居るらしい、「もし何か御心配でも」と危くも問ふた「綾、お前だつて不法の事を言はれゝば怒るだらー」「おほゝ、さうですは」綾子の心中は笑ふ處ではないが良人の機嫌を害はない樣に只管務めるのであつた繁は綾子を深く愛しているが職務上の不愉快は遂に暴飲暴食端は綾子と知らず苛める事になるが其の樣な時は猶更勞はり宥め些も厭はないのである靜かの室に刻む時計は十時を打つた繁は夢の人綾子は繁を服のまゝに夜着を輕く掛け自分も床についた聞ゆる鐘も身にしみて外には風が吹き荒むでいる綾子は熟々越し方行く末を考えると心細く今の良人の有樣では不義理の借財も出來兼まじく俸給も費したのかそれも解らずそゞろ悲しく思はず一雫は溢れ落ちたのであるが何をか心に決したらしく幽かに笑に湛へて安らかに眠つた。」

＊　＊　＊

綾子は翌日良人が止めたが強いて電話交換手に志願したそれは良人に樂をさせ又活計の補助としたいと云ふの外は何の望もなかつたてある繁は初こそ不平であつたが終には自身の腑甲斐ないのを羞じ又綾子の心がけに感じ大いに職務に勉めるやうになつた。

昔なら苦界に身を沈める處、今は電話交換手、時勢の變遷もあるが、又職業と云ふ事の大切な點が一篇の小說にもほのめかされるやうになつた(選者評)

○遺族

横濱　寺田光子

一

「花野さん貴孃のお父樣何時御凱旋遊すの？」私は運動場の櫻の木の下で洋服の花野さんに聞きました。

「お父樣は多分二月よ」と活潑にお答へなさる。「左樣」と私は云ひましたが何だか急に沈んでしまいました。花野さんは元氣よく又ブランコに乘つて騷いて入らつしやる。お父樣は何故戰死なすつたんだらう、そりや御國の爲には違ひないけれど皆樣のお父樣はお目出度凱旋なさるのにあゝお父樣ばかり考へまい思ふまいとしても矢張思ひ出す。

「道子さん」不意に肩をたゝかれて驚いてふり向くと同じ級の三の宮さん。

「貴孃幾度呼んでも御返事なさらないから何うかなすつたのかと思つてよ。」

「左樣？」私はこれきり言葉が出ないで無理に笑顔を作つて櫻の木を離れました。

私は何故悲う考へ込んでしまふのでせう、強いて自分て自分の心を慰めるもの〻何うしても先のやうに夢中で遊ぶやうな氣になれなくなつてしまいました。

「あなた何うかなすつて？」─藤林先生が先頃お聞きなすつたけれど私はい〻えとばかり只もうお父樣の事ばかり思つて人に問はれると猶胸がはりさけさう、此頃のやうに凱旋々々の聲を聞くと悲しくて、お母樣の御心を思へば猶更悲しい。私のたよる方は母樣お一人叔父樣叔母樣はあつても他所の方この廣い天地に只戀しいのは母樣お一人になつてしまひました。

「まだ道子がやつと十二才でございますから」、母樣が斯う仰しやるのも私を思ふお心ばかり、忝い母樣私も早く大きくなつて母樣の御安心になるやうにしたい。私はこんな事考へて歷史の御話も例のやうに面白くなく、何んなにか母樣がお淋しいだろと飛ぶやうに家へ歸つてしまいました。

選外　熊本　平岡としこ



二

今朝は元氣よく床を離れて日曜日なので母樣と二人谷中の墓地へと急ぎました。此所は去年旅順の戰に戰死なすつたお父樣の眠つて入らつしやる所陸軍騎兵少佐中西道義と新しい墓標は私のお父樣なのです、私はお父樣の道の字を頂いて道子とつけましたので。

お母樣は一心に拜んで入らつしやいましたがお眼が霑んで居らしつた、私はお父樣と口の中で呼びながら手を合せました。

お詣りがすんで墓地をぬけやうとすると、上野の森の方で萬歲とひびく聲續いて起る樂隊の音。

ア、母樣今日も凱旋の人があるのですねー私は又急に悲しくなつて涙がハラ／＼と紫の被布の袂に落ちたのでした。

昨日今日の凱旋騷の間に、戰死者に同情すると云ふ事は、少し心あるものなら、誰しも同感であらう。小說風に書いた處で別に奇拔な事柄でもないが、本篇の作者は、能く其實際を細やかに寫して居る、能文(選者評)

○友のまごゝろ

埼玉　中村白露

上

「ほんとにかた子さん貴女どーなさつたの」心配そーに友の顏をみあげたのはたせ子といふ可愛らしい十三四の少女。學校の歸りとみえて紫の包を抱へて居る。かた子といふのは十五六でこれも美しい少女である。今たせ子は親しい友のかた子が今日に限つて何となう沈んだ顏容してゐるのでたづねてみたので。「いゝえどーも」とかた子は淋しく笑つた。「あら〳〵うそ……必とどーかなさつてるのだわ、あの若しか私がお氣に障つた事でも……」「あらそんな事ないわ」とかた子は急いでさへぎつた。「それなら話して下さいな、私今迄貴女に何も隱した事ないわ、だから眞に妹と思つて下さるなら話して下さい、それでないと私心配で〳〵堪りませんからね……かた子さん」と熱心に聞いたかた子は菫色の半巾で口の邊を掩ひながらさも感謝に堪へぬよーにうつむいた、頭のリボンは微かにゆらめいて居る。「たせ子さん」と突然かた子は顏あげて「あのそれ程迄に私を思つて下さるのは貴女許りです、だからお話し申たいのですけれど若し私が話して御心配かけてはすみませんから……今に自然とおわかりなさいませうどーぞ聞かないで下さい」ときつぱり言つた。

下

彼は一日逢はないと一年も二年も逢はないよーに慕へる親友かた子の今日缺席したので何となく不愉快で授業中も何をしたやら夢中であつた。殊に昨日かた子の言葉が氣になつて獨り小さい胸に思ひ惱んで居るのだ。「一寸たせ子さんお待ちなさい」と馳けてくるのはすま子といふ同級生。「すま子さん何ですか」とたせ子は物憂げに立ち止つた。息はづませてすま子は「今日は一人でつまらないでしよう」と意味ありげに笑つた。「ナゼ？」「ナゼでもかた子さんが休んで……けれどかた子さんはもー學校へは來られませんね」「アラどーして」たせ子は思はず目をみはつた。「どーしてッて、あなた知つてるくせに」「全く知らないのよ」「ぢやあ話しますが貴女心配しては厭ですよ、あのかた子さんのお宅はね借金や何かゝあつて學校へは出されないのです

つて、そしてあの方は東京とやらへ奉公に行くのてすつてよ、かた子さんは學校ては級長樣だけれどお金がなくつてはだめてすね—」「まあほんと—」とたせ子は我が耳の聞き誤りてはないかと思ふ位であつた。そしてすま子が行たのも知らなかつた。

＊　＊　＊

たせ子は夜通し小さい胸を痛めて考續けた。そして父母の前で自分は是から衣服も櫛も買つて貰はないから其の代り親友のかた子を引き取つて世話して呉る樣と只管賴んだ。もとよりあり餘る程の大盡てあるし且つ最愛の娘の眞情をいれ且つかた子の優しい平生の行ひに感じてすぐ承知したあゝたせ子の嬉しさはどんなてあつたろー。早くかた子さんと



選外　紀伊　むらさき

共に樂しく勉强したいと色々未來の事など想つて獨り待ち焦れてゐた。かた子は此の優しい親友の眞情をきいたら何といふて謝するてあろー。

趣向もなさなげな處があり、文章もなさなげな處がある、而して其幼な氣な點て之を選に入れた。（選者評）

○同情

松江　さゝがに姫

『ソレじやあの幸子さんは故郷の方へ歸ると云つて出發なかつたのだな!?』拱ぬいた腕を力なげに解き乍ら愢う云つのは宿屋の主人善助てある。

『ア、彼方で良雄さんが床に就いたのを知らさぬ位じやから、今頃歸るなんつたかつて彼方の繼母さんが

承知しさうにないもの、密つと歸つて逢う積りだつたのよ……幾ら彼娘が憎いつて、葉書なんかて他人の事の如に……。』と妻は下唇頭を嚙み絞めた。

『全くよ！』と善助は點頭いて『電報て寄越しや歸らなくても宜いのだ。然していつあアノ繼母が愆う考へやがつたと思ふのよ、良雄の床に就いたを幸ひ、碌な世話も仕ねえで放つときや、一人て食ふ事も出來ねえから死んて仕舞ふだらう、すると夫れあの……勘太郎とか云ふ野郎と夫婦にして左團扇つてえ寸法から、病氣の事も知らせねえのだ！』

幸子＝郷は松江である。其の幼くて母を失つた後は繼母が迫害の笞に堪へて、許嫁の從兄＝良雄を頼りに、父へ竊の別れを告げて上京したのは十五の春てあつたが、不幸二星霜を經て再び嵐に吹かれた。頼む良雄が不治の病を得て郷に餘命を送るべく都を辭したので……當時幸子は泣いた、然し身に重大な任務＝哀れなる未來の夫を慰むべき＝のある事を知つて起つた。善助方に身を寄せたのは此時である。爾來螢雪の苦を積んで將に業を了らうとする今、良雄の倒れしを友人に報じられて、此日境に向ふ德神丸に乘るべく昨夜敦賀に向けて東京を發つたのてある。不遇は何處迄幸子を趁ふてあらう、今朝になつて良雄の死報を得た。

善助は愆う過越方の事を偲ぶのである。

『然しあんな溫和しい娘だから、死んだと聞いて……若しか心得違ひを……ても可哀さうだ。』

『……妾は子の如に可愛がつたが……。』

又腕を組んだ善助、ほつと太息をついた妻、倶に無言の儘眼を閉ぢた。

怪かつた空は早晩黝ずんて風さへ烈しく吹き變つた。入日の零れが物凄う雲に映る、と心付いた善助、

『コイツア仕舞つた、船が危ぶねえ！』

『えゝつ……。』

幾多の落魄に逢ふた幸子が（業を了ると良雄さんを助けて樂しく暮させよう）と只之れ計りに忍んだ苦みを、若しか船と共に……と思へば犇々と迫る同情の念、堰く泪は胸に沸騰つのである。

『まあ可哀さうに……。』と妻は低く叫んて、潸然と泣き頽れるのであつた。

＊　＊　＊　＊　＊

德神丸は怎うしたのか其後新聞廣告欄に跡を絕つた。善助の家て盛な法會があつたと云ふ。

話の筋は餘程混雜して居るのに、是だけに書き上げたのは兎に角趣

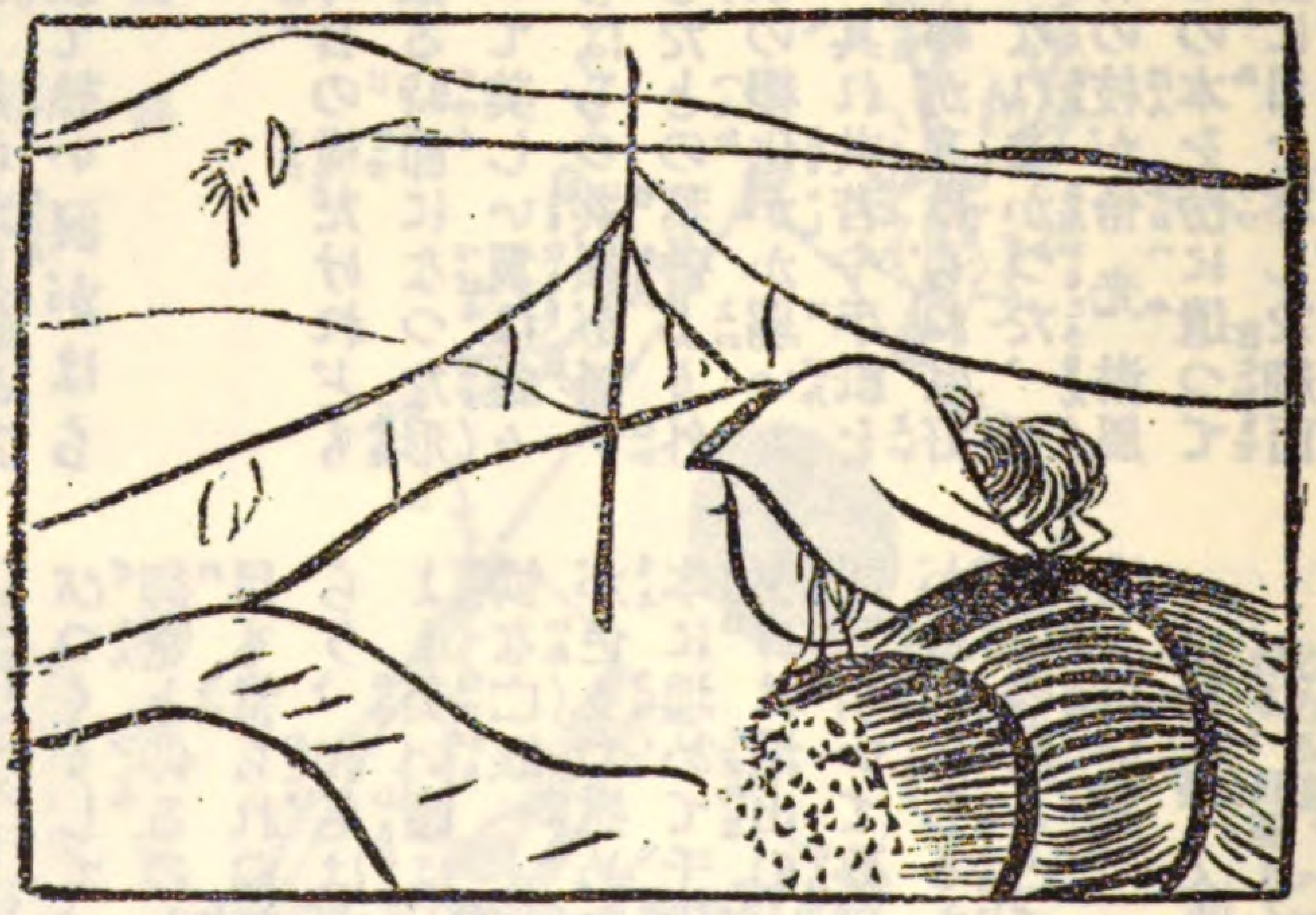
向を凝らしたと云ふ事が分る（選者評）

○白鳩

上

廣島　平田加津子

どうしても優さんは今日お出發ちなさるのだあゝ詰らないとほつと吐息をつきながら昨日優さんが遺身に下すつた「千代」と云ふ愛らしい雛鳩に餌をやりながら味氣なさ悲さ胸一杯になつて又しても涙がせき來る樣、「もう是限會ひますまいねいくらでも名殘は渇きませんから」とお互に立派に云つたけれど最一度染々とお話がしたくて矢もたまらぬ樣鳩を抱た儘優さんのお家の前迄夢中に走つた、玄關口から「御免下さいまし」と訪なつたけれど深閑として人の出て來る氣合もない、きまり惡いながら少し聲高に云つたけれど矢張答がない、多分奥で御仕度が急しいのだらう逢うて手間どると亦後で優さんが繼母さんにいじめられるだらうそれては眞當に氣の毒なと思ひ返して靜に門の外に出たけれど何となく殘り惜くてせめて御姿なりと見樣と裏へ廻つた、まばらに結た生垣から黄菊白菊が咲き溢て赤い羽の弱々しい蜻蛉が花から花へ囁く樣、私はそこへ立止つた恰度前は離家て人の氣配トンと煙草盆をはたく音と共に「ホヽヽ」と高い笑ひ聲、優さんの繼母樣のお聲、「ハア成程優子さんを其の伯父さんの處へ貸座敷……―是聲はまさしく赤樫と云ふ卅位のいつも髮をチックで別けて目鏡越に人の顔を見る優さんも私も大嫌な男、しきりにひさ〳〵と話聲、私は何だか人の秘密を探る樣で心咎めがする儘優さんに逢事はあきらめて立去らうとする途端「優子々々お銚子のお更りだよ」と疳高な聲私はハッと思つて立止つた、今迄雲に隱れた日が急に明るくなると障子を開く音がした、靜な足取て來られたのは優さんだらう私はのび上る樣にしたけ



選外　阿波　瀧山ふじ子

れど帶の端がチラリと見える計「オヤ未髮も結ずかへセッセとおしな阿父樣に似て無久地無だよ」と例の罵倒、優さんは彼方へ立去る樣子、あゝ是れが見納めだと思ふとうら悲い感情が潮の樣に滿て熱い涙がはら〳〵と頰へ

下

懷しい優さんと泣いて別れたのは昨日の樣だけれどもう年は變つてそよ吹春風に紅梅が散る時節になつた形見に貰つた「千代」は大層大きくなつて美しい翼は益々白くなりまさつたけれど優さんからはちつ共頼が無い只御立發から一週間後基隆へ安着したとの葉書より外は一封の文さへ來ない、若しや氣候の變化がか弱いお身に障つて御病氣なのであらうか、其れ共若や手紙を認められぬ事情が……、あゝそんな事がなければ好と、種々に思ひ亂れて片時も胸をはなれなかつた、三時頃の暖い日光が丸窓にさして吳竹の枝が恰光淋風に寫つて居る机に寄た私は讀みさしの本を傍に遣つて恰度前の寫眞夾にある優さんのお姿に目を移した細面の色の飽く迄白い、パッチリと涼しい目に愁を帶びて優いし撫肩の邊何となくうら淋そう戀しさ懷しさの情が泉の樣に湧て來て魂も奪れたかの樣に見えた、すると後の方で「美代さん〳〵」とお呼の聲、ハッと夢から覺たように振向くと、母樣がおせきなすつた御樣子で「美代さん千代が死でしまつたよ？」、私は餘りの事にびつくりして「エヽ全くですか」ア、裏の椽側へ出て御覽と仰るのを聽流しながら飛ぶ樣に行つて見ると、目も當られぬ無慘の樣、犬か猫かの歯にかゝつたのだらう、和毛は血汐に染み雪を欺く翼はしほれ黑燿石より美い瞳はとざして……私は抱上た儘雨なす涙か可憐な亡骸へ！何時迄々々と放せなかつたのを、母樣が色々お慰めなさるので漸々氣をとり直して紅梅の根本に埋めて千代の墓と記した墓標を立てた

夕日は城山の一本松に落ちて、入相の鐘が長く〳〵餘韻を引いて夢の樣にうすれ行く、風も無いのに梢の花が墓標にちるあゝ千代が無慘の死優さんのお身の上に禍のある占てはあるまいか、胸の邊に手を置いた儘空を仰いだ。

白鳩と優さんとの取合せは至極やさしく友情も美はしくうつされて居る、只優さんが何の爲に臺灣まで行くやうな運命になつたのであらうか、今少し詳しく知りたいやうである（選者評）

編輯局選　はがき文

特別第二賞

○姉さん

栃木　菊香

牛や馬にふまれた草も春になると又美くしい花が咲くけれども姉樣は何うして前のやうに美くしくならないのであらう春が來ても秋が來てもいつも〳〵青いお顏をして泣いて居らつしやる

一片のハガキ文、一部の小說にまさる

特別第三賞

○黄菊

金澤市下百夕女木町　鷹野豊子

朝の祈禱がすむと、必ず三十分許りは、日課の樣に、庭の內を散步します、そうして、前栽にある、金孔雀と云ふ黄菊の、未だかたい〳〵蕾に、そつと、温かき息氣を吹きかける。

之ある哉、ハガキ文の詩趣、寫して選者の手函に秘めむ



選外

韓國　野口辰子

天

○愛情

神奈川都筑郡新田村新羽　中村三重子

我隣村に百〇四歳の老媼あり、偶々他家より大福牡丹餅杯、媼にとて貰ふ、柔き內にと家人の進むるを媼は、「私や能いから、淸に喫べさせておくれ」と。淸と言う人は、丁髷に結つた爺て、今年六十八になる媼の孫

實語とあり、新年のはがき文に此一章を得たるは選者も讀者もめでたし〳〵

地

○小間使　本所横網一ノ十七　井口清子

今日は奥樣お出かけでお風呂が二時間、お髮上げ二時間、お召換へ御手傳ひ申て二時間、姿見の前で三十分やうやう玄關へ、私は式臺へ手をつかへてお出まし遊ばせ、と頭を上げてほつと太息。

新夫人の側面觀

(人)

○日記の一節　豐後臼杵町唐人町堀川　平山良子

十月一日晴、夜小供が表で遊んで居た。『こヽは何と云ふ道な、天神樣の通り道、一度通して下さんせ、お札がなければ通られぬ、お札は納めて參ります、通りやんせ〳〵』こヽは此村で長者の坪先、よく晴れた晩だ。

見るやう聞くやう

秀逸

○祖父母　秋田　松田せい子

祖父樣は今年で九十九、祖母樣は九十におなりだが、昨年の養老式で戴いた鳩の杖はお二人共忘れて出るのよ。そして今度雄物川の開橋式へは、お父樣お母樣兄樣嫁樣などとごいッしよに渡り初めにお出でだとよ。

一族の光榮、めでたしともめでたし

○婚禮　王子　秋津すみれ

今日は姉樣が御嫁に行くと云ので、朝から御化粧、夫に色な人が、御目出度御座り升ってにこ〳〵笑て來るのに乳母お丈は御辛棒なさいって、泣ながら云て居る

喜ぶも道理泣くも道理

○籾ずり　大阪　神田なつ子

冷たい夜の風は戸の隙間から籾ずりの納屋に吹き入ると破れた障子の紙はビーと振ふ、薄暗いランプの灯は風にはためいて馬の眼にきら〳〵寫つて居る、私しの家はいつもこんな具合で秋の夜長も更けて仕舞ふ

馬の眼は意外

○お月樣　富山　小室のぶ

お庭の柿が赤くなる頃、いつも〳〵三人お椽へ出て、お月樣を拜みました、今年は柿はもうとうから赤くなつたけれども、お母樣と、六疊で、いつも〳〵お父樣のおうはさばつかり

古來征戰幾人歸、一時廻首看月中

○元旦　鳥取　上山千重子

初鴉の一聲にすはと妻戸押せば、ほの〴〵と白み行く東の空、其處新しき希望と生命とが滿て居る。私は先づ去年を殘す西の闇に對して、過去の怠惰を懺悔し、若水に心を淸めて、扨て新生活に入るべく跪いた。

老練

○無風流　埼玉　中村白露

中庭の楓の麗はしいのを都の姉に送らうと思ふて、學校から歸つてみるは木はカラ坊主!!オャと思つて居と下女が得意げに飛んできて「お孃樣この楓は掃く度に大層落ちてますから今日は皆一度に落して了ひました」と

林間酒を暖むる奴と同日の談にあらず

○秋日和　麹町　加藤豐子

砂地に引揚げてある舟や干てなる濡帆から秋陽炎が立つて明神岬信號所の旗がはつきりと見える風なく波なく暴の翌日の浦は實に長閑—が昨日の暴て思ひ男の行衛不明になつて氣の狂つた女があるとの噂である。

嘘のやう



選外　麹町　加藤豐子

○秋の收穫　美濃　溝口喜子

今日はお天氣がよい、お父樣と兄さまとは野菜の取入、私と弟は裏の柿ちぎり、母樣はこれをお揃へなさいます。あゝ樂しい收穫の一日。

田園の趣味は幾度聞いても飽かず

○名譽　靑森　高屋こま子

今日ね、先生が仰しやつたの、あのーね、滿ちやんのお家ではね、お父さんが戰て死んだから、お母さんもね、妾もね、それからね、竹やも皆な名譽だつて、ね、母さん名譽つてなんのこと、おつかさんしばしお言葉が無かつた

寥々たる一個の諷刺、骨に徹す

○電話　京都 井上ゆたか子

姉さんよい事、云つて上げましうと弟はおもちやの電話機を手わたして自らは離室へいつて、あゝもし／＼あなた姉さんですか、はあ、あの僕の好きな鐵砲與げますから姉さんの大切の（人形）僕に頂戴よ左樣なら

あなた姉さんですか、おもしろい

○たそがれ　甲府 野ばら

枯れかゝつた、芝生の上に蝶子さんと、編物をしてますと、蝶子さんはア痛ッて、何うした事と尋ねると、しびれが切れてと御顔をしかめてのお答、立ちませうと云て、芝生に立ば、櫛形のお月樣が見ていらつしやる。

歩けないで又座る

○佐渡が島　佐世保 汎愛子

唄にのみきゝし佐渡が島に、妾の父母は居らるゝとのこと。寐もの語の黄金の指環は、何日戴けるのだろう。花は幾度も散つて、今年も秋の鐘をきくのに、それでも父母はかへり來まさぬのである。

來いと言ふたとて――

○嬉しき事　能登 池野秋花女史

誰しもさうでせうが妾は活版になッて居る自分の作物に對すると、嬉れしくッて／＼て自と微笑みが頰に登るのです。恐らく子ができても斯樣に可愛くなからうと思ひます。

然り、然らず

○母の心　信濃 千鳥

なづかしや故郷のお母さんからの御手紙、急いで開いて見るとうるはしきお水莖のあと妾に勉强えお勤めのお言葉、讀み了つてバッサリ、見ると三圓の爲替券、よく／＼お手紙を見ると終りにこれはお父さまに内證でと、

子を見ると親に如かず

○一年まへ　きよ子

滾々と溢れ入りし濁水、はや名殘なく退きしと云ふものゝ、見る限り草も花も、弟が愛せし泉水の金魚も皆流れ失せて、高低のある庭の面を、力なき夕日の淋しげに照したるは去年の今頃であつた。

洪水後記

○父の教訓　稲生村 森田喜代子

昨日の雪に破屋の屋根は玉殿の樣、庭の女松は葉末に光る玉を持て居る樣思ず見とれて居ると父は「花と咲き紅葉と散る世の樣を競はぬ松の操ゆかしき」と云歌を示て今見る通り女子等は總て此心をと意味有げに申された。

歌の月並調なるを笑ふ勿れ、題の幸福は此父あればこそ

○いやなこと　京都 松田たれ子

學校で算術がちがつたのと、一番て進級して、先生のヒイキだと恨まれたのと、お朋友の芳ちやんのなくなられたのと、病氣で學校を退校したのと、そしてあの‥‥、お嫁を進められたのとか妾一番いやよ、

還外

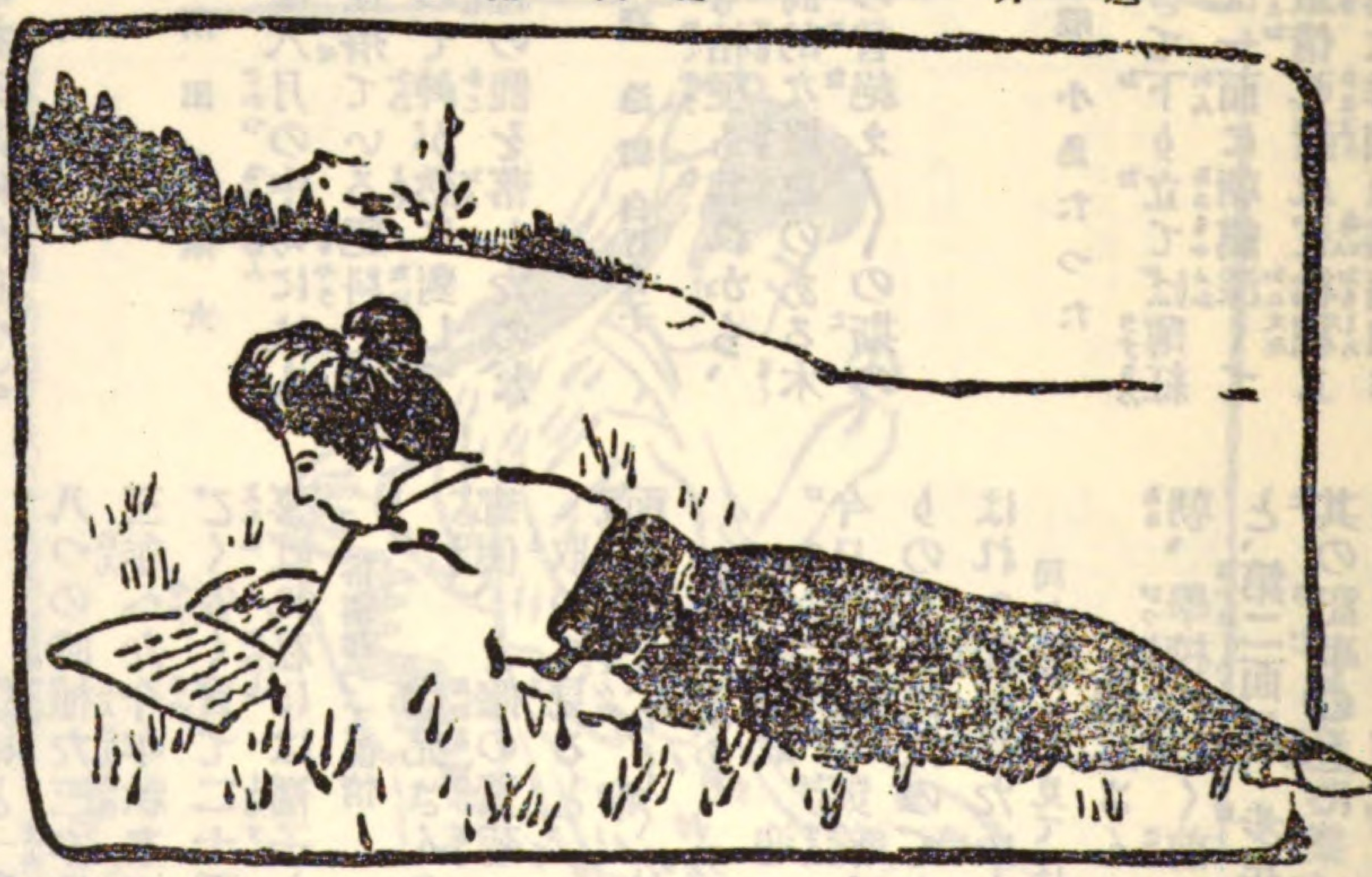
遣羽子やまだ戀知らぬ妹がふり　駿河 楳香女史

○ほんとの作人　上野 汀柳子

華やかな夕日を浴びながら、鍬を肩にして歸る農夫、フト妻の方を振り向いて、「この稻などが肥料が澤山はいつて居て、稻草の時は大へんよかつたが、ドーダ穗の惡いこと。して見れば己れらがマアほんとの作人だなア。」

野の豫言者

○掃除の半日　京都 かすみ子



姉さんと書齋を掃除すると、はたきを廻し過ぎて花活を落すやら、水入を倒すやら、障子を破るやら、果ては姉さんの丸髷へ反古の御幣が立つやら、妾の帶から山鳥の長々しい尾が引きづるやら、殆んど半日を笑ひ過しぬ。

これは驚いた、おてんばなお嬢樣

○雛箱　能登 加野こひ子

雨の晴間をまッて庭にてると、小川の眞中、波のまにまに箱が一ッ流れてくるので、すくひ取ッて見ると中には可愛いお雛樣が一杯、あゝ何處かの庭にあッたのが斯夕立に流されて來たのであろう。

流れ行け、天の河へ

○短冊　京橋 尾上百合子

虫干をと思ふて倉の奥から出して來た古葛籠。開けて見れば華麗な振袖が七重ね。袱布が一枚。皆な

妾が昔着た着物なので、牡丹摸樣のある振袖から小さな短册が一枚。

少や昔の

◎とうもろこし　本所　田中紫女

五月に蒔いた許りのとうもろこしは八月の中旬にはもう妾の丈位にはなつたが昨年よりは瘠ている肥料をやらない爲かそれとも種を蒔き過たので神が慾に對して怒つたのか許せよ妾が其時過つて種の籠を落したのだ

過ぎたるは及ばず

◎秋の日　能登　池野白百合子

馬鹿に大きい風だツた、朝顔も萩も桔梗も其れから、『蝴蝶の墓!』と記るされてある詩的な歷史のある木碑もみんな倒されてしまツた、虫の音絶え〳〵の斯の庭秋の日薄し。

雲白う飛ぶところ

◎秋曉　本郷　小島たつた

誰憚からぬ寢卷姿に裏の栞戸打開きて下り立てば薄紅葉せし路傍の雜木の三間程も彼方は一面に朝靄深くて掛渡せる蛛の絲に露おきし風情の最惜しけれど枯枝もて拂ひつ、落葉團栗等踏み鳴し朝霧に徘徊ふ其面白さ

人が居られねばこそ

◎柿と一家　伊豫　愛讀生

八つの時植た三本の西條柿五年して實が成たそして十三年へた今年秋なつたも〳〵枝は地につかへる位其でごく安く賣て二十五圓父母は年の暮のはらひは取たと喜ばれ私には襦子と縮緬の腹合帶を買つて下さる

俗情却つて風情

◎兄さんの繪葉書　下總　岩瀨わかな子

郵便、と離の黃菊へ挿して行つた繪葉書を、心せくまゝ取つて見ると、これは戰地の兄樣から來たので、紙面には「女らしくなさい」と、唯これだけ。

女らしき男あり、男らしき女あり

◎歡迎　神戸　鈴木桂

今日停車場で凱旋した人の中に後姿が兄樣とそツくりの方を見たのでもしや兄樣の御戰死が空言かとも思はれお顏が見たいと思ふ刹那汽車は出てしまツた

同じ服の人を見ては此感あらむ

◎兄さん　伊賀　木津君子

朝、學校へ行く前に、いつもの如く新聞を讀んで居ると、第一面に、步兵第〇〇聯隊第〇中隊凱旋! 思はず、其の記事の上に、二三滴、噫兄さんは、戰死なられなかツたならば。

躁の一人

○霰　　　　神戸　香浦女史

徒然草を繙きつゝ餘念もなき折柄俄かに外面騒かしく板ひさしのバチバチ音するまゝに窓の戸開き見ればこに如何に百萬の軍勢が彈出す丸も斯やとばかりの玉霰冬や來ぬらし

一結千鈞　　選

○慚愧　　　　牛込　小島濱子外

今月になつて、滿州からの第一の手紙が屆きました、滿洲では硯の氷をつき碎いて、認めるのだそうです。妾は又、音信を疎かに致しました、宥して下さい、妾の硯には一度も氷など見た事はありませんでしたのに。

大阪　津田馨子

安きに居て安きを知らず

○うれしき物　　　　群馬　秋風女子

さみだれの雲間の月葉つき十五夜の晴れたる人の兒のいとけな



さと思ふがいつかふみ作り歌よみたるなど

終りの一つが主眼

○妾の樂しみ　　　　安藤山吹

見聞少き、田舍住ひ、樂しみと云ふ事はなく、明け暮れ山と田のみ見て居るのですから、毎月女子文壇の着するを待ちかね、諸孃の御投書を拜見するのが何よりの樂しみです。

全く正直な處でせう

○ある朝　　　　新潟　まつ子

如何した機か火の盛におこつて居る所へ愚はす鐵瓶を轉倒してアッと云ふまに湯がこぼれ灰が皆吹き上つた其勢の凄ましかつたこと、腕白の弟が何所に見たかやあ地雷火の破裂萬歳と叫んだ

○古郷へお別れ　　　　松江　さゝがに姫

曾ては、亡妹が遊びの友であつた彼の地藏も、生え繁つた芒が次第に枯れたので、野分は強く吹き付けるやうになつた。殘りの芒が霜に枯れて仕舞ふ頃、妾は他郷の寒風に吹かれてあらう。

◎持心　宇都宮　蘭花女史

秋から冬に移る時は激變し易い、時なればよく〱自愛せよと日毎に來た母の書簡に、斯くも子を思ひ下さるかとつくづく感ずる折柄、またもや一片の文と共に甘さうな、甘露が一包屆へた。

◎試驗　名古屋　熊澤たか

問題を手に取りて見ればなか〱の難問題もある、平日の不勉强は一時にあらはれて、如何に考へるも解せられず。時間に猶豫なく退場の號鐘は鳴つた、遂に教師は答案を持ち去りぬ。嗚呼

◎松茸　橫濱　寺田光子

神戸の叔父樣から松茸が屆いた。いゝ匂ひがする。母樣は初物で珍らしいからと御近所へおつかひ物になさる、私はすぐお祖父樣の眠つて入らつしやる御佛前にそなへた。

◎犬　麹町　古谷きよ子

今日は日曜、御父樣と先日から御約束の菊見に出掛けやうと、門口まで來ますと、御うちの犬がきたない足で不意に飛ついて、折角の晴着をだいなしにされました。

◎奥樣のお聲　兵庫　柳田のぶ子

白山茶花がハラ〱と井戸の中へ散つたのでそつと覗き込むと水面に淡き有明の月が浮んでる「花は何をぐづ〱して居ます」と奥樣のお聲にハッと月を碎き汲み上げた水で急ぎ米を洗ふた

◎ちび筆　廣島　ゆかり

此寒さに破た單衣一枚着た小供の物貰が來たのよ筆を買ふ爲貯いた値のおあしを遣りましたら大層悦んで私を拜んでよ、次のお習字まではあれで勘忍しやう

◎暖かき日　桑名　無名子

今日の暖かい事はり物もをはれどうし弟は襁つなぎに、餘念なしおばア樣は緣側でつなぎをして入被る妹は母に裁縫をそはつている猫ばかりは暖かい光をあびていゝ心地そうにねていて

◎飯の中の石　愛知　顯子

すら〱と書き流したる詩文のいと面白う味ひ行かるゝ中、ガチリと齒障のして心地惡さは、用ひても可なる處を故に學者振りて歐語の傍訓したる語句、これを飯の中の石と誰やらが云ひし。

◎月前の菊　淺草　赤倉登美子

小夜ふけて窓のひまよりうち見やる庭の面はさながら月の光なり、實に光のみなりけり、あたり寂として色あらず影あらず、そが中にほのかにも匂へり白菊一輪

◎鶯の墓　八王子　某女

三年の間を吾が家の軒に妾を慰めてくれた鶯は今朝あへなくも死にました、其の小さい魂は天へ登つたので、ありましよー、私は其のむくろを歌反古に包んで庭の隅の白菊の根本へ埋めました、

◎在淸の兄さんへ　飛驒　松野みどり

恐ろしい戰爭もよう〱終んで、兄さんの凱旋も最早近い内ですッてれ早う歸ッて頂戴!、そら兄さんと二人で植へた御庭の菊れ、ちやうど今朝、霜にも惛れないで美しう咲き初めてよ!

◎新年　愛知　平野とし子

曉告ぐる鷄の聲に、はや夢破られ若水くむ車井の音、雀の聲聞ゆれど、吹く風の松竹を鳴さぬは、君が代の動かぬ兆にやといとめでたし。

◎歸省　武藏　小島とみ子

梢を鳴らし行く風、下駄に踏みくずさるゝ霜柱、岩根の細道を辮づたいに過ぎれば、我村も見え初むるに、『母樣ッー』と呼べば山彦は遠く反響する、鎭守、土橋、背戸の藏の白壁、あゝ其時、羽あらば一飛に——。

◎寫生　神戸　池田ぬい子

箕面山へ修學旅行の折あまり瀧が美しかつたので思はず見とれてゐたらはたから寫されたのも知らなかつた

◎人形の露子　石川　繁子

私の名は花子、人形の名は露子、そして夜はいつも温く接吻しつゝ抱いて寐るのですの、朝お日樣が東の山へお昇りになると、仕方なく露子の君に別れを告げて學校へ行くのである。

○松茸飯　寳紫女

「姉様一寸來て……澤山あつてよ」と妹が大きな聲して呼ぶので「何處?何處」と往つて見ますとしだの横に可愛らし松茸が五ッ六ッ。「姉様今晩美味しい御飯が喫べられるのね……」

○他郷の感　下谷　佐川貞子

是迄あまり有難いとは思はなかつた東京へ來てからと云ふもの、如何してか瞬間も兩親を忘れる事は出來ない許でなく如何しても此世に兩親程有難い者は無いと浸々考へました

○凱旋　甲斐　稲垣秀子

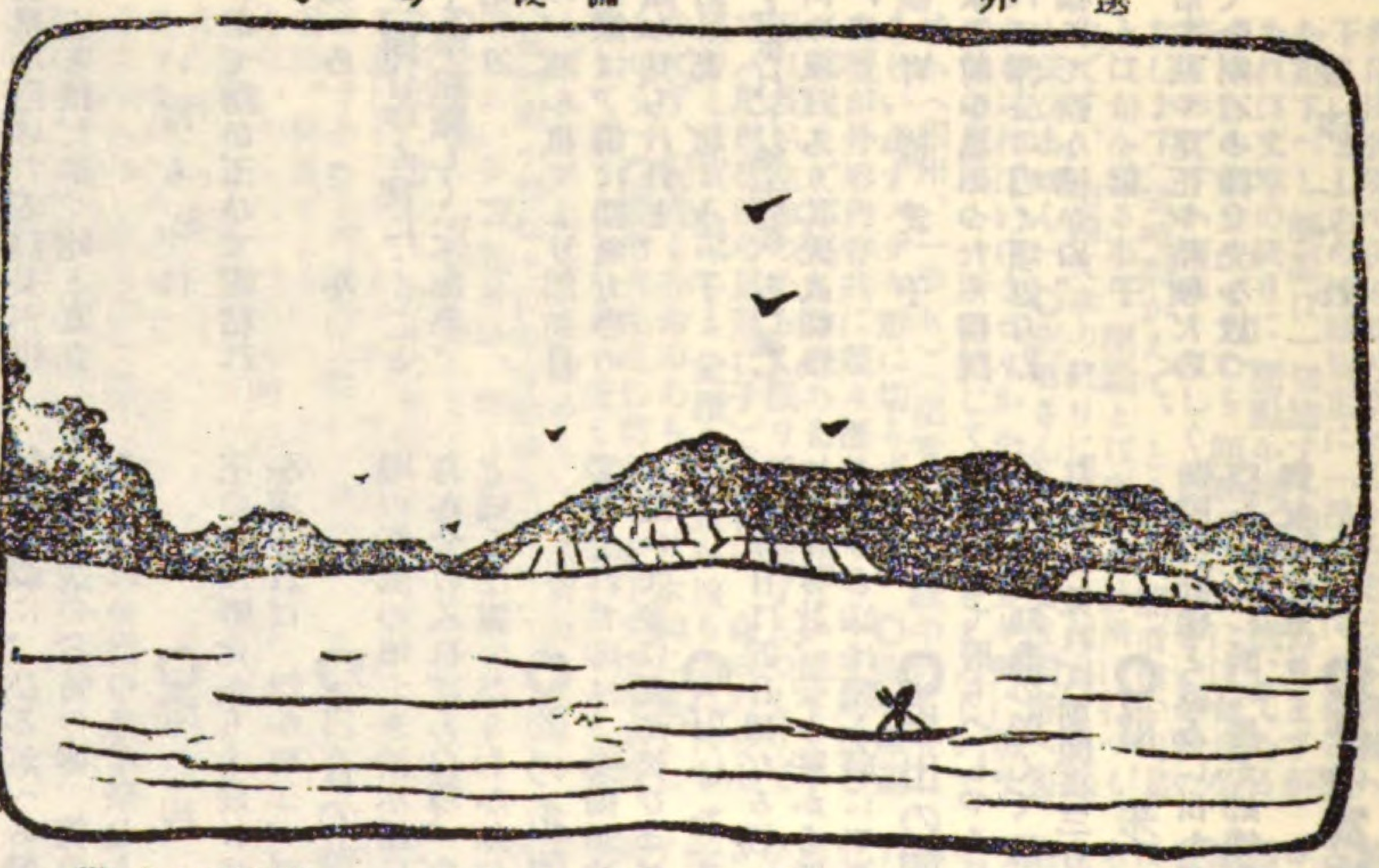
愈々講和に成つて私の父さんも戰地から昨日廣島に着いて明日一番列車で歸るゝ手紙が來ましたからうれしくつて母上に其の話しをして居りますと側に居た弟の武雄はふいと立つて庭の木の葉を掃き始めました

○かるた會　本郷　近野小枝子

お友達よりかるた會のお招きいそいそいて出かける時四五人兄様のお客、今夜は先日の敵打ち大將をにがす事は出來ないとおゆるしにならない、お友達には下女が戯かの使者、何うか明日であつたらと私につぶやいた」

○友のかたみ　廣島　佐々木定子

去年の秋黄泉へ赴かれた私の舊友萩子さんのかたみの此栞、今も大切に箱に納めてある思ひ出せばおーそーよ去年の今月今晩を以て懐しき萩子さんと別れたのである形みの栞取り出せば先づ先きにほろりと涙



○琴の絃　大和　ひとは子

父母のひざもとはなれて百里外の地に始めての旅行毎夜故郷忍ぶ音を通はせて引く月下の琴今宵もとてとり出し見ればあら琴の糸一筋眞中より切れて、はては故山に變りしともやといとゞ胸さわぐ

○トンボノハカ　備後　大本孝子

秋風渡る現なの夕、母様のお形見の白萩に凭り、消魂しき追憶に胸を抱いて立つと、突然ハタ〳〵と背戸裏に小い跫音が消えた、嗟見ると楓の下に砂を盛り、野菊を添へ、可憐にトンボノハカと書いた妹の罪なきに、妾は微笑した

○霜のあした　神戸　田中ふく

霜の朝、常よりとく起出ぬ見れば姉上は、何やら唱へつゝ冷水を浴び給ふ。あな姉さま、と驚き呼べば、「おゝ其方は病める身ぞ。疾く枕に身を休めてあれ」との姉がみ言葉。覺えず涙の溢れぬ。

○亡き友　千葉　田村瀧子

嗚呼忘れもせぬ去年の秋。今咲いて居る菊の花が奇麗だと譽められたから。此春苗を分けて上げたやさしき友の露子様。此夏御病で亡くなられて仕舞ふた。嗚呼其菊ば今お庭に此様に盛りと咲いて居るのに

○戰死者　神戸　木田しげ子

淋しい樂隊の響は戰死者の葬式である赤十字の腕章を附けた看護長が淋しく飜る旗を仰いて「九月三日遼陽に於て戰死……」と讀だが、屹と直立柩に對し擧手注目の禮を施した、

○波惠樣へ　いばらかに

兄がかたみの糸菊姿あはれげに咲き出て申候。いかて訪ひ玉ひて霜枯れぬまに昔の夢のあと綴りたまはずや。

○不如學　台北　みさを

一人の生番、店に來て私の開きし女子文壇を執り「開けゆく世に……」と流暢と讀む。よくまあ、學校へ通つたの、彼は莞爾と雀躍しく、不如學。

○我家の今日この頃　千葉　田文子

現役兵より引續き、征露の軍に從ひ給ひし我夫の、郷を出てより四年目て、不日凱旋致すと云ふので、濕り勝ちなりし我家は、俄に陽氣な春の如く、母は訪ひ來る人每に、來年こそは初孫の顏が見られ升と、

○透ちやん　長野　島垣永子

今しも縁側て遊んで居た透ちやん、ふいに『桃から生れた桃太郎、ち(氣)はやさしくて力持ち、』と紅の唇を開いた、そも何の氣だろう其天眞爛熳の心、あゝ妾ももう一度透いやんの年になりたい。

○師の家　茨城　青柳愛子

この間上京した時、初め教はつた裁縫先生のお家の前を通ふつたら醫院と成り果て居た、聞けば先生は去年の夏青葉[illegible]れに郭公の鳴く頃返らぬ旅に立しとか、移り變る世の習ひとは言ながら袖にて涙を拂ひぬ。

○雨後の庭　二葉子

私は庭に下りて見ると昨日迄雨にいじめられて居た萩や尾花や桔梗だのが皆心地よさそうに勢付いて露の玉は旭を受けて金剛石の樣な光を放つて實に／＼美しい景色てす

○撫子の一花　堺　金澤しぐれ

勇次に送る手紙、何と書かう、何を報せて送らう、嗚呼、書くことも報すことも出來ぬ身、口惜しや我無教育、まゝよ此撫子の一花。

○豐年祭　上總　賀川秋子

鎭守の森に、ひるがへる幾流の旗、日頃は梟の聲のみ聞えしを今日は朝より大鼓の音笛の響、笑の聲さゞめきの聲、鎭守の森も動かぬばかり、あゝこれや洵の豐年祭ならむ。

○雛と親　上總　尾後貫綠葉

宅の雛は孵化から十幾日親子水入ずて仲のよいこと、うらやましわ、食を求めれば、雛を呼ぶ、呼はれて雛は母さんの足下に、からみつく。

○百合の薫　廣島　曾川秀子

曉の微風心地よき淸水邊に彳めば何となふ懷しき薫がするので露けき小草を分け入ればあな尊、白百合の一本、採りて供せん戰死の君に、されど隔らば露の落ちむを如何にせむ

○妾の希望　上總　森靜緒子

妾の生れた時は、妾獨が泣いて皆が笑つて呉れました、妾の死ぬ日は皆が泣いて妾は獨て笑ひませう。

○好いお天氣　岡山　小倉世喜野

アヽ今日は近日稀なる好いお天氣です、お母樣は張物に忙はしくて入らつしやる故、妾も晝から四時頃まて張物のお手傳なしさて湯から上て涼んてると妹は驚き顏にアラ姉樣の日にお燒なすつた事。

○思出の朝顏　廣島　梅の舍馨女史

今出征して居らつしやる兄樣とちらうて種を蒔いて置いた、朝顏が八月卅日の朝錢龜の遊んて居る池の上て滿國の方と家の方とへ向いて咲いた、夕に見れば朝顏は三りん二りんと寂しそうに池の中へ散つゝあつた。

○散步　岡山　野ぎく

御隣の好樣と涼みに出かけると月はさえ渡て家の中とは大ちがい好樣は空を一心に眺て居が姉樣御月樣はあの御星樣の御母樣てそして御日樣が御父樣てせう

○夢の富士　本所　井口以根子

友の光子さんと富士登山と出かけた、明る朝用意整へ山に發足した、つま先上り勇氣起して、いざ登らんとすと、「姉さん姉さんもう入時よ、ゆられてびつくり、あゝ殘念今少しで登れたものを。

讀友倶樂部

○諸孃と記者

○先生に女子文壇へ投書してもよろしいかと姉さんと二人で聞いた其時先生が女子文壇は貴女がたのよい先生であるからどしどし御出しなさいと仰つしやつた時は大變に嬉しかつた（姬、路野の花）（記者曰、記者も承つて嬉しいです、ナ何うか其先生によろしく仰つて下さい）○記者さんどうか女子文壇の合本を發行して下さい。表紙を總クロース金文字入にして是非御願ひ致します。これはたゞに妾一人の願ひでなく必ず多數の希望者はあろうと信じます（三重縣新鹿村前川すみれ）（記者曰、殆んど毎號賣切れて居りますから合本は出來ますまい）○記者樣に伺ひます色々の文を一ツのふくろに入れる時はがき文をはがきにかゝないて只の紙にかいて入れてもよいのですか又本月出した文が來月紙上に出るのですか來々月ですか（陸前氣仙沼町春子より）（記者曰、はがき文はそれでもよろしい、投稿は翌月になる事もあり、翌々月になる事もあります）○記者さんに尋ねます姉君生存中は女子文壇を愛讀して居りました去月死亡しました私に女子文壇を讀て居てモシ妹が年を過ぎたら投稿さしてくれと云ひましたが妹は年が行きませんから私が代人として投稿しては如何ですか（東京本所梅堂）（記者曰、女子文壇が遺言の一個條とまでなるかと思ひますと、殆んど恐懼措く處を知らないまで、責任の重いことを感じます妹御がおぼきくおなりの頃には本誌も今に百倍して天下に濶歩すべき立派な雜誌といたしませう、因に申しますがあなたは何云ふ御縁があるか知りませんが勿論玉稿は寄せて下さい）○記者先生私しは初めなのでわからないのですゝ愛讀者になるなら是非投書しなければ不可ませんか何卒御敎へ下さい（茨城、一女子）（記者曰、投書がお出來なさらないでも愛讀して頂けば結構です、其内に御作が出來るやうになつたら頂戴しませう）○記者樣に御伺ひ申します私共は田舍者で何も知りませんからどうぞ御敎へ下さいましあの投稿規定に一投書には各自句點を施すべし圈點は一切施すを禁ずとありますがあれは文章の終りに圈點を施す事が禁じてあるのですかもしそうでしたら圈點のとこには句點を施すのですか何卒くはしく御敎へ下さい御願いたします（宮崎縣かえて、ときわ）（記者曰、句點とは句を切る事で圈點とは文章の妙所に打つものです、勿論文章の終りに打つのは句點で圈點と云ひません）○記者さんハガキ文は端書へ書かなければいけませんか半紙をハガキ判に切りて他の原稿と一所に封じて出してもよろしいてすか（相州、一少女）（記者曰、半紙半枚でもよろしい必ずハガキ形に切らずとも）○記者樣當文壇が外形内容共に益々優美になるに反比例して郵税がまで不要となりあまり勿體ない樣です私は我が生命のあらん限りは愛讀するつもりです（肥前松浦の里幾己子）（記者曰、命のあらん限りとは實に深くも愛讀の誠意を洩らされたものです、記者も亦命のあらん限り本誌に盡くしませう）○記者先生私わ前から女子文壇を愛讀致して居りましたが一度も投書した事は有ませんでしたが此正月を始めとして投書致します、（長野縣小縣郡上田町常磐城新町二、二、五、八、田村あい子）（記者曰、何うか此後ちつゞいて）○記者樣にお伺ひ申します、誌友倶樂部の原稿は半紙に書いて詩文の原稿と同封て送りましても宜しうございますか、又字數行數に制限がありますの（三河西加茂郡石ケ瀨澤田つま子）（記者曰、同封でよろしい、文章は成るべく長くならないやうに）○記者樣折入って御願ひ致しますお恥かしい次第でございますが私は家事の都合で敎への庭にもはえへませず日々兩親の側にあり商業にのみ勉めて居りましたが。この度女子文壇を拜し記者樣の御盡力なる御敎導又諸姉上樣方の御熱心に感じまなびるき身もせめて短歌法式こゝろ得たく然れど拙なる妾には何なる書にて學ばむそれさくへ。わきまゑぬ。何卒御情を以て御手數ながら御敎へおさしづの程願申上ます（森山周子）（記者曰、御志の程は感じ入りました、初めから短歌をお學びになるには、骨が折れませう、只澤山に和歌などおよみなさい、古い歌ならばそれ〴〵講義のある書物に依つてひま〳〵に御らんなさい、多く讀めば自然に會得して、歌の一首も出來るやうになります）○圈點は毛筆ですか伺ひます（埼玉なてしこ）（記者曰、左樣毛筆です）○記者さま御機嫌よく私は初號からの愛讀者です私は田舍の少女ですから皆樣のやうに高等の敎育を受ける事も出來ず色々の雜誌を友として平和に暮して居ります本誌もます〳〵美はしくなつて實にうれしくてたまりません毎日忙はしくつて讀むひまもないので今年きつちてよそうと思ひましたが消息文や何かの面白いのに引き付けられて來年も又愛讀いたします（茨城、川口やゑ）（記者曰、いくらお忙しくても月の一冊の雜誌位は必ず讀めます、何うか變らずに御愛讀下さい）○記者樣に御願ひます第十號誌友倶樂部で拙なき妾を御紹介下されましたが妾の名は齋藤りん子とありますが妾は齋藤益子と書きて戶籍にあるのでこれをチサムト讀みます御蔭で誌友の皆樣から度々御手紙の參りますのに間違ひのあるよふですから何卒御訂し下されませ（熊本縣小川町八百六齋藤益子）（記者曰、むつかしいお名ですナ）○今度始めてゞ書方のこともよくわかりませんがこれでよいでせうか（大阪東區上本町五丁目多門院ひて子）（記者曰、よろしい）○記者さん私等姉妹三人これから折々投書致しますからよろしく御願ひ致します（大和、姉妹三人）（記者曰、姉妹二人て御投稿なされるのはいくらもありますが三人は初めてです何うか競うてお出し下さい）○記者樣二人が原稿を同封にして送りてもよろしうございますか、次號で知せて下さい（千葉、大塚よし子）（記者曰、よろしい）○記者先生其後は久しく御伺ひ申ませんでしたが別に御かはりはありませんか、本誌もます〳〵好評を博すやうになりまして御目度ぞんじます此も一重に記者先生方のお骨折りの結果と深く感謝致しますそれから一寸御伺ひ申ます歌は佐々木先生の增補

の詠歌自在のを見て作つて出してもよろしいのでしやうか御知らせ下さい（山里にて百合子）（記者曰、歌は本を見てお作りになつてもよろしいが丸ぬすみしてはいけません、ほんの參考に御覽になるならよろしいです）○記者樣大層寒くなりましたし戰勝の新年も來ますから能くお身を大切に遊ばし下さいませ記者先生の番地を誌上にお示し下さいませんか（江口はる子）（記者曰、ありがたうムい升、番地は追つて申上ませう）

○諸孃の交際

○愛讀者の皆樣妾は當文壇を愛讀いたしておりますから何卒御交際下さいませ（神戸北長狹七丁目、四六、黑河內千代）○私は中京に住む無學なる者てすが賢明なる諸孃と交際が願たいてす（名古屋下長者町三丁目木村操）○面白い雜誌妾交換を致しましよう美しい御玉章送り下さい妾しきつと御返事致します。皆さん美しい繪葉書の交換致しましようれ妾しれ大阪の美しい景色のを御送り致ますよ寫眞の交換も致ましよう何卒美しい編物なり菜なりを御送り下さい妾しきつと相當なので御禮致ます（大阪西區靱南通五丁目第八番の二、黑川夏子）○小縣郡中鹽田村上本郷馬場綾子樣に申上ます私も貴孃と同じ境遇に泣き悲しんで居る者て御座います十一號のあなた樣の御便を拜見いたしまして實に御なつかしう存じます以後直接の交通を御ゆるし下さいませんか御伺申ます（信濃小縣郡本原村下原坂口隆子）○新年御目度う昨年は一方ならぬ御厚情を蒙りました有難御禮申上ますなほ本年も相かはらず御交際を（茨城縣石岡町石崎李子）○親愛なる誌友諸姉よ御芳姿の寫眞及び編物、地方の御名所寫眞新聞などをお贈り下さい妾も相當の御禮を致します繪端書も御玉章も送つて下さい必つと御返事を致します（和歌山市金屋町立吉別莊內三宅方早川りよう子）○高松秀代樣を始め福岡縣の諸孃よお懷可しう私此春韓國から歸朝致しましたの、安孫子樣重田春子樣富永清子樣久富とく子樣大谷華笑子樣太田秋華樣御英名には豫々本誌で承り陰乍御慕ひ申して居ます。誠に不束者てすが以後宜敷御交際願ます（京橋區月島西仲通二の三散田清三郎方藤島きく子）○一女學生樣私も女子文壇愛讀者の一人てすがあなたと御同樣に女子高等師範に入學志望てすから何卒誌上で御住所知らせて下さい御交際致しませう（佐賀捨小舟）○古河松江樣に深く謝しますほんにお懷しいれ、是れもやつばり文壇のお蔭又一つは操子さんのお蔭てすよ私はれ—何だかお恥しい氣が致しましてれ……次ぎにあの淺野さま伊藤さま森久子さまには飛んだ失禮致していますす先日のはがき屆きましたかついゝすがあのお姉さまにれ—いつもお美文を拜して居ますつて誠に感心致して居ますつてれ宜敷願ひます（今紫久子）○何んの編物てもよいから送つて下さい先着者ト名には戰爭畫報を送ります外の者には相當の禮をなします（千葉縣山武郡土氣本郷町大和田大塚盛作方いわ子）○皆樣御交際して下さいな菓の交換も願ます自製の菓持て居りますから御望の方は下名へ御知らせ下さい（宮城縣伊具郡角田町上田秀子）○石崎霞洲子樣高濱町の方へ、エハカキ出しましたら戻つて參りました如何てすか善通寺嶋本いそ子樣十一月の便りあげましたら各分院になしのフセン附にて戻りました現時の御住所御一報下さい（周防、美都子）○皆樣どうか親しく御交際を願ひます（大阪市東區瓦町三丁目林藤衛）○御寫眞に御玉章を添えて御送り下さる方には二十錢以上の繪葉書を差上げます尙ほ續ひて御交際を願ひます御寫眞へは寫眞を願ひます（東京市神田區鍛冶町大紫方伊藤）○稲田美子樣先日は御親切な御文に葉迄御惠與被下まして厚く御禮申上升、又水戸初子樣度々御美敷繪葉書有難う、夫まれか長尾周子樣先頃上ました繪葉書御手に入りしたらか（石狩國由仁村小川初子）○新年お目出度う昨年は一方ならぬ御厚情を蒙りましたありがたく御禮申上ます尙ほ今年も相かはらず御交際を（茨城縣石岡町栗栖信子）○淺野しげる樣私は古河松枝さんの親友てす常々御芳名を承つて御なつかしく思つて居りました、何卒御手紙下さいまし（陸前國松島村高城町鈴木きくち子）○私は片田舍に住むこよなき不幸者てすが御手紙なり繪はがきなりの御交際して下さいまし、そしてどなたか栞御めぐみ下さいな身にかなひし御禮致ます（下總國印旛郡遠山村小菅安達志ゆん子）○英文て御交際下さる御方樣は御座いませんか御交際下さる御方樣は下名へ（横濱市中村町一四○四南小柿方ゆき子）○皆樣私は雪のたくさんふる越後に住むて居るものでございますが女子文壇愛讀いたして居りますからどうぞみなさま御交通を願ひます　みなさま御丈夫にさよなら（越後長岡關東町田村順三方君子）○皆さん私は畫が大いの大の好きなのですそれて幅一尺余長四尺余の畫を十數枚書きました御望の方は自分の畫はがきなりにて御申し下さい先着者から順々に差し上げます（牛込大神町二十七番地齋藤方たそがれ）○地軸一轉樂しき平和の春を迎へ謹て記者樣だちの御功勞を感謝します滿天下の愛讀諸姉樣も不相變交通の程御願申ます（高知縣高岡郡越知町森木重子）○皆さんどうか御交際を願います、そして繪はがき交換をして頂きとうありますは、皆さんの中にて神戸市の大崎すま子さんの居所を御存じの御方はありませんか、（周防、K、O、女）○宇都宮橫山きつ子樣同縣てお懷かしう存じます私は貴女が宇都宮の女學校て音樂のチヤンピオンてピヤノやベイオリンがお上手な由友達から聞いて居りました何卒これを御えんに御交はり下さいませ尙次號て御住所委しくお敎へ下さい、（栃木縣上都賀の里にて、倭子）○横山たよ樣（即ちしやくやくとさみだれ、と武二の畫を送くつて下さつた御方）宜しく御禮申します貴所なけしいんの爲めつぶしましてわかりません、ど—か返事しますから御しらせ下さい又も御交さい下さい、（廣島縣高田郡甲立林深瀨貧岡ちと子）○おなつかしい諸孃さま私は學ぶに師なく語るに友なき北海の一隅に居る文壇と讀者の一人てす、どぞ皆さま文通して下さい何時てもよろこんて、御返事さし上げます（北海道樺戸郡月形村小鹽濟子）○各縣の女學校の諸姉樣よ妾は女學生と云ふ御名は實に懷しい事よ其は昨年妾の義兄が出征したに附て遺憾乍ら家內無人の爲めわずか二年余にして退校したのです以後は宜しく下級の友として文通や繪端書の交際をして頂戴な（埼玉縣北足立郡

仲仙道大宮東在大和田見富方細沼藤代）○皆さん、私もお仲間入を願ます、私は高等小學校第二學年生てありますから御見捨なく（常陸國新治郡高濱町大橋二一關町國友方にて花園菊子）○先づ明けまして御目出度、妾も愛讀して居る一人でありますけれども、また姉樣方と御交際をした事はないのです今年からは御交際が願しいのであります（愛媛縣北宇和郡旭村奈良岡田榮子）○妾は北越の新潟に住んで居る今年まだ十七歳の乳臭い拙い者ですが諸姉樣の中に心あるお方はどうか繪はがきに玉章の御交際をねがいます私も直ぐに御返事を參らせます又先着二名の方へ新潟名所繪はがき一組づゝを差上ます（新潟市西湊町一ノ五七小島方にて小島ゆき子）○諸姉樣交際して下さいませ賴みます妹の弘子にも何卒願ひます（名古屋市南武平町二ノ五伊藤義平方伊藤あい子）○御地方の景色寫眞お持ち合せの方はお送り下さいませんか、先着のお方五名に雜誌を差し上げます（伊豫喜多郡山鳥坂村宮脇あさ子）○大手町の脇せつ子さん何卒御交際なすつて下さいれ私はあなたをよく知つて居ますよ縣立女學校の寄宿に居ましたから（臨島縣佐渡郡津田村藤本むれ子）○長野縣の馬場綾子樣、御身の上は十一號の誌上にて拜見致しました、私も御同樣孤兒の身、已れに引くらべて同情の涙にむせびました、何も浮世の習ひと諦めてお互ひに又來ん幸を待ちましやうれ（下野きよ子）○記者さん始め皆さん明けましてお目出度ふ、中鹽田の馬場綾子さん、御同郡で御懷かしい妾は阿母さんと二つの時分れ、五つの時阿父さんと分れ今は親類の內におりますから御閑が御座いましたら御遊びにおいて下さいな（長野縣小縣郡川邊村工藤佐太郎方工藤英子）○わたくしは田舍ものですが、おつきあいなれがいますさて書簡か、繪葉書か、寫眞をお送りくだされたおかた先着二人には繪葉書一組づゝあげます（三重縣富田一色大黑町田邊方小林とし子）○繪葉書や御手紙の交換を成して見たいのです何卒御交際を願ひます（千葉縣山武郡土氣土本町下大和田金澤てい）○妾は遠き山口縣より目下東京に遊學の者にて諸孃に山口縣都濃郡より御來遊の御方はなつかしき故どーか御知らせ下さい私もすぐ書狀差上ます（淺草區小島町九番地北山田增太郎方中谷岸世子）○私は女子文壇と聖書とをこよなき友として居る田舍の一少女でありますが愛讀姉妹の中にクリスチヤンの御方がゐらツしるならば主の恩寵のもとに聖らかな御交際を願ひます（越後西蒲原郡松野尾村小出彌生）○妾はうばが餅の名所に居りながら親しき友もありません諸孃よ何卒御交通して下さい（近江國栗太郡草津町横町勝山久園子）○御なつかしき諸孃樣今年も間もない事となりましたネ御目出度う御年加へられん事を神かけて祈り上ます（福岡縣筑前國嘉穗郡足白村馬見繩田靜子）○親愛なる諸孃樣どうか御交際を願います（大和宇智郡無音の里榮山利子）○淺野しげる樣大阪永井靜子樣御二方の御親切何とお禮の申やうもありません在學中の私貧生の身の悲しさは御厚志にむくゆる事が出來ませんたゞ〳〵心にて感謝する計りて御ざいます（埼玉、石田琴子）○上毛新田の里、すみれ樣貴女樣のはがき文を拜見いたしまして大そう御なつかしう存じます何卒御交際を（東京市青山南町三ノ四入佐久間方森茂子）○福岡縣下の愛讀者諸孃よ、私は女子文壇を非常に愛讀いたして居ります、誠に不省者でありますがどをぞ御交際を願ひます（福岡縣糟屋郡涙舟子）○皆樣親切な御手紙送つて下すつて妾厚く御禮申上ます皆お返事を上げましたが届きてせうれ以後も益々深く御交り下さい（常陸霞北文壇愛讀會員川並芙美子）○わたくしは故郷はなれて勉强して居りますから御交際下さい地方新聞の交換もお願（千葉縣上サ土氣町花澤はな子）○千葉縣印旛郡の藤崎いさみ樣熊本縣八代郡の增住ちよの樣すぐ返事を上げましたら、何れも不明で戻りました、どうか判明に御住所をお示しください（岩手縣稗貫郡花卷川口町折居綾子）○土地新聞雜誌繪はがき名所寫眞の交換をして末永く幾久しく御交際を願ひます（千葉縣長生郡新治村上太田北谷關屋覺子）○妾は下總のかたすみに住むて居る田舍の黑々娘なのよ未だ諸孃へのお目通りも仕らず、甚だ失禮いたしました…どうぞみちびいて下さいな（下總佐原町大崎ふみ江女史）○嗚呼なつかしい諸姉上樣方よ、文通を以て交際を願ひます、亦繪はがきの御交換なして下さいな妾も必ず送りますよ（千葉縣印旛郡遠山村香取第四〇番地藤崎いさみ子）

◎繪葉書交換

○皆樣繪はがき交換や文通を致したひですからどうか御自筆なのを一枚づゝ送りて下さいな私もお送り致しますから（熊本縣八代郡高田村字高下垣田こと子）○諸姉樣よこの後宜しく御交際をまた繪葉書交換して下さい（福岡縣遠賀郡若松若松病院內八木北子）○所かはれば品かはる土地の風習名所等お互に報道しようじやありませんか、繪葉書の交換も願ひます（大阪府泉北郡深井村字畑山安田信子）○誌友令孃諸君、妾も繪葉書交換の榮を賜はり度肉筆は最も歡迎致ます（東京日本橋區桶町十八佐竹方稻垣孤星）○繪葉書やお寫眞を御送り下さい妾もきつと送りますから住所は（千葉縣長生郡新治村古井大谷市太郎方大塚よし子）○愛讀諸孃樣繪はかき送り下されませ早速御返事致しますなほしほりの、交換を願ひます（奈良市押上町岡田なつ）○寫眞や繪葉書の交換を望みます先着三人の御方には新刊雜誌を差上げます（東京神田錦町一ノ二横山方かほる子）○故鄕長崎を去つてから早や三年にもなりますので轉た懷鄕の情に堪へぬのです。長崎の御方で若し繪葉書御寄送下さらば御返禮致します（神田猿樂町二、井口方森竹よ）○皆樣肉筆繪葉書の交換を願升（日本橋區櫓正町十番地小池方山本八枝子）○私は皆樣と繪ハカキ交換をしたいのです併し一月七日まで御だし下さる樣願ひます（宮城縣鹽釜港佐々木實）○肉筆の繪葉書や御手紙の交換を第十號に諸孃方に願つて置きましたら三十五六名程御座いました、妾も拙いながら皆御返事出しました。又雜誌や地方の新聞の交換もれ（能登輪嶋町淺見淸子）○武藏白菊女子舶來繪葉書交換賛成ですが住所が不明ては送る事出來ないわ（一少女）○年始狀を繪葉書て交換を願ます妾は（千葉縣山武郡土氣本鄕町下大和田字荒久第九番地大塚さく子）○私は早くにして兩親に離れ實に悲しくさびし

き生活を送りつゝあるのです繪端書の交換も願ひあげます（志摩鳥羽町藤の郷稲垣樣方佐藤法枝子）

○一月一日新年賀状繪葉書交換を願ひ候（東京深川區富吉町八西尾けん子）

○皆樣に誠に不出來てすが自作の編物が御座います美麗な繪葉書て申込の方には二十人限差上ませふ（府下王子王子小學校内大谷みどり）

○皆さん、繪はがきの交換をいたしたいのですよ、屹度御返事いたしますよ、又御手紙も下さいよ皆さん（茨城縣新治郡高濱町大字東大橋石崎楳之助樣方霞洲子）

○舶來上等な奇拔な繪はがき御交換いたしたし（大阪東區博勞町東堀四へ入田中方白雪）

○私は繪葉書が大すきですどし／＼御送り下さい私もすぐ御返事致します御寫眞交換も願ひ升（横濱辨天通四丁目永井その枝子）

○親愛なる誌友諸姉樣繪はがき交換致しますからどうぞ御送り下さい屹度御返事致しますから（東京牛込區辨天町六林安津子）

○愛讀者の皆樣繪葉書交換御願ひ申ます先着第一の方には「濱子」といふ小說を差上ます第二第三は女學世界おのぞみの號を進上いたします（大和國高田町櫟根こう）

○皆樣あけましておめでたう今年から皆樣の御なかま入りが致したいので御座いますゝてすから繪はがき下さいませんか（東京市本郷區弓町女子美術學校内阿部ひで子）

○皆樣私も繪端書交換のお仲間入をさして下さいませ（東京麹町九丁目澁谷靜江）

○諸姉樣繪葉書の御交換を願ひます（栃木縣下都賀郡栃木室町三丁目山口わか）

○近江の里子さん福井の高柴さん京都のかすみ樣折角妾は繪葉書お送り申したのに一ヶ月經てもご返事がない（羽後國角間川町大沌町松田方せい子）

○繪葉書交換おねがひます（丹後國加佐郡舞鶴町字竹屋日諸惣子）

○皆樣繪はがきの交換をして下さいませんか御送り下さる方はなるべく和歌をかひて私も下手ですがきッと御返事いたします（本所區林町三丁目四十二番地正村方山田しみれ）

○賢明なる諸孃私は新治の片田舍に住む曉の女です繪はがき交換願ひます（茨城縣新治郡土浦本町中西歌子）

○皆さん繪はがき難有うよ、亦この後とも願ます、尙ほ皆さんに新年の印まてに花ごよみを上げたいから御望の方は御知らせ下さい（下野田沼字小見久保やを子）

○記者樣、誌友の姉樣方、新年の御慶目度存じます、年始の繪葉書を下さらば喜んで御返し致します（伊勢國度會郡宇治山田町字中之切町四村いしの樣方武部美千代子）

○私の繪はがき交換名をお出し下さいましたのでわざ〳〵繪はがきを御めぐみ下さる方が大そう御座います厚く御禮申します（函館區砂町三大島造方にて大島春江）

○讀賣新聞の繪葉書廿五枚を切り拔いて取ています御所望の御方は何にかと交換が致したいですよ（山口縣佐波郡宮市新町中本丈吉方中村察子）

○繪はがき先着の方に限り作法書小說書調理法裁縫書等凡そ卅冊進呈（信濃國更級郡御厨村小林よし子）

○私は田舍の小學を卒へたばかりの淺學なものですが何卒愚妹と思召して文通の交際をして下さいまし（埼玉縣入間郡越生町大字上野六四山口くに子）

○繪葉書の交換大贊成です御送りの方には相當のもので御返事申します尙私の許に古ひ紀念切手及三錢以下の古ひ郵便切手貳萬枚程あります、御望の方は繪葉書て御申込下さい、直ぐ送ります、陸奥西郡鰺ケ澤漁師町三宅績子）

○繪はがき御交換下さらんか、必ず同等以上の御返し致しますから尤も第一着から五着までは地方の風景寫眞か女學世界か妾のうつし繪の三種の中お望のを送り申します（美濃關相生町加藤裁縫舍傍島美遊喜）

○皆さま、妾の兄さんが美術學校に居りましてかていたゞいた私製畫はかきがありますから、肉筆でも外のでもよろしい、是非御交換をれかいます（甲斐國勝沼町一九七方揚羽君江）

○みなさん繪はがきの交換をいたしませう、お贊成のお方は下の處へ、直ぐお返事いたします（能登輪島町勝田方、池野いさみ子女史）

○「戀のナポレオン」は抽籤の結果、埼玉縣騎西町の菅柳やよ子さんに上げました、それから繪はかき交換を希望なさりながら取り放しの方がありますがどうかそんな卑劣な事をなさらんやうに（岩手縣折居綾子）

○私は繪はがきが大好よ諸孃さまの中でも好の方どし／＼送って下さいすぐ返書あげましよ（千葉縣長生郡新治村上太田森玉方、森久子靜緒子二女）

○他の用事の文句は一切認めず詩歌一首又は二首を寄題に認めた風景草花の繪葉書を交換して頂戴（滋賀縣甲賀郡柏木村泉辰井琴子）

○諸姉樣よ新年には繪葉書にて新年を祝ひましよー（千葉縣山武郡土氣本郷町大和田鶴岡きぬ子）

○妾わ寫眞なり繪はがきなりを募つて居りますが皆さんの中で地方亦は御自分なりの寫眞を送つて下さい悦んで寫眞で御返事致します尙繪はがきの交換をも（京都府相樂郡祝園村大字菅井堀池靜子）

○皆さん繪はがきの類御送り下さい私からは悦んで頁いので御返事致します（京都府相樂郡祝園村大字菅井松田茂七方松田清子）

○みなさんどうか御交際を願ひますかつ繪葉書の交換も願ひます（淡路津名郡都志村の内萬歲村二五伊藤綾子）

○繪葉書の御交換を願ひます（淡路岩屋町四二八苫屋けい子）

○親愛なる諸姉樣何卒繪葉書の交際願ひます（兵庫縣津名郡洲本町大歲利一樣方內田菊枝）

○繪葉書の交換を願ひます、御望みの御方は直ぐ御送り下さい私も差し上げますよ（長野縣長野市花咲町一四六島垣永子）

○妾は大塚さく子の姉ですから此新年には美しい繪葉書を交換して下さい（千葉縣山武郡土氣郷町下大和田字荒久第九番地大塚よし子）

○繪はがき交かんなして下さい（千葉縣長生郡本納廻り田高山靜子）

◎書籍の換讀

本誌の第拾號御送付下されし先着の御方へは不出來ながら乘差上ますから何卒御送りを願ひますそれから繪はがきとも右樣御願ひ申上ます（秋田市横山本横町、六庄司錦子）

○尾道市愛讀孃樣お說には双手を擧げてよ、何卒「尾道新聞」でも贈つて下さいまし、私も當地で一番好評の有る新聞を贈りますから（北海道龜田郡七飯村松井長子）

○新聲か明星か其外何でも面白い文學雜誌をおもちですれば何號にても好し御送り下さいませんか此方よりも相當の御禮を致します（岡山縣英田郡福本國司秀芳）

○誌友諸姉私あつかましくも書籍交換を御願いたしましたが「日本學生寶鑑」小說「火の柱」とが洩れて居ました から一寸（函館區マサゴ町興造方にて春江）

○下野松野舍樣誠に申しかれますが「理科辭典」か「國語漢文中辭林」か御讓り下さい、御好みに應

じどの樣な本でも御禮として贈りますから（大阪府池田町米屋町島居芳子）○私は紅葉著「不言不語」春雨著「無花果」所持して居ますがもし御入用の御方は端書で下名へ（福岡縣糟屋郡久原村下久原渡邊紫野女）○小說「夏子」前編「にせ紫」「乳姉妹」等揃ひあり差上げてもよろしく候給葉書で御知らせ下さい（宇都宮市小幡町三九脊柳謙子）○私は「白沙靑松」「寶ろく全集」日本の家庭」全部不用ですが「不如歸」家庭小說」は何なりとも、よろしうご座いますが、御交換下さいませんか、（横澤幸子）○私の手許に本誌一號より十一號まで（何れも口繪なし）並びに一葉全集」「家庭顧問」の數册がございますがお望みのお方は申越して下さいおゆづりいたします。諸姉のうちに「孝女白菊の歌」新刊小說を御讓り下さる方はございませんか（越中下新川郡加積村字吉島村荒井彥四郎方きよ子）○雜誌、繪葉書、お手紙、お寫眞等の交換を願ますそれから諸孃の中にて辭書「言海」（欠損なきもの）を相當の價にておゆ讓り下さる御方なきや（富山縣西礪波郡福岡町新保とき子）○作文中辭林「藤村全集」「悲歌戀歌」「テニソンの詩」「明治時代文範」の何れかゞ御手許にありますれば御贈り下さい勿論相當の御禮はいたします又粟でも編者でも御交換を願ひます（攝津川邊郡中谷村ノ內夕田山本孝子）○いろ／＼の本をもつて居ります御入用の御方は下名まで御申込下さいな（本所區松井町三ノ十二磯田瀧子）○妾の手許に詩集「片われ月」、「草わかば」、「花ざくろ」等あります。『花がたみ』或は相等の詩集と、どなたか交換して下さいませんか「不如歸の歌」でもよろしう御座います（牛込早稻田鶴卷町四一八、小島須子）○本誌愛讀の方に限り私が所持して居る新約全書（三十五部）送呈します尙は先着二拾名には縣下名產の埋木細工を呈す記者さんにも上げます（仙臺市肴町三丁目笹川庄兵工方小田島陰草）○「秀才文壇」五卷五號と「樂苗文學」が三册と「中學文壇」一册とが不用になつてゐますから繪葉書で御申し越しがあれば進呈致します又諸孃の內で栃橋一郎著の萬國大年表の不用の御方があれば御通知を願ひます（香川縣大川郡三本松町松永あやめ子）○諸姉樣がたの中で若し御不用書籍の御中に多田親愛先生の習字帖御持ちの御方が御座いますなれば古本で結構で御座いますから此愚妹に御贈り下さいませんか御返禮はキット／＼致しますからドーゾ（大阪市北區天神橋壹丁目、百三十一番西部棋子拜）○妾の兄さんが谷本富先生著「實用敎育學及敎授法」といふ本をお望みのお方へお讓りしたいといつてをりました、諸孃方かお兄さんなどでお望みの方は妾へ葉書で：：（陸中和賀郡笹間村高毛利子）○妾に不用の書物があります「藤村全集」「白玉姬」「塔影」「復活の曙光」「出廬」かと御交換を御願ひいたします（函館區眞砂町三大島春江）○誌友諸姉の中に「自然と人生」御不用のお方がおりましたら何卒「文藝小品」、「詩國小觀」「物產辭典」、「溪韻松聲」の內一册と御交換下さいませぬか（三河西鴨郡石下瀨澤田つま子）○本誌愛讀者諸孃よ本誌第一號より第九號迄どれでも一册なり二册なり送り給へ御禮としては有益な書籍を送る（千葉縣山武郡千代田岩山鈴木芳子）○皆樣の何れの御方か小說「琵琶歌」を御持ちの方は下名迄御知らせ下さい（上毛利根郡利南村字下久屋津久井紫）○夏花小女、睡蓮、夏扇、靑梅波、行春、眞晝野、あこがれ、不如歸の歌、金帆、キーツの詩、白玉姬、の內何れにても宜し送付の方には、悲戀悲歌、廿五絃、塔影、戀衣、亂髮、小扇、毒草、銀鈴、小詩國、若菜集、亦は明星、白百合、文庫、韻文雜誌、女鑑女子の友等の女子雜誌、何れなり御好みのを御返送致し升。（近江甲賀郡柏木村泉高井方辰井琴子）○本誌一卷十二號の下野松野舍さんか、「國語漢文中辭林」御入用の方あれば、紙上で御答とのこと、私、「文藝界」一號より十號迄持て居りますが、之と御交換して下さいませんか、或は「五書字典」、「言文一致文範」數册とても宜しいが。若し御氣に入りましたら、御送り下さい、其序に宜しいのを一寸御書添へ下されて（名古屋市南呉服町百六番戶方鮒子海なか）○愛讀諸孃にお願ひ致します本誌一號より五號まで（成可は繪の附きしものにて汚れてゐないのを）及び八號の六册又白露號中央公論二百號不用のかたはお讓り下さいお手紙には名を書かず雅號にて願ひます（大和國郡山町淺田葉花女史）○三十八年女學世界春季增刊『小天地』と妾の文藝倶樂部春季增刊『初芝居』と御交換を願ひます（常陸國高濱町東大橋酒葉つれ子）

◎剽竊詩文の注意

○新年早々汚れた名を紙上にさらすことは隨分なさけない話てすが是も其人の不心得から起るので徒らに他の詩文を剽竊して紙上に名を出さうといふのは何う云ふつもりか記者は殆んど彼等の心事を解する事が出來ない愛讀諸孃相戒めてかゝる蠹を一日も早く本誌外に放遂したいものです

▲十二號の分

○波江野紫子　論文地貧　鹿兒島市易居町波江野紫子の『愛』は『婦人界』第二卷第五號より剽竊。

○小泉はま子　茨城縣新治郡高濱町東大橋小泉はま子の敍事文秀逸『秋ぐさ』は明治三十四年十一月十五日發行『少國民』第十三年第二十五號四十九頁にある東京白秋濵郎君の『くさ／＼』と殆んど違はず剽竊と認む

○森美智子　はかき文秀逸千葉縣森美智子の『平和の夜』は『秀才文壇』五卷十九號はかき文地貧千葉縣森儀一郞君の作に同じ（記者思ふ之れ同人の變性女子にあらざるか）

○秋月女史　新体詩天賞群馬縣高崎市秋月女史の『海人』は薄田泣菫氏著『二十五絃』二百二十頁のことうた第二海女の二句を聊か變へたるのみにて全く剽竊なり

○春光女史　短歌天賞千葉縣山武郡千代田村春光女史の『只一たび京にのぼりし……』の歌は三十六年三月發行『女學世界』第三卷第三號天賞の高知北川すて子君作の『鳥』を剽竊せしもの

▲十一號の分

○靜女史　新体詩秀逸紀伊靜女史の『葡萄』は

『秀才文壇』五卷三號千葉縣吉原聖圖君の『葡』と僅に假名一つ二つの相違のみ剽窃なるべし

○木村しずゐ●●●●　短歌　天賞　下野　木村しずゐの『つよきこと……』の歌は『秀才文壇』五卷二十一號にもあり

○森みち子●●●●　千葉縣長生郡新治村上太田森みち子の俳句地賞『星の合ふ頃を枕に眠りけり』は『文藝俱樂部』三十六年發刊第六卷第十二號にあり又同人の十二號に出せる俳句秀逸『七夕や兄も手傳ふ小短冊』も同じく文藝俱樂部にあり

右の如く知らぬと思ふても誌友の制裁は決して面皮厚き剽窃家を許さないのです扨て右の注意をたまはつた思想上の裁判官とも云ふべき諸孃の芳名は左の通り

○麻布、高嶋八重子○山口、白楊女史○麴町、白生○○逗子、濱の子○神田、桑原つる子○わか子○○常陸、白額女史○辰井琴子○○千葉、大塚よし子○○植草くま子○池田市子○○鹿兒嶋、すみれ子○○德島、兼格夏子○岡山、XY子○京橋、噴火山

○誌友俱樂部課題募集●●●●●●●●

○誌友俱樂部をして益す家庭的に團欒的に娛樂的にしたいと思ひますので從來設けてある各欄の外に每月課題を一つ宛出して御寄稿を願ひたいと思ひます

▲我家の現在（一月十日締切）

▲好きな食物（二月十日締切）

○我家の現在には成るべく諸孃の現在の御家の特色を知らせて頂きたい例へば、父は軍人で凱旋したとか、お正月で家を普請したとか、新しい家族がふえたとか、變つた什器があるとか成るべく其家の特色とも見るべき事を書いて下さい。最も特色が無ければ家族の數、父母兄妹の有無、年齡、家の職業、儀式、生活、家の建築、庭の事、室の事、家族の不和又は圓滿、何でもよろしい餘り多くは書けませんから一つ二つの事柄だけでもよろしい

○好きな食物には諸孃がお好きな飲物又は食物を一種以上數種認めて下さい

○誌友俱樂部課題は凡て左の投稿規則に依ると

▲長さは七行以內▲用紙は半紙又は罫紙▲「我家の現在」と「好きな食物」を同時に寄せられる時は必ず別々の紙に認めること▲雅號だけにても宜しけれど國名は添へること

謹賀新年

併て愛讀諸君の健康を祈り申候

明治卅九年一月元旦

女子文壇社

社主　野口竹次郎

編輯局　一同

販賣部　一同

廣告部　一同

編輯たより

○新年附錄。●●●●　豫告の通り新年附錄として山中古洞先生の彩畫石版十度刷『晴小袖』を本號に添へてありますから御翫賞下さ、

○內容の刷新。●●●●　年と共に本誌の內容は益す改善を計りました、文章の選評は鹽井先生御都合あつて文學士沼波先生に變りました勿論懇切に選評されます、なほ新体詩の選評は本年から河井醉茗先生に願ふ事になりました、又卷頭の名家文壇を「女子文壇」と改稱し從來あつた家庭欄を廢し女子文壇の欄を擴張して益す名家の寄稿を仰ぐ事といたしました。

○圖畫●●●●　本號より選外の圖畫をも掲げました

○增刊號●●●●　二月十五日には定期增刊を出します、寄稿家諸孃に於ても紙面の都合で掲載の後れて居る分は皆此の增刊に出ますから樂しんで待ち下さい。

○注意！注意！。●●●●　皆さんに御注意申す事があります　近頃本社の隆盛に乘じ利用せんとする輩があつて社員或は女子文壇の記者と稱して私信を諸孃の手許に送つたりする男があるのです現に前月も麴町の某愛讀令孃の許へ女子文壇記者何某と名乘つた手紙を送り日比谷公園へ連出さうとした男がありました、幸ひ右の令孃から直接本社へ御問合せになつたので事無きを得ましたが、斯る惡漢の出沒せぬとも限りませんから諸孃に於て深く御注意をねがひます東京は勿論地方の愛讀者も御注意下さい就いて申します本社から愛讀者又は寄稿者に用事のある場合は當文壇の紙上で申上げます決して私信を差上る事はありません、何うか左樣思召て下さい。

friends in pointing out these "from my friend in Japan."

Would you please tell me, in your next letter, something of the dresses worn by the ladies at a wedding and also where the wedding ceremony is performed.

I am sure that if I could go to Japan I should see many beautiful places. Your customs seems very queer to me, especially the one about taking your shoes off before entering a house.

I spent part of my vacation at my grandparents in the country and as I love to roam in the fields I had an excellent time.

I almost forgot to thank you for that lovely fan I receiverd It is such a novelty for we never have them in this country like that one.

I will close now hoping this reaches you safely and that you will be pleased to answer soon.

I remain,
Your friend.
Beulah Fogg.

P. S. If there is any Japanese girls writing English I should be very pleased to correspond with them, and hope you will introduce them to me.

人より來りしものと指示申しては獨り喜び居候.

次回の御手紙には何卒日本の結婚式に婦人の着する衣裳と又結婚の式は如何なる所にて行はれるやを御知らせ下され度願上候.

私若日本に渡り候はゞ必ずや多くの美くしき所を見られる事と存候. 又貴國の風習は私には甚だ奇に思はれ候が中に特に家に入る前に靴をぬぐ一事は尙更に御座候.

私の休暇の一部分は田舍に有る祖父母の宅にて打過し申候.

私は野外の逍遙を好み申候まゝまことに樂しく消日いたし候.

御送り下されし麗はしき扇子の御禮を忘れる處にて候. 御送り被下候如き類は我國にては無之く誠に珍らしく存候.

先づ之にて筆止め申べく何卒此御手紙が恙なく御手許に屆き直に御返信下さるやう希望仕候.

君の友なる

ビユラ. フオツグ.

二伸. 貴國の女子にて英語をなされ候女子のあらせられ候はゞ其方々と通信致度候何卒御紹介願上候.

New Year's Resolution.

The year begins; and all its pages are blank· Let us begin it with high resolution; then let us take all its limitation, all its hindrances, its disappointments, its narrow and commonplace conditions, and meet them with patience, with obedience, putting ourselves in cheerful subjection, serving our apprenticeship. Who knows what opportunity may come to us this year? Let us live in a great spirit, then we shall be ready for a great occasion.

George Hodges.

新年の決心

新年は來れり，其頁は白紙にして記載を待てり．我等氣高き決心を以て之に筆を下さん．而して凡て今年に起らんとする束縛，阻碍，失望，偏狹にして平凡なる境遇等に對するに忍耐，從順を以てし，喜の服從に己を置き以て我等の業務を果さんを勉むべし。誰か今年に於て如何なる好運の我等に來らんとするあらんを知らんや。我等日々不拔の氣象を呼吸せん．然る時は一旦大時勢の起らんも我等の準備は整頓し居るべし。

"Winter stays not long,
nor night, nor cloudy skies,
Spring cometh in apace,
and sunny morns arise!"

冬の宿りは　永からず，
曇れる空も　闇の夜も。
春は急ぎて　翔來り，
輝く朝は　目醒むなり。

Sanford, Maine.
Sept. 1905.

My dear friend,—

Received your postals for which I thank you. They were indeed very pretty and, as I am also making a collection of souvener postals, came very acceptable. I have nearly one hundred in all and always delight, when showing them to my

サンフヲルド，メイン．
九月，一千九百五年．

我友よ．

繪葉書落手致し有難く御禮申上候．誠に美くしく私事も紀念繪葉書集め居候事とて大に意に適ひ申候．只今では總てにて殆ど百枚も御座候．友人なぞに見する毎に何時も是等は日本の友

Ring out old shapes
of foul disease:
Ring out the narrowing
lust of gold;
Ring out the thousand
wars of old,
Ring in the thousand
years of peace.

鳴り送りませ　忌しき
罪と病の　姿をば.
黄金の熖　打拂ひ,
修羅の勢　追ひやりて,
平和の年を　迎へかし
千代に八千代の　末かけて。

"Happy New Year."

In the first days of a new year we all say to our friends and neighbors, "Happy New Year!" Our hearts are full of glorious feelings and wishes for all we meet. But what can we do to give them a happy new year? We cannot compel their circumstances into fortunate adjustments, so as to produce happiness. Besides we cannot know what would be the truest and best blessings for our friends.

After all the only really safe thing is to pray that God may be with them through the year, and may bless them in his own best and truest way. He knows better than we do what is the best blessing.

P. Brooks.

新年はお目出度う

御正月に私共は友人や近所隣の人々に「御目出度う」と申ます。銘々の心は出逢ふ人毎の幸福を祈る念や，嬉しい思ひて満ちて居ります。併し實に喜はしい新年を他人に如何して上げる事が出來ましようか。我々は,他人に幸福が來れかしとて其人の境遇を强いて多運の方向に向はしむる力はありません。且又我等の朋友の實の祝福，最上の幸福は何なるやをも知り能はざる者です。

畢竟，慥な唯一の方法は即ち天(神)に此一年間汝のよしと思ひ給ふ通りに彼等を恵み給へと祈るより外はありません，全能者なる神は，最上の祝幸とは何んてあるかを我等より遙によく御存知です。

女子文壇第二卷

英文

津田梅子閲　河井道子述

Hearty Greetings and Good
Wishes for a Happy New Year.

謹賀新年.併せて御幸福を祈る.

Ring in, Ring out.

Ring out, wild bells,
to the wild sky,
The flying cloud, the
frosty light:
The year is dying in
the night;
Ring out, wild bells, and
let him die.
Ring out the old,
ring in the new,
Ring, happy bells, across
the snow:
The year is going,
let him go;
Ring out the false,
ring in the true.
Ring out false pride
in place and blood,
The civic slander,
and the spite;
Ring in the love of
truth and right,
Ring in the common
love of good.

福は内，鬼は外.

撞響きませ　鳴鐘よ，
嵐の空に　寒天(ソラ)に
暇なく翔り　行く雲に。
歳は逝きなむ　此夜半に
去るを止どめて　鳴れよ鐘。
鳴り送りませ　舊年を，
鳴り迎へませ　新年を.
鳴れ面白の鐘　雪越へて.
歳は去るとも　なとゞめそ，
邪をば追やり　正を入れよ。
鳴り出しませ　氏，地位の，
虚榮，讒謗　憎惡をば。
鳴り迎へませ　永久(トコシヘ)に
眞誠，正義の　愛慕と，
善を樂しむ　心をば。

本誌大飛躍　雜誌界空前の刷高實に五萬部に達す以て其價値を推知すべし

《愛に麗々しく版數を刷出せず》

選評大家（文學士沼波瓊音先生、廣津柳浪先生、河井醉茗先生、佐々木信綱先生、巖谷小波先生、山中古洞先生）

○論文　○抒情文　○叙事文（各牛紙廿四字詰三十行以內）

○消息文（牛紙廿四字詰二十行以內）　○はがき文（端書かな付廿四字四行）

○短編小説（牛紙總かな付廿四字六十行內）　○新躰詩（牛紙一枚十句以內）

○和歌（牛紙二ッ切一枚一首）　○圖畫（一寸の二寸判風俗景色）

○新舊俳句（はがき判紙一枚一句）

但着色無用可成鴈皮紙を用ゆ

▲各欄とも一人佳作一章宛投稿の事

賞與品

○論文○抒情文○叙事文○消息文○小説○圖畫の當選者へは左記の相當價格品選定の上贈與すべし

▲天賞　金壹圓五拾錢　▲地賞　金壹圓　▲人賞　金五拾錢

▲特別賞▼（正金を呈す）一等金三圓、二等金貳圓、三等金壹圓五拾錢

○新體詩○はがき文○和歌○俳句の當選者へ贈與品左の如し

▲天賞本誌三ヶ月分　▲地賞同二ヶ月分　▲人賞同一ヶ月分

▲特別賞▼（正金を呈す）一等金壹圓、二等金七拾錢、三等金五拾錢

每回の本誌により當選者は贈品に差支へざる樣前以て住所氏名を通知あれ○賞品は發表二ヶ月の後に故障なき者へ美麗なる名譽褒狀を添へ贈呈すべし

【投稿〆切＝每月十五日】

▲嚴守すべき投書規定必一讀を要す

○投書は各欄とも決して政治的時事論に涉るべからず、○用紙は規定の紙に限る○投書は一行廿四字詰に認むべし、但し句點も一字に數ふべし○投書には題の下には必ず本誌に倣ひ住所姓名を明記し書證は楷書にて假名は平假名を用ひ明瞭なるを要す○各種の投書は必ず別に認むべし○封筒には『原稿在中』の文字を記すべし○投書の中には他の用事の文句を記すべからず○投書には各自句點を施すべし、圈點は一切施すを禁ず○投書は他人の作物を剽竊するを禁ず之を犯したる當選文は無効たるべし○投書は一切返附せず○此規定に背く原稿は一切沒收す○投書は不足、未納税は一切受取らざるべし○投書丈け取纏郵送するときは開封にして差出せば廿匁迄二錢にて事足れり

【最寄書店になくば直接發行所へ注文をこふ】

定價

女子文壇（每號水彩畫口繪數葉挿入）每月一日發行　第二卷より增刊年四回

一册（六百二十頁判）	前金拾錢
六册	前金五拾七錢
十二册	前金壹圓八錢
十六册（增刊ト共）	前金壹圓四拾錢

內地は直接申込に限り郵税全廢無料とす

外國行郵税共拾四錢

（坪內讀本）

注文心得

○本誌は前金の外送本不致候○代金過不足のなき樣注意被下度候○領收書は一切差出さず候○御注文每に何號より何册及御住所氏名等は詳細に御認め可被下候○郵券代用は必ず定價の壹割增に願上候○御問合は返信料付に願上候▲御申越の號數賣切の時は近刊の分を以て送本可仕候▲缺本にならぬ法▼：前金拂込むに限る

廣告料

種別	普通	特別（表紙四面口繪對面）
一頁（二十四字六十行）	金拾五圓	金貳拾圓
半頁（二十四字三十行）	金八圓	半頁以下御斷申上候
一行（五號活字二十四字）	金參拾錢	効顯著大

申込發行前十五日

▲廣告大取次（神田區千代田町二番地　博報堂／京橋區南佐柄木町二番地　日本廣告株式會社／神田區花房町九番地　富士原秀穗）

明治三十八年十二月廿九日印刷
明治三十九年一月一日發行

無比廉價 金拾錢

不許轉載

（二卷第一號）

編輯兼發行者　東京市京橋區大鋸町十一番地　野口竹次郎

印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　石川金太郎

印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社　秀英舍

發行所　東京市京橋區大鋸町十一番地　電話＝【本局六〇七番】　女子文壇社

特約　東京市神田區表神保町三番地　東京堂書店
東京市京橋區尾張町二丁目廿六　東海堂
東京市日本橋區吳服町十六番地　北隆館合資會社

發賣元　東京市神田區裏神保町一番地　上田屋書店
東京市京橋區鎗屋町九番地　巖明堂

【明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可】



ール定價
大瓶金四拾錢
小瓶金貳拾五錢
（女子文壇の廣告により御注文の節は其旨書添へを乞ふ）

女子文壇 最廉無比
定價金拾錢
郵送無料

（東京秀英舍印刷）